

地域交流センター年報

令和6年度

VOL.27



三重県立看護大学
地域交流センター

巻頭言

日頃より、三重県立看護大学地域交流センターの活動に、ご理解ご支援賜り厚く御礼申し上げます。地域交流センター年報令和6年度第27号の発行にあたりましてご挨拶申し上げます。

地域交流センターは、県民の健康に寄与するために研究成果の還元事業や看護職の資質向上に寄与するリカレント教育等を開学当時から継続して実施し、第三期中期目標期間の4年目となる令和6年度も以下の事業を展開することができました。

県民向け講座では、県民の健康維持増進を目的に「県民のヘルスリテラシー向上支援事業」や出前講座・リクエスト講座、また年間3回開催している「公開講座」は、広く県民や関係団体等にも周知され、三重県内から延べ4421人の参加がありました。

看護職者を対象とした講座では、県内の保健・看護力向上を目的に「みえ保健・看護力向上支援事業」や看護職向けの出前講座・リクエスト講座、また看護研究遂行能力を強化する目的で看護研究の基礎から具体的な看護研究方法、看護研究発表会支援を行う「看護研究支援事業」を充実した内容で提供できました。三重県から受託している事業としては、認知症の人と接する機会が多い病院勤務看護職や認知症の人への支援体制構築の担い手の育成を目的に病院勤務外の専門職対象の「認知症対応力向上研修」を実施しました。その他にも、助産実践能力の向上を図る目的に「新人助産師合同研修」を年4回、「助産師（中堅・指導者）研修」を年3回、県内の母子保健対策の充実を図ることを目的に「母子保健体制構築アドバイザー事業」を展開しました。

リカレント教育では、県内病院等のニーズが高かった認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」を特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同して令和4年度から開校し、令和6年度の3期生で54名の認定看護師修了生を育成することができました。開校当初からの計画どおり、令和6年度第3期生の修了をもって3年間の教育課程の幕を閉じます。関係機関、関係者の皆様のご尽力・ご支援のお蔭で継続的に感染管理の認定看護師を輩出できましたことに、深く感謝申し上げます。また、認定看護師（感染管理認定看護師）フォローアップ研修を年間3回開催し、修了生のフォローアップを継続して実施していきます。以上のリカレント教育を含む看護職者等を対象とした講座は145件の講座を開催し、延べ1982人の参加者がありました。

次年度も地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の一層の充実を図ってまいりますと存じます。皆様には、引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

令和7年3月
地域交流センター長
宮崎 つた子

目 次

・巻頭言

I. 教員提案事業

1. 看護職者に向けた取り組み(みえ保健・看護力向上支援事業)

1) 看護職者を支援する相談窓口事業	1
2) 実践につながるフィジカルアセスメント	3
3) 障がい児の切れ目ない就学支援事業	4
4) 医療施設に広げよう看工連携による 特許の輪(その2)	8
5) シコウUpgrade♾ー医療機関の高齢者看護	9
6) 仲間とともに育ち合う教育実践講座	12
7) Brush up! 急性期看護 Vol.2	13
8) 「心電図を読もう! 基礎編」	14
9) 新任期保健師の災害時における公衆衛生看護活動支援事業	16
10) 看工連携ものづくりシーズ発掘 (その2)	18

2. 県民に向けた取り組み(県民のヘルスリテラシー向上支援事業)

1) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援	19
2) おいさないさ、みかん大ミニ講座	22
3) みかん大ヘルシーウォーキング体験会	24
4) 看護と情報リテラシー	26
5) 「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援	28
6) みかん大 暮らしの保健室	31
7) 僕たち私たちでも出来る! 夏の危険から身を守るための基礎講座	33
8) みかん大哲学カフェ	37
9) がん患者を有する家族: 就学生の集い- I can cope with family -	39
10) Re-mamma ReCafé (リマンマ リカフェ)	41
11) 「英国アフタヌーン・ティー」@みかん大	43
12) 看護職を目指したい小・中学生支援 「スピーチ・コンテスト」@みかん大	46
13) こどもたちに「自分のからだ」を伝える事業	48
14) 災害に備えよう	51
15) 社会的に養育が必要な子どもとその子どもを育てる家族の交流 および活動支援事業	54

II. 卒業生支援事業

1. 卒業生支援プロジェクト	57
2. 卒業生のきずなプロジェクト	60

III. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修	65
2. 助産師(中堅者・指導者)研修	69

3. 三重県認知症対応力向上研修	
・三重県看護職員認知症対応力向上研修	73
・三重県病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修	77
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業	81
IV. 認定看護師教育	
1. 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」	87
2. 認定看護師(感染管理認定看護師)フォローアップ研修	89
V. 地域交流センター企画事業	
1. 講師派遣	
1) みかん大出前講座	91
2) みかん大リクエスト講座	94
2. 看護研究支援	
1) 看護研究SEED	97
2) 看護研究エッセンス	101
3) ハウツー看護研究	103
4) 施設対象看護研究支援(施設単位看護研究支援・看護研究発表会支援)	105
3. 公開講座	109
VI. 連携	
1. 連携協力協定	113
2. 県内病院等看護管理者意見交換会	115
3. 人事交流教員支援	118
VII. その他	
1. 情報発信・広報活動	121
2. 各種事業案内	125
・編集後記	

I . 教員提案事業

I. 教員提案事業

【事業要旨】

教員提案事業は、本学教員の教育・研究の成果を地域に還元することを目的としており、本学教員が各自の専門性を活かして、提案し実施する地域貢献事業です。また、大学が保有する人的・物的資源を効率的に活用しながら、成果に繋がりたいと考えています。

事業は、看護職者対象の『みえ保健・看護力向上支援事業』、県民の皆様対象の『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』を企画しております。『みえ保健・看護力向上支援事業』は、保健や看護力向上を目指した支援事業の実施を、『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』は、教員の専門性を活かし、地域住民のヘルスリテラシー向上を目指す事業内容となります。なお、令和4年度から関連するSDGsの目標を掲げて活動しており、今年度は下記の9の目標にアプローチしました。

SDGs 「Sustainable Development Goals」	目標に アプローチする 事業数
3.すべての人に健康と福祉を	17
4.質の高い教育をみんなに	11
5.ジェンダー平等を実現しよう	2
8.働きがいも 経済成長も	2
9.産業と技術革新の基盤をつくろう	2
10.人や国の不平等をなくそう	1
11.住み続けられるまちづくりを	2
16.平和と公正をすべての人に	1
17.パートナーシップで目標を達成しよう	2

『みえ保健・看護力向上支援事業』

No	事業名
1	看護職者を支援する相談窓口事業
2	実践につなげるフィジカルアセスメント
3	障がい児の切れ目ない就学支援事業
4	医療施設に広げよう看工連携による 特許の輪(その2)
5	シコウUpgrade? - 医療機関の高齢者看護
6	仲間とともに育ち合う教育実践講座
7	Brush UP! 急性期看護 vol.2
8	「心電図を読もう! 基礎編」
9	新任期保健師の災害時における公衆衛生看護活動支援事業
10	看工連携ものづくりシーズ発掘(その2)

『県民のヘルスリテラシー向上支援事業』

No	事業名
11	在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援
12	おいないさ、みかん大ミニ講座
13	みかん大ヘルシーウォーキング体験会
14	看護と情報リテラシー
15	「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援
16	みかん大 暮らしの保健室
17	僕たち私たちでも出来る！夏の危険から身を守るための基礎講座
18	みかん大哲学カフェ
19	がん患者を有する家族：就学生の集い - I can cope with family -
20	Re-mamma ReCafé(リマンマ リカフェ)
21	「英国アフタヌーン・ティー」@みかん大
22	看護職を目指したい小・中学生支援「スピーチ・コンテスト」@みかん大
23	こどもたちに「自分のからだ」を伝える事業
24	災害に備えよう
25	社会的に養育が必要な子どもとその子どもを育てる家族の交流および活動支援事業

1. みえ保健・看護力向上支援事業

1) 看護職者を支援する相談窓口事業

担当者：中西貴美子、小池敦、安部彰、上田貴子、多久和有加

【事業要旨】

三重県内の病院看護部の管理部門を対象に、キャリア・看護管理、教育・進学等に関する相談に対応し、組織の問題解決を支援する。また、社会的な背景から、病院看護部の管理部門が抱えていると思われるテーマを取り上げ、話題を提供するとともに、ディスカッションをする場を定期的に設け、組織内で解決するヒントとなるような機会を提供する。

【地域貢献のポイント】

施設の看護部が抱えている問題・課題について支援する場所が増えることによって、相談しやすくなり早期解決につながる。また、大学という第三者の立場からの支援は新たな視点での取り組みとなり、必要な組織の変革を促進することができる。以上のことによって三重県内の施設の看護の質の向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

令和5年より第2期として相談事業を継続している。従来から地域交流センター事業として開催されている「病院等看護管理者意見交換会」と並行して、病院施設相互の意見交換を主とする本事業を継続し、県内施設に貢献していく。

I. 活動計画

[重点課題] 相談窓口について、県内病院への認知度を高める。

[数値目標] 意見交換会において前年度より多くの出席者が参加する。

[実施計画]

1. 看護職者を支援する相談窓口事業企画として、看護管理者情報交換会を実施する。
2. 県内病院への認知度を高めるための企画を検討する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 意見交換会

1) テーマ：三重の看護の未来を語ろう

2) 開催日時：令和7年1月28日（火）13：30～15：00

3) 参加方法：対面（およびオンライン）会議

申込時に対面かオンラインかの方法の選択ができるようにしたところ、対面とオンラインのハイブリットでの対応となった。

4) プログラム

13：30～14：00 話題提供（担当：中西）

14：00～14：40 意見交換

14：40～15：00 意見共有・まとめ

5) 当日参加者数 9施設 14名 (令和5年度：5施設11名)

6) アンケート結果 (回答数14件：回収率100%)

(1) 参加方法

対面：6名 オンライン：8名

(2) 企画の内容

希望に沿う内容：とてもそう思う5名(35.7%)、そう思う8名(57.1%)
どちらかというと思う1名(7.1%)

(自由記述) 自分の経験や思いを振り返る機会となった
看護を自分の言葉で語る事が大切だと思った

役に立つ内容：とてもそう思う5名(35.7%)、そう思う9名(64.3%)

(自由記述) 管理者のさまざまな管理観を聞くことができた
院内でもこのような場を設けたい

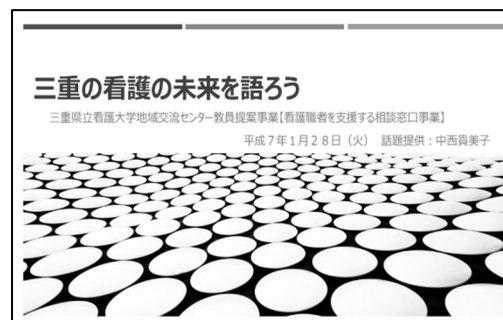
(3) 開催方法 (ハイブリット)：よかった：12名、他の方法：2名 (対面希望)

(自由記述) 急な用件が入った場合など変更できるハイブリット開催がよい

(4) 今回の企画に対する満足度 (1～5点)：平均4.3点

(5) 今後の企画の希望

ざっくりばらんに話す時間があるとよい
管理者が元気になれる研修



2. 相談窓口事業

1) 相談件数：0件

2) 県内病院への認知度

相談事業におけるアンケートでは全員から関心があると回答を得た。

[評価]

意見交換会について、昨年度より参加施設数および出席者ともに増え、またアンケートでは良い結果を得られた。今後も継続し、参加者を増やし活発な意見交換ができるよう工夫が必要と思われる。

相談事業について、実際の相談はなかったが、意見交換会で2名から相談したいという回答を得た。今後、個別に対応して行く予定。

Ⅲ. 今後の課題

相談事業の認知度を高めるためにも、9月に大学主催の看護管理者意見交換会において、企画の情報が提供できるよう準備を進め、参加者の増加を図る。

2) 実践につなげるフィジカルアセスメント

担当者：岡根利津

【事業要旨】

県内の認定看護師や呼吸療法士が講師を担い、現場のニーズに沿った「呼吸ケア」に関する研修を企画・開催する。年度ごとにサブテーマを設定し、講義やグループワークなどを取り入れながら、実践につなげる知識を習得できることを目指す。

【地域貢献のポイント】

呼吸ケアに関する研修を継続的に県内で開催することにより、標準的な知識の普及とアセスメント力の向上につながる学習の機会を提供することができる。また、コメディカルを対象とすることから、個人の能力の向上のみならず、多職種間の共通認識が促進されチーム医療の質の向上にもつながると考える。

【昨年度からの課題】

参加人数について、感染症の拡大状況に伴う臨床現場の状況を鑑みて開催時期を検討し、数値目標達成に近づけることが課題であった。

I. 活動計画

[数値目標]

参加人数（ハイブリッドでの開催を想定） ①オンライン：20名 ②対面：20名

[実施計画]

感染症の拡大状況を考慮して、開催時期を決定した。

- 日時：令和6年10月5日（土）13:00～17:00
- 開催方法：対面もしくはzoomでのオンライン参加
- プログラム：いまさら聞けないバイタルサインの基本
ワークショップ①
いまさら聞けない検査・画像の解釈と早期離床
ワークショップ②

II. 活動の結果と評価

[結果および評価]

県内の急性期看護を担う施設に研修開催案内を送付し参加者を募ったが、応募人数が少なかったため講師と検討し開催をとりやめることとした。本事業は令和元年より2期6年間にわたり継続し、今年度で終了となる。途中COVID-19の影響を受け実施できない年度もあったが、これまでに4回の研修を開催し110名を超える方に参加していただくことができた。

III. 今後の課題

最終年度は研修の開催に至らなかったが、これまでの研修後のアンケートから参加者の満足度は高く、今後も急性期看護に携わる看護師のニーズに適した継続学習の支援に関する取り組みを継続していくことは重要であると考えます。

3) 障がい児の切れ目ない就学支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、川瀬浩子、中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医療的ケア児）が在籍する特別支援学校・保育園・幼稚園等に勤務する看護職等の専門職は、配置される同職者が少なく、不安や戸惑いなどの困難感を抱えている現状にある。本事業は、医療的ケア児に対応する専門職同士の情報交換や資質向上を図ることを目的とした交流の場づくりを支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

行政・教育・医療・福祉の専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、教育や福祉の場に携わる専門職者の交流を求めるというニーズへ対応する。医療的ケア児が通園する保育園、幼稚園、認定こども園等に勤務する看護職は、1人配置のことが多く、日々不安や戸惑いなどの困難感を抱えている現状に対し、配属施設を超えた専門職同士の情報交換や交流の場を通してネットワークづくりを支援する。

【昨年度からの課題】

開催内容の周知、開催日程や開催方法等を検討して、県内の遠方からも参加できるように工夫する

I. 活動計画

[数値目標]

1. 事業の開催：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
3. 参加者：5名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

[実施計画]

1. 事業実施のための広報：行政や教育機関等と連携し、参加者への広報活動を行う。
2. 事業の実施
 - 1) 対面開催を中心に、遠方からも参加しやすいオンラインも活用して交流会を開催する。
 - 2) 事業評価のためのアンケートを実施し、参加者の満足度、困難感の程度、得られた知見等について評価する。
 - 3) 学生ボランティアを募集し、事業に参加・協力することで、学生の医療的ケア児を取り巻く環境や子どもの学ぶ権利などの理解を深める機会とする。
3. 事業の反省会の実施：反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 障がい児の切れ目のない就学支援に関わる関係者の意見交換会

1) 概要

(1) 日時・場所・方法

令和7年2月21日(金)14時00分～16時00分 於：三重県立看護大学
終了後、別室で個別の意見交換 16時00分～16時30分
参加者50名(会場参加26名とオンライン参加24名)

(2) 参加者・関係者の職種

看護職(看護師・保健師):31名、 保育職(保育士・幼稚園教諭):6名
行政関係者:4名、 教育委員会(教諭):2名、 相談支援専門員:2名
本学関係者:学生2名、本学教員3名(看護師・助産師)

2) 意見交換について

本事業の趣旨と取り組みについて説明し、以下のプログラムを行った。

(1) 第1部：医療的ケア児の養育者に関する調査報告

- ・在宅療養児のきょうだいに対する母親の思い
- ・医療的ケア児の家族のソーシャルサポート

(2) 第2部：参加者(A市・B市・C市)からの話題提供と意見交換会

- A市の小学校に進学した医療的ケア児を保育園で担当していた看護師が、そのまま継続して採用された事例が紹介された。その話題提供の一部は、教育委員会と福祉部門で共通認識を持ち部局を超えた連携や細かい状況を把握しながら準備を進め、現在に至った経緯と対策等について情報提供があった。
- A市を参考に各市町、各関係機関、専門職としての以下の意見交換があった。行政の縦割り・横割りの役割の中でネットワークをつなぐ取り組みについて、福祉と看護師のサポート体制について、地域差による福祉支援の体制の差について意見交換を行った。
- B市(対面参加者)およびC市(オンライン参加者)から、保育園に通っていた医療的ケア児の事例紹介や防災対策についての話題提供があった。
- その他、保護者の希望、情報共有の重要性や現実と課題、今後の展望などについて各市や関係機関からの意見交換がなされた。
- 医療的ケア児の支援ネットワークと通学支援について、相談支援専門員から以下の情報提供があった。
 - ・医療的ケア児支援ネットワーク(県内の4つのネットワーク)について
 - ・看護師が付き添い、事業所の車両で学校への登校支援制度の紹介(2023年度の調査では、地域の小中学校に通う医療的ケア児は43人)。通学支援の回数制限があるが、親からは非常に好評、特別支援学校の通学支援手続きなどの課題について説明があった。
- 法律と財源の課題について意見があった。

オンライン参加者が見えている
会場内の風景

オンラインの参加者が会場参加者
に確認できる画面（発言時は発表
者画面がアップされる）の様子



写真1：会場参加者とオンライン参加者の画面と向き合って意見交換をしている風景

3) アンケート結果

アンケート回収数：33人（学内関係者を除いた参加者：回収率73.3%）

本事業の満足度：満足度の平均値3.61点

1.本事業の満足度について			
①満足	②やや満足	③やや不満	④不満
20	13	0	0
60.6%	39.4%	0.0%	0.0%

<そのように思った理由（一部抜粋）>

- ・職種や市町を超えて、さまざまな様子を聞くことができた。
- ・他市町の保育園での医療的ケア児について生の声が聞けて勉強になりました。
- ・三重県内の市町の取り組み、課題、医療的ケア児支援法成立後の体制整備が進んできていることを知ることができた。
- ・知らない事業のことも知ることですさらに切れ目のない支援も目指していけるのではないかなと思いました。
- ・調査報告2題の発表から保育園看護職として自分の役割について考えることができた。また、保育園看護職の勤務体制の実情について知ることができ、切れ目のない支援ができるように体制を整えていきたいと思いました。
- ・看護職の応援体制、通学支援が広がり、医療的ケア児、その家族が願う教育が受けられるようにしていきたいと思いました。
- ・調査報告が興味深い内容でした。意見交換会では他市の貴重なお話が聞け、参考にさせていただきたいと思います。
- ・A市のお話しがとても良く、年中さんの時期から動けるのは、本当に保護者にとって良いと思いました。
- ・兄弟に関する母親の思いを考える機会となった。C市では今年度きょうだい児に視点を当てた研修会があり考えることが大きかった。母親や祖父母の視点か

らも直接思いを知るきっかけとなり、今後の支援に必要と感じる。

- ・参加者の意見交換会では、医療的ケア児の入園・就学について他市町の状況を伺うことができて良かった。

<本事業への要望（一部抜粋）>

- ・実際に保護者に相談を受けた場合、つなげるようネットワークについてもっと知りたい。
- ・なかなか、福祉と教育の連携ができておらず、学校側からの参加をしてもらい、実情を知ってもらえる取り組みがあればと考える。
- ・医療ケア児を受け入れている小学校側の意見も聞いてみたいと思いました。
- ・これからもこのような機会を通じて小学校や保育園においてより良い医療的ケアが行っていきけるよう現場の声も拾って行って欲しいと思います。
- ・他の市町の方と意見交換できる場があることは良いと思います。
- ・引き続き、意見交流会の開催を希望いたします。
- ・他市の状況や専門職の方の意見を拝聴できる機会は貴重なのでありがたいです。
- ・これからもこのような会があったら参加して、色々な情報を知りたい。
- ・貴重な機会を設けていただき、ありがとうございます。今後も続けていただきたいと思います。
- ・他市の取り組みや情報を共有できることがとても素晴らしいので今後も続けていっていただければ共に考えて行けるのでありがたいです。
- ・医療的ケア児の防災について希望します。

[評価]

目標値についてはすべて達成することができた。参加者アンケートの結果及び参加者の肯定的な声からも本事業の参加者の評価は高く、日ごろ交流の難しい保育所勤務の看護職がもつニーズに対応することができたと評価できる。また、各行政の課題についても他市の情報を共有することで、解決策の参考や糸口になったと思われる。

本学の学生や修了生も参加することができ、病院内の看護職とは違う行政や保育所の看護職の困難を知る機会になった。本事業は、各施設や市を超えた看護職のつながりやネットワークづくりの一助になったと考える。

Ⅲ. 今後の課題

保育所等に入所する医療的ケア児は、疾患や必要な医療処置・ケア内容が多岐にわたり、さらに個別性の高い対応が求められるなど、保育園・幼稚園等に勤務する看護職等の不安要因は多い。今後も、医療的ケア児に対応する専門職同士の情報交換や資質向上を図ることを目的とした学びの機会、ネットワークづくりを支援していく必要がある。開催は、オンラインでの参加を組み入れるなどしながら南北に長い県内各市のネットワークの繋がりを深めていくことが必要と考える。

4) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪(その2)

担当者：齋藤真、大川明子、大西範和、大平肇子、長谷川智之、菅原啓太、市川陽子、岡根利津

【事業要旨】

本事業は、地域の医療機関と連携して看護実践に役立つケア用品の開発を目的とする。具体的には、県内の各医療施設のスタッフと本学教員がファシリテータとなって看護における困りごとを話題に「発明ブレインストーミング」を行う。そこで話し合った内容について各施設の知的財産となり得るか検討し、必要に応じて研究対象とする。また研究対象となった場合は、院内研究として活用することも視野に入れる。

【地域貢献のポイント】

「医工連携」は多々あるが、「看工連携」の活動例はない。地域の医療施設の看護部が知財を保有し、それを有効に活用している例は皆無である。県立大学が地方の医療機関を活性化する手段として、知財発掘とその有効活用が地域貢献である。

【昨年度からの課題】

今年度も新型コロナウイルスやインフルエンザなどの感染症の拡大防止のため、活動は停止している。感染症の影響がなくなり次第、各医療機関に出向いて「発明ブレインストーミング」を開催することができるよう準備を進める。

I. 活動計画

<重点課題>

地域の医療機関に「知的財産」の必要性、「看工連携」の概念を広める。

<数値目標>

年間5件程度の医療機関に参加してもらうことを目標とする。

II. 活動の結果と評価

<結果>

令和元年度に3病院を対象に「発明ブレインストーミング」を開催したが多くの病院が外部者の訪問に制限を加えていることから、事業を停止している。

<評価>

令和6年度は開催していないため、評価は困難である。

III. 今後の課題

さまざまな感染症の拡大が収束し、各医療施設の許可が下りた時点で「発明ブレインストーミング」を再開することになっている。

5) ショウ Upgradeのー医療機関の高齢者看護

担当者：田端真、清水律子、萩原由佳

【事業要旨】

高齢者は健康障害とともに生活することが多くなるため、医療機関の看護職者は高齢者のもてる力に着眼し、望む生活を見据えた目標志向型思考を用いていくことが大切である。そこで、看護職者が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深め、高齢者への看護の能力向上につなげることを目的に、医療機関の看護師を対象に講座を実施する。

【地域貢献のポイント】

1. 看護職者の老年看護に関する学習機会となり生涯学習の一環となる。
2. 医療機関における高齢者への看護の質の向上に寄与する。
3. 看護学実習受け入れ病院の学生への教育の質の向上につながる。
4. 高齢者の望みや生活（暮らし）を見据えた看護により地域包括ケアシステムの構築に沿う取り組みにつながる。

【昨年度からの課題】

1. 事業の目的に沿った活動に向け参加しやすくかつ確実に参加できる様式を検討する。
2. 受講後の変化や臨床での状況などのリアクションに着目し、個人および集団への効果について捉える。

I. 活動計画

[重点課題]

医療機関の状況に応じて本講座に参加しやすい様式を構築する。講座を受講することにより参加者全員が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深める。受講後の変化や臨床での状況などの効果を把握する。

[実施計画]

1. 連携協定病院を対象に看護部教育担当者と講座に関する打ち合わせを行う。特に、参加者の選定と開催方法は施設のニーズに応じて柔軟な*実施計画を立案する。
2. 看護師の交替勤務の状況から集合または個別のいずれかとして参加しやすい回数を設定し*、講座を開催する。
3. 年度末までに参加者に対して受講後の看護活動に関するアンケートを実施し、講座の評価および個人・集団への効果を捉える。

(*：昨年度の課題を反映)

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 講座の実施と内容

連携協定病院の看護部教育担当者と連絡調整を行い(図1)、4施設で講座を実施した。開催日時は、参加者の勤務等の状況から9月2日・15日・17日、10月15日、

11月7日・21日、12月12日・19日、1月16日とし、時間は看護部教育担当者と柔軟に調整した。参加者は、本講座の内容の定着のために継続して参加したいという意向を受けて一昨年や昨年度の参加者を含めた39名であった。各施設の会議室や研修室にて、パワーポイントの映写と配布資料を用いて45分程度で講義形式の講座を行った。

内容は、①高齢者への看護の考え方、②目標志向型思考とはどんな思考か、③事例を用いての目標志向型思考による看護展開の例示とした。

2. アンケートの結果

1) 参加者の属性と受講後の反応

講座後に参加者へのアンケートを行った。

アンケートは39部配布し、本年報への使用に同意が得られたのは38部であった。参加者の属性を表1、参加者の反応を図2および表2に示す。なお、今年度が事業の最終年度であるためこれまでの2年間分を含めた3年間のべ数やのべ%もあわせて示す。

本講座の参加者の年代は今年度と3年間のべともに、20代から50代と幅広かった。本講座の受講を通して講座のタイトルにある「シコウ」を漢字で表すなら、という問いには、3年間のべで約5割が「思考」であり、その他「志向」「思向」「試行」「嗜好」など20の漢字があげられた。

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための要点を知ることができましたか、については「できた」の回答が今年度と3年間のべともに約7割、「目標志向型思考」を理解することは高齢者看護の能力の向上につながると感じますか、については「思う」の回答が今年度と3年間のべともに8割以上であった。

表1 参加者の属性

項目	内訳	今年度	3年間のべ
年代	20代	5	14
	30代	11	31
	40代	12	34
	50代	10	25

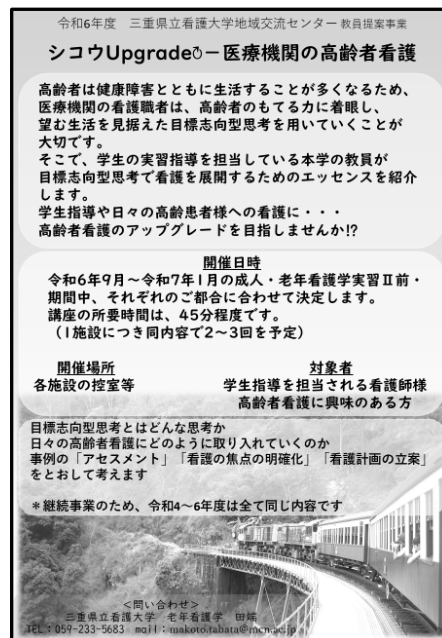


図1 事業チラシ

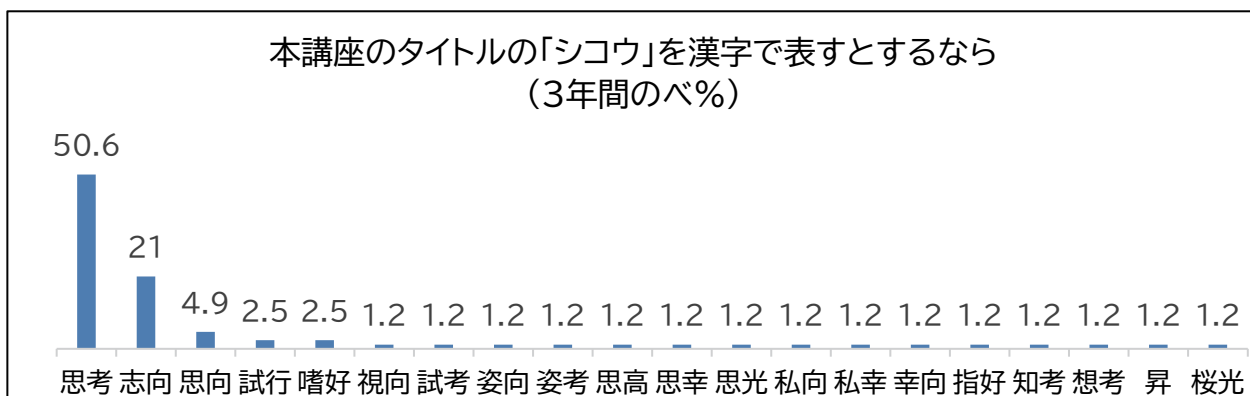


図2 参加者の反応①

表 2 参加者の反応②

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための 要点を知ることができましたか	できた	少し できた	あまり できなかった	できなかった	無回答
	今年度	26	11	0	0
3年間のバ	76	27	0	0	1
「目標志向型思考」を理解することは高齢者 看護の能力の向上につながると思えますか	思う	少し 思う	あまり 思わない	思わない	無回答
	今年度	31	6	0	0
3年間のバ	88	15	0	0	1

2) 自由記述の内容

本講座の感想を自由記載として設定した。結果、「目標志向型思考は、対象のもてる力に着目し、それを伸ばせるよう活動していくこと、というポジティブなイメージが素敵だと思いました。」「目標志向型思考をすることにより、患者さんに対する捉え方、見方が変わってくると思うので、高齢化社会の中での看護実践においてとても有意義なのはと感じた。」「病棟では、患者の問題になるマイナスなイメージを持ってしまいがちなので、強みを考え伸ばしていくという目標志向型思考は患者のことをポジティブな方向に考えられてとてもいいなと思いました。」「看護の原点である考え方だと思います。特に回復期や終末期は、こういった目標志向型な看護の力が最大限に活かせる考え方だと思います。」など、高齢者看護における意義や活用したい状況を含めた感想が得られた。

3) 受講後の変化や臨床での状況などのリアクション

2回目や3回目の参加者に活用状況等をアンケートした。結果、「目標志向型思考で考え、高齢者の生活に及ぼす影響を考えながら計画立案するよう自分自身やスタッフへ声かけしていった。」「日々の看護の中で患者の強み、持てる力を意識できるようになった。」のように目標志向型で思考している意見が得られた。一方で「実際に計画立案などはしていませんが、高齢者に関わる際に意識しています。」「十分に活用できていないため、今後活かしていきたい。」のように意識はしても活用には至っていない意見もあった。

[評価]

重点課題に対応するため、参加者の勤務の状況を踏まえて看護部教育担当者と調整を行い、柔軟に講座開催日時を設定したことで参加しやすい体制であったと考える。今年度は、実施施設を2施設から4施設へと拡大し、繰り返しの参加者も含めた。アンケートでは、全員から目標志向型思考の要点の理解と高齢者看護の質向上にかかわるとの回答が得られ、目標志向型思考での看護の理解につなげることができたと考えられる。また、本講座の効果としては、参加者が目標志向型の思考を意識するきっかけになったと考えられる。

Ⅲ. 今後の課題

本事業は3年が経過したため終了する。しかし、アンケートには「目標志向型思考を普及していくようスタッフ教育が必要」のような意見もあり、チーム、病棟、病院などのように組織的な取り組みへと進めていくためには継続的な働きかけが必要である。

目標志向型思考で看護を展開するためのレディネスは、施設の役割や機能などから様々であると考えられる。したがって、今後は施設ごとのニーズに応じたより実用的な働きかけができるよう方策を検討し、活動していきたい。

6) 仲間とともに育ち合う教育実践講座

担当者：上田貴子、ドライデンいづみ、岡根利津

【事業要旨】

本事業は、後輩指導や学生指導など教育に携わる看護職者が、学びを通して教育能力を高めるための教育実践講座である。毎回テーマを決めて、調べる・作成する・実践するといった教育実践を行う。参加者全員がともに学び合うことで、自らの教育力を高めていくことを目指す。

【地域貢献のポイント】

- 看護大学の専門知の提供
- 大学施設設備（教室・情報処理室・体育館など）、情報機器（パソコン・プロジェクタ・マイク・実物投影機など）、通信サービス（インターネット通信・Wi-Fi）、教育用ソフト（統計ソフト SPSS・Office365 機能など）の活用機会の提供
- 大学図書館およびリファレントサービス（資料検索・データベースなど）の提供
- 県内看護職者の自己教育力向上に寄与

【昨年度からの課題】

令和5年度より開催している。本事業に関心を寄せる看護職者から個別に相談を受ける機会は複数回あったものの、参加申込には至らなかった。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 開催回数：3回程度
- ・ 事業参加者：3名以上／1回

[実施計画]

1. 参加者の募集（広報）
2. 運営方法
 - ・ 大学施設設備や情報機器等を使用して教育実践を行う。
 - ・ 教育実践は、グループ単位で、参加者一人ひとりが主体となっていく。
3. 教育実践の内容
 - ・ 教育活動に関連したテーマを設定し、テーマと関連する教育活動を特定する。
 - ・ 教育活動が「調べる」「作成する」「実践する」のいずれに該当するのかを特定し、教育実践を行う。

II. 活動の結果と評価

県内看護職者を対象に、学内・学外にて広報活動（パンフレット配布と説明）を行ったが、本事業への参加申込はなかった。一方で、病院施設等の管理者や教育担当者から出前授業として依頼を受けるケースがあり本事業の運営そのものを見直す必要があると考える。

III. 今後の課題

個別申込や対面開催について検討する必要がある、本事業は本年度をもって終了する。

7) Brush UP! 急性看護 vol.2

担当者：岡根利津、井上千彰、玉田章

【事業要旨】

三重県内の認定看護師（集中ケア・救急看護）が講師を担い、急性期看護に携わる看護師を対象とした研修を開催する。フィジカルアセスメントをはじめとする基本的な知識の習得を基盤として、アセスメントの言語化や教え方の学習など、臨床で役立つ学習の場を提供し、県内の急性期看護の質の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

三重県において、クリティカルケア領域に関する認定看護師や専門看護師などの熟練看護師は少なく、限られた施設に所属している状況である。本研修では、熟練看護師が連携し講師を務め、県内の臨床の状況を考慮し、さらにニーズに応じた研修を開催することで、施設ごとの教育の差の解消、標準的な知識を共有できる機会となり、急性期看護の質の向上につながると考える。

I. 活動計画

[数値目標] 参加人数：20名

[実施計画] テーマ：呼吸・循環・脳神経系のアセスメントのポイント

～今すぐ使える考え方を学び、実践につなげよう～

日時：令和6年11月2日（土） 9時30分～16時

研修内容：呼吸・循環・脳神経系に関する講義、状態変化時のアセスメントについて（事例を用いてアセスメント）

II. 活動の結果と評価

[結果および評価]

参加者は10名で、参加方法は対面9名・オンライン1名であった。参加者の看護師経験年数は、1-3年目が3名、4-6年目が1名、7-10年目が5名、11年目以上が1名であった。参加理由として最も多かったのは、「急変時の対応やアセスメントについて知識を深めたい」であり、その他には「後輩指導に活かしたい」などが多くみられた。研修後のアンケートより、満足度については、午前の講義および午後の事例のアセスメントともに、非常に満足が7名、おおよそ満足が3名であり参加者の満足度は高く、今後の実践に「活かすことができる」9名、「少し活かすことができる」1名であり、学習ニーズに適した研修内容であり実践につながる学びが得られたと評価する。

III. 今後の課題

これまでは、標準的な知識の共有や教育格差の解消など、県内の急性期看護の質の向上につなげていくために県内の認定看護師と共同して研修を開催してきた。今後は新たな事業の趣旨に即した方法で開催可能な事業について検討していく。

8) 心電図を読もう！～基礎編～

担当者： 関根由紀、菅原啓太、中野由佳

【事業要旨】

本事業は、昨年度終了した「心電図を読もう！」の続編として、心電図の基礎に重点をおき、基本的な波形を理解し臨床で遭遇する不整脈の判読を行い、日々の実践に活用できることを目的とする事業である。参加対象は、集中治療室や循環器病棟といった部署を問わず、心電図に興味あるいは苦手意識のある方とした。

【地域貢献のポイント】

県内の医療機関において日常的に心電図に触れる機会のある集中治療室や循環器病棟に所属する看護師に限らず、心電図に興味・関心、苦手意識のある方が参加できる事業である。研修会では、心電図波形の正常と異常の判読のコツ、そして各不整脈における対応を知り、それらの知識を臨床で活用できるようになることで看護スキルの向上や臨床に還元することができ、地域貢献につながると考える。

I. 活動計画

[数値目標]

本年度の参加目標数は、10名とした。広報活動は、県内の病院を対象に行った。

[実施計画]

企画運営の打ち合わせ：学内2回

日時：令和7年2月1日（土）13：00～16：00

場所：大講義室

プログラム内容：心電図の基本、基本波形を読む、基本的な不整脈を読む、リクエストのあった不整脈の説明と判読

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修会参加者

8月に県内医療施設17施設にチラシの送付を行い、参加者を募集した。研修会参加申込み者数は29名、当日参加者は24名（欠席5名）、そのうち3名は卒業生であった。看護師経験年数は1年目～22年目、平均看護師経験年数は8年であった。参加者の所属部署は、循環器内科病棟、救命救急センター、消化器内科病棟などであり、循環器病棟や救命救急センターへの部署異動などの方々の参加であった。

2. 研修会の内容

研修会のプログラムは、心電図の基礎を主として、臨床でよく目にする心電図波形

および不整脈の見方と対応に関する講義とグループワークによる演習とした。講義内容には、事前の調査で把握した参加者たちの知りたい不整脈も含めた。グループは、同じ施設で偏らないように4人1組とした。また、教員は2～3グループを担当し、演習のサポートを行い、参加者の疑問に対応し疑問解決に努めた。



3. アンケート結果

研修会終了後に Microsoft Forms を用いてアンケート調査を行った。その結果、回収率は70.8%、有効回答率は100%であった。

研修会の満足度は、満足82%、やや満足18%であり、その理由は、「それぞれの波形の定義について、分かりやすく説明していただけたため。演習問題があったのも理解が深まったと思う。看護が学べた。」「実際に心電図波形を読んでグループで話し合えたことで、なぜそのような判断になるのかわかりやすかった」などであった。その反面、「自分の事前学習が足りず、途中から理解が追いつかなかった」という意見があった。内容の理解は、理解できた94%であった。研修会内容の適切性では、適切であった76%、難しかった18%、優しかった6%であった。開催時期は、「この時期でよい」94%、「もう少し早い時期に開催して欲しい」6%であり、時期は夏を希望していた。

自由記述では、「参加して、勉強のモチベーションが上がりました。心電図は苦手ですが、判読できるようになりたいです。」「12誘導心電図についても学びたいと思いました。」また、実際に心電図波形を見れたらいい、もう少し時間があるといいなどの声があった。

[評価]

本年度の研修会も参加者数は予想を大きく上回り、数値目標は達成された。参加者のうち12.5%が本学の卒業生であり、卒業後も大学で学ぶ機会を提供することができた。

アンケート調査の結果から、今回の研修会の満足度は高く、参加者の背景より基礎編にしたことで難易度も適切であったと考える。開催時期や時間、内容も適切であったと思われる。研修会はグループワークとしたが、メンバーと相談できることや教員がファシリテートすることで講義内容の振り返りや共有につながった。これらのことから、本事業の目的は達成できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

本年度より心電図の基礎に重点を置き、継続事業として開催した。アンケート調査の結果から、研修会の内容は適切であり満足度も高かった。参加者より開催時間の延長を望まれる声や、実際の波形を見ながらの研修会の要望があった。そのため、短時間の延長や波形の見せ方の工夫の検討が必要である。開催時期は、初めて心電図に触れる方は早期の開催を望まれるが、現状と同時期で良いと考える。

9) 新任期保健師の災害時における 公衆衛生看護活動支援事業

担当者：清水真由美、日比野直子、中北裕子、杉山希美、荻野妃那、松本智美

【事業要旨】

新任期保健師（特に1年目）に対し、災害時における住民支援方法について知識技術の提供を行う。また、HUG（避難所運営ゲーム）を通じて、公衆衛生看護の実践能力の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

新任期の保健師に災害時の活動に関する知識技術を提供することで、公衆衛生看護活動の充実につながる。また、グループワークを通じて圏域を越えた保健師同士が交流することで、保健師ネットワークを促進することができる。

【昨年度からの課題】

研修終了が17時であったため、ラッシュアワーと重なり、帰庁時間が遅くなるという意見が聞かれた。次年度は午前より研修を開始し、遅くとも16時には研修を終了できるように調整していく必要がある。

I. 活動計画

[重点課題] 新任期保健師が災害時公衆衛生活動の必要性を認識するとともに、平時の活動において活動目標を持ち、実践力向上に努めることができるようになる。

[数値目標] 研修参加者数を20名程度とする。

[実施計画] 昨年度は13時～17時であった研修時間を10時15分～16時に変更する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修会の周知

三重県医療保健部の協力を得て、県統括保健師経由で県保健師・市町保健師等への研修の周知とチラシの配布を依頼した。

2. 研修会の開催

1) 日時：令和6年9月2日（月）10時15分～16時00分

2) 場所：三重県立看護大学 大講義室

3) 参加者：33名

4) 内容：

(1) 講義：「災害時の公衆衛生看護活動」 講師：中北裕子

(2) 報告：「紀伊半島大水害による想定外の被災に対応した保健師の保健活動」

講師：日比野直子

(3) 演習：「HUG（避難所運営ゲーム）から学ぶ住民支援方法」

講師：杉山希美、荻野妃那、松本智美

(4) HUG 振り返り・まとめ 講師：清水真由美

〔評価〕

参加者 33 名の経験年数の内訳は、1 年目 24 名、2 年目 5 名、3 年目以降 4 名であった。所属別内訳は、県 7 名、市町 26 名であった。なお、参加者 33 名のうち 8 名が本学の卒業生であった。

アンケートには 31 名から回答があった（回答率 93.9%）。研修を受けたきっかけは、「職場の上司や先輩からの勧め」が最も多く、次いで「本学からの案内」、「同僚からの誘い」であった。研修の内容に関しては、講義「災害時の公衆衛生活動」は、「満足」30 名、「やや満足」が 1 名であった。理由としては、『災害時の保健師の役割について学ぶことができ、実践に生かしていきたいと思った』

『市と県それぞれの保健師がどのようなことを考え何をするか具体的に理解できた』などがあつた。報告「紀伊半島大水害を振り返り今後備える」は、「満足」21 名、「やや満足」10 名であった。理由としては、『研究結果を聞き、具体的な保健活動について考える機会を持つことができたため』『実際経験した保健師の方の分析結果を学ぶことができて今後生かせると思った』などがあつた。

演習「HUG（避難所運営ゲーム）から学ぶ住民支援方法」は、「満足」26 名、「やや満足」4 名、「やや不満」1 名であった。「満足・やや満足」の理由としては、『災害時にどのように対応したらよいのか具体的にイメージすることができたため』『避難所運営の課題を体験して理解できた』など、「やや不満」の理由として『HUG の事前の説明と解説を丁寧に教えてもらいたかつた』があつた。

来年度の本研修への参加を同僚や後輩保健師に勧めるかどうかについては、「勧める」30 名、「どちらともいえない」1 名であった。研修時間に関しては、「満足」30 名、「やや満足」1 名であった。理由としては、『1 日かけてしっかり学ぶことができたため』『参加しやすい時間帯だつた』などがあつた。

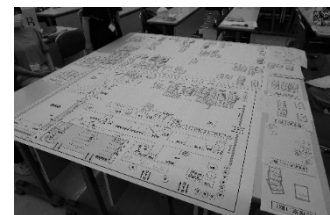
研修参加者数は、目標を達成できた。研修内容・時間についての満足度は高く、保健師活動への有用性についても評価が得られた。一方で、災害研修への参加経験者も見受けられるようになり、HUG 経験者の多寡が HUG 演習のグループワークの進捗やアウトプットに影響を与えていた。

Ⅲ. 今後の課題

研修参加者の満足度は高いため、次年度も同様の研修プログラムを継続する。しかし、HUG 演習におけるグループの学習効果をより高めるためには、HUG 経験者数が均等になるように、グループ分けを行っていく必要がある。



講義



HUG 演習

10) 看工連携ものづくりシーズ発掘（その2）

担当者：市川陽子、齋藤真、大西範和、大平肇子、大川明子、長谷川智之、片岡祐樹

【事業要旨】

本学は平成27年度から（独）工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に採択され、看護学と工学の接点から創出される知的財産の発掘に注力してきた。本事業は、知的財産の発掘活動のノウハウや各教員の専門性を活かして、臨床現場において必要とされている看護ケア用品を開発するためのブレインストーミングを行い、さらに地元企業と看護ケア用品等に関する意見交換を行う。令和6年度は、これまで続けてきた事業「看工連携ものづくりシーズ発掘」を「看工連携ものづくりシーズ発掘（その2）」に改名し、これまでの事業を継続するとともに、臨床現場のニーズに応じた製品が地元企業から創出されることを目指して、地元東海地方の企業との意見交換をおこなった。

【地域貢献のポイント】

本事業は、これまで本学で行ってきた知的財産の発掘活動のノウハウや各教員が持つ専門性を活かし、地元企業とともに臨床現場のニーズにあった看護ケア商品を開発することを目指している。地元企業が開発した看護ケア製品が地域医療で活用されることは、地域創生につながる。

【昨年度からの課題】

企業と共同研究し、製品開発を活発に展開する。

I. 活動計画

1. 看工連携ブレインストーミングを開催し、シーズ発掘につなげる。
2. 地元企業と共同で看工連携ブレインストーミングを開催する。（1件以上）

II. 活動の結果と評価

地元東海地方の企業（A社、B社）と共同で看工連携ブレインストーミングを2回開催した（9/19、1/27）。第1回の看工連携ブレインストーミングは、セラミック等のメーカーであるA社と共同でおこなった。A社がメディカル事業で扱う製品に関するプレゼンテーションを受け、その後、それら技術や製品の看護領域における活用について意見交換した。第2回の看工連携ブレインストーミングは、自動車部品等のメーカーであるB社と共同でおこなった。B社が開発しているセンシング技術を用いた生体計測等の説明およびデモンストレーションを見学し、その上で、看護領域における活用について意見交換した。製品の開発に看護学の知見を取り入れることを求めている企業と本学の看工連携事業の趣旨が一致し、地元企業と共同の看工連携ブレインストーミングを1件以上開催することができた。

III. 今後の課題

地元企業とともに看護ケア用品を開発し、開発品が地域医療で活用される。

2. 県民のヘルスリテラシー向上支援事業

1) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子、川瀬浩子、ドライデンいづみ

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医療的ケア児）や家族の現状について、その実際を知る機会は、地域住民あるいは当事者、また、支援を行う多職種もそれぞれの立場での一側面に限られている。本事業は、医療的ケア児とその家族の思いや現状について、当事者自身の声を直接届ける講演会や医療的ケア児の家族の交流の機会を支援し、県内で広く地域・社会の役割を知ってもらう活動である。

【地域貢献のポイント】

1. 本学の専門性の活用、研究成果の還元
2. 大学所有の機材、施設の有効活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 医療的ケア児と家族に関わる多職種と協同し、具体的な支援を考える機会の提供
5. 養育者の困難感の軽減

【昨年度からの課題】

開催方法は、対面開催を重視しながら、より多くの方が参加しやすいように多面的方法を検討する。また、医療職を目指す学生を始め、子どもと関わる職種等が参加できるように広報・周知を行っていくことが必要である。

I. 活動計画

[数値目標]

1. 講演会の開催：1回
2. アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
3. 講演会参加者：10名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

[実施計画]

1. 事業の実施
 - 1) 講演会や交流会開催団体等の選定（支援団体の選定）
 - 2) 講演会や交流会開催団体との調整
 - 3) 講演会や交流会開催の広報支援
 - 4) 対面、オンライン、もしくはハイブリッド等での開催を支援する。
 - 5) 事業評価のためのアンケート実施を支援し、参加者の満足度、アンケート結果から得られた知見等について、開催団体と共有・評価する。
 - 6) 学生ボランティアを募集し、事業実施に参加協力することで、学生の医療的ケア児を取り巻く環境の理解を深める機会とする。

2. 事業の反省会の実施

反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 三重県重症ケア家族会 SMILE 地域別おしゃべり会

1) 日時：令和6年7月14日（日）13:00～16:00

2) 場所：三重県立看護大学 会場：大講義室 その他：中講義室1・2

3) 参加者：47名

医療的ケア児とその家族38名（医療的ケア児10名、きょうだい児8名、大人17名）、支援者2名、ボランティア学生6名、教員4名

4) プログラム

- ・自己紹介～おしゃべり（子どもは、スタンプラリー）
- ・ゲーム（太鼓相撲大会）



2. 三重県重症ケア家族会 SMILE クリスマス会

1) 日時：令和6年12月22日（日）13:00～16:00

2) 場所：三重県立看護大学 会場：大講義室 その他：中講義室1・2

3) 参加者：79名：医療的ケア児とその家族53名（医療的ケア児15名、きょうだい児12名、大人26名）、支援者9名、ボランティア学生12名、教員5名

4) プログラム

- ・自己紹介
- ・ワークショップ（リース、ツリー、オーナメント）
- ・演奏会

5) 参加者・支援者アンケート結果：16名より回収（子ども、学生除き回収率40.0%）し、満足度の平均値は3.94点（4件法）であった。

【自由記述内容（一部抜粋）】

- ・子どもが触れて創作する時間もあり、音を感じる時間もあった、楽しかった。
- ・医療的ケア児やきょうだい児も、同じ空間で楽しむことができる貴重な場であ

った。

- 6) 学生ボランティアアンケート結果（学生ボランティア）：12名より回収（回収率100%）し、満足度の平均値は4.0点（4件法）であった。今後のボランティア参加希望は100%であった。

【自由記述内容（一部抜粋）】

- (1) ボランティアに参加しようと思った理由

・領域別の授業を受けて、将来のことをイメージするようになったから。

- (2) ボランティアに参加した感想

・医療的ケア児の家族会支援活動を行うことは重要だと強く思った。

・子ども達は、さまざまな特性があり、どう関わるのか、どうしたら喜んでくれるかを考えながら自分自身も楽しめた。



〔評価〕

目標値については、すべて達成することができた。アンケート結果からも本事業の参加者の評価は高いといえる。医療的ケア児やきょうだいが他の家族（他の医療的ケア児ときょうだい）と共に遊び過ごす時間は、きょうだいにとっても有意義であったと思われる。また、学生や卒業生の参加もあり、実習等でも関わる機会が少ない医療的ケア児とその家族の話に耳を傾け、多職種の支援やサポート状況を学ぶ機会になっていた。医療的ケア児の移動や駐車場の確保については、本学の施設を有効活用して安全に開催することが出来た。

Ⅲ. 今後の課題

重い障害があつたり、医療的ケアがある子どもを養育している家族は孤立しやすい現状がある。家族同士の交流や多職種との交流の機会を作ることの必要性は高いと思われる。今回の経験を活かして、医療的ケア児のきょうだいにも着目した支援活動も合わせて検討していくことが必要と考える。今後も引き続き、このような多職種の支援者や支援団体と協力・連携して幅広い支援活動も展開していきたい。

2) おいなき、みかん大ミニ講座

担当者：田端真、清水律子、萩原由佳

【事業要旨】

地域にひらかれた大学として、県民に気軽に来学いただける機会を作るとともに、近年のトレンドの中から健康的な暮らしにつながる情報を提供することを目的に、ミニ講座を開催する。「おいなき（来てください）」と「老いなき」を掛け合わせ、場所は本学（状況により出張等）とし、話題は老いても健やかに暮らすために着目したい物事を取り上げる。

【地域貢献のポイント】

1. 近年の健康に関する情報をわかりやすく伝えることにより、県民が健康的に暮らすための一助となる。
2. 県民が大学に来学する機会を設けることにより、大学と県民の交流を促進し、地域の健康づくりに必要な相互作用につながる。
3. 疾患や加齢に伴う身体の変化を知ることにより、高齢者や障害を有する人に対する社会的な理解の普及に寄与する。
4. 老いてもその人らしく暮らし続けることに関する社会の意識を高めることにつながる。

【昨年度からの課題】

遠方の県民も気軽に参加いただけるよう出張やオンライン等での講座を企画・開催する。

I. 活動計画

[重点課題]

県民が本学の講座に受講する機会を作るため、気軽に参加しやすい講座を企画し、開催する。また、老いても健康的に暮らすことに対する参加者の興味や関心を高めるとともに、講座で取り上げるテーマに関する情報について、参加者の理解が得られる。

[実施計画]

1. 遠方の県民も気軽に参加いただけるような開催場所・開催方法を検討*する。
2. チラシの配布、インターネットの活用などで本講座の開催を周知する。
3. 夏季～秋季頃を目安に、県民に対して90分以内のミニ講座を開催する。
4. 参加者に対してアンケート調査を行い、評価する。（*：昨年度の課題への対応）

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. ミニ講座実施の経緯

A群溶血性レンサ球菌の流行、マイコプラズマ肺炎やインフルエンザの大流行等、次々に感染症の流行が続いている。このようななかで、施設や病院等では、長く続く様々な感染症の影響によって感染対策やマンパワー等の事情から、大学へ足を運び講座を受講することが難しいという声がきかれていた。そこで、様々な検討を重ね、昨年度は講座実施の調整ができる施設へ出張してミニ講座を実施した。同時期、県南部の一つの医療

施設からのニーズと合致したため、昨年度中から今年度のミニ講座の開催を予定していた。一方で、本学ホームページの地域交流センター教員提案事業のなかで本事業の紹介をしていたが、他の問い合わせ等はなかった。このような経緯のもとで、今年度は県南部の一つの医療施設に出張してミニ講座を実施することとした。

2. ミニ講座の実施結果

県南部の一つの医療施設に出向き、10名に対してミニ講座を令和7年2月に実施した。

老いても健やかに暮らすために着目したい話題として、近年のトレンドの中から「嚥下」を取り上げた(図1)。

①嚥下とは、②嚥下機能への対応から構成し、とろみ付け体験や試飲等を交えて実施した(写真)。

3. 事後アンケートの結果

アンケートの回収数は9部であり、そのうち本年報への使用の同意があったのは7部であった。

年代は、20代(57.1%)、30代(28.6%)、40代(14.3%)であった。

「本講座の内容は理解できましたか」は、できた(100%)、「このような講座は、老いても健康的な暮らしへの興味や関心を高めることにつながると思いませんか」は、思う(71.4%)・少し思う(28.6%)であった。自由記載では「今回の講義を聞いて関心が持てるようになった」「とろみ水やペーストなどの体験をしたり、実際にみて、すぐわかりやすく、今後に活用していきたい」「(嚥下障害があっても)安全に美味しく食べるための工夫を日々考えていくことが大切だと学ぶことができました」等の感想が得られた。

[評価]

今年度の参加者は医療従事者であったが、県民であるためニーズに応えることはもっともである。また、県南部在住者にとっては県北中部に出向くには時間や労力を要するために現地開催の講座等に参加することは容易ではない。そのため、昨年度同様に施設に出向いてミニ講座の実施を実施できたことは重点課題に応じた活動であったと考える。

アンケート結果からも、参加者の嚥下に関する理解が得られ、事業趣旨に応じた興味や関心を高めることにつながったことから課題に応じた活動ができたと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

医療従事者・非医療従事者を問わず県南部在住者にとっては、県中部以北で開催される講座等への参加は容易ではないことがうかがえた。

特に県南部は高齢化率も高く、県民のヘルスリテラシー向上は大切であると考えます。本事業は3年が経過したため終了するが、健康的な暮らし、老いても健やかな暮らしに関する働きかけを模索し県民のヘルスリテラシー向上に寄与し続けたい。



図1 事業スライド表紙

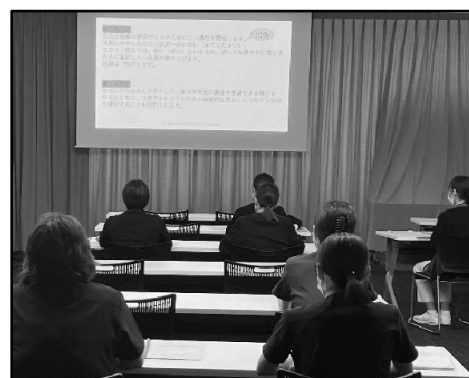


写真 ミニ講座の様子

3) みかん大ヘルシーウォーキング体験会

担当者： 大西範和、大平肇子、斎藤真、ドライデンいづみ、上田貴子

【事業要旨】

健康づくりに運動が役立つことはよく知られ、習慣的に行うことが推奨されている。しかし、実施を困難と感じる人は多く、体力に個人差もあることなどから、生活に取り入れることができない人も多い。一方、歩くことは人の日常の基本的な活動であり、誰でも手軽に行える運動としてウォーキングが広まっている。ウォーキングは通常の歩行より運動強度を増加させる必要があり、安全かつ効果的に行うためには、その根拠や適切な実施方法の理解が求められる。当事業では、ウォーキングや最近広まりつつあるノルディック・ウォーキングなどについて知識や技術を提供すると共に実際に楽しむ機会を持ち、健康の維持・増進、ストレスの緩和に役立てられるよう支援する。

【地域貢献のポイント】

当事業では、参加者にウォーキング、ノルディック・ウォーキングなどの健康づくり運動についての知識や技術に関する情報を提供し、実際に体験して頂く。知識や技術の獲得や実際の体験は、運動習慣のない方に運動継続の意義や楽しさを分かって頂くことにつながり、参加者の皆さんに運動を日常生活に取り入れて頂くことで、健康の維持増進に貢献することができる。

【昨年度からの課題】

初年度に、学内にウォーキング・コースの設定を検討し1周 600mの距離で可能であるとわかった。2年目には体験会を開催し、講習会も開始できるよう検討を進めてきた。

I. 活動計画

[数値目標]

体験会や教室を2回実施することを毎年の目標としてきた。

[実施計画]

20名を枠として講義や体験会を地域の活動と連携して企画・開催する。体験会については、参加者に事前に体調の確認を行った上で、ウォーキングやノルディック・ウォーキング、ストレッチ体操などを大学や津市内で行う。学内のウォーキング・コースの設定とその活用について検討する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 学内のウォーキング・コース

学内周回コースの設置を検討した(図1)。しかし、コース1周の距離が600mと短いため変化に乏しく、令和6年度にかけて校舎の外壁等の大規模修繕工事も続き、通行に支障があったことから検討を中止した。

2. ウォーキング体験会

津市美杉町の森林セラピー基地君ヶ野コースでウォーキングとノルディック・ウォーキングを行う体験会を開催した(図2)。準備運動後にノルディック・ウォーキングの方法を説明し、約1時間の散策を楽しんだ。

3. 講習会

講習会の実施については、学外の協力者や関係機関との情報交換を行ったが、学外機関との共催は実現には至らなかった。今後講習会を行うにあたって、メンバーが活用できるよう、ウォーキングに関する情報提供を目的としたパワーポイント資料を作成した。

[評価]

実施した体験会では、年齢層にバラつきがある中で参加者全員が楽しく参加できたと感想を述べられていた。人数が少ないことで全体への配慮が行き届き、参加者個々のペースでのウォーキングが可能となり、安全で満足度の高い体験会となった。講習会の実施については、学外機関との共催で実施する方向で検討したが実現には至らず課題が残った。学外の関係機関との情報交換は地域の事情を知る良い機会となった。学内周回コースについては、コース1周の距離が600mと短いことや、変化に乏しいこともあり、講習会の実施は可能であるものの、個々の人が楽しみとして歩くには工夫が必要であると考えられた。

Ⅲ. 今後の課題

本事業では地域に関わる活動がほとんどできなかったが、その中で見えてきたものもある。地域おこしを目的としてウォーキング・コースの整備が行われ、その多くが地域の自然や歴史・文化をアピールポイントとしているが、他の地域との差別化や広報に困難を抱えていることがうかがえた。歩くことは健康づくりに有用であり、健康に良いとうたうケースも多いが、その効果をとらえて対象者に具体的に示すことは簡単ではない。当事業の内容については、今後、「みかん大出前講座」等の講師派遣によって行うことが効率的で望ましいと考えられる。その中で地域の事情について情報を得ながら、要望に応じて本学の専門性を活かせるような地域貢献について検討していく必要がある。



図1. ウォーキング・コース案

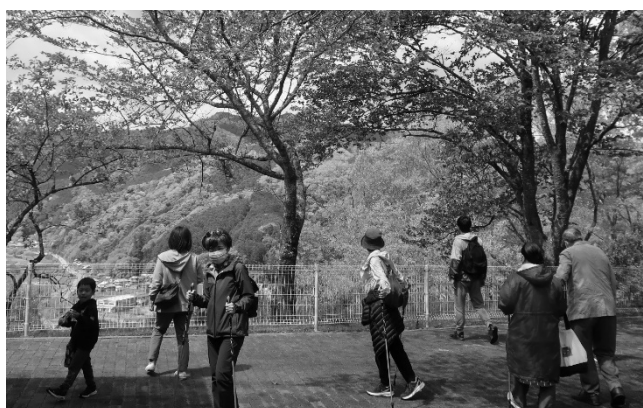


図2. ウォーキング体験会の様子

4) 看護と情報リテラシー

担当者：上田貴子、ドライデンいづみ

【事業要旨】

情報リテラシーとは、さまざまな情報を上手に使いこなす能力のことである。本事業は、看護や医療に関する情報について、集める・調べる・検討する・判断するという活動を通して、情報リテラシーを高める実践講座である。スマホやパソコンを使って検索し、情報の真偽について検討することで、参加者の情報リテラシーを高めていくことを目指す。

【地域貢献のポイント】

- 看護大学の専門知の提供
- 大学施設設備（教室・情報処理室・体育館など）、情報機器（パソコン・プロジェクタ・マイク・実物投影機など）、通信サービス（インターネット通信・Wi-Fi）、教育用ソフト（統計ソフト SPSS・Office365 機能など）の活用機会の提供
- 大学図書館およびリファレンスサービス（資料検索・データベースなど）の提供
- 県民の情報リテラー向上に寄与

【昨年度からの課題】

津市の住民に情報リテラシーへの関心や研修会への参加意向について聞き取りを行った結果、事業への関心はあるとの意見はあったが、参加申込には至らなかった。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 開催回数：1 回程度
- ・ 事業参加者：2 名以上／1 回

[実施計画]

1. 参加者の募集（広報）
2. 運営方法
 - ・ 大学施設設備や情報機器等を使用する。
 - ・ 情報処理室もしくは教室にノートパソコンを準備し、インターネット接続のもとで講座を開催する。
3. 教育実践の内容
 - ・ スマホやパソコンを使って医療や看護に関する情報を検索し、ヒットした情報を集約し、それぞれの情報の真偽について検討する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 健康と情報リテラシー：SNS を活用した健康づくり

- 1) 日時・場所・担当者

日時：令和 6 年 7 月 13 日（土） 11 時～16 時 30 分

場所：学生ホール（夢緑祭）

担当者（当日運営）：教員 2 名、学部 3 年生 1 名、計 3 名

2) 参加者

参加人数：45名 内訳：65歳未満（成人）43名、65歳以上（高齢者）2名

3) 内容

健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023に基づく健康教育
<手順>

① 筋力チェック（握力測定）

- ・健康づくりシートに「年齢」「性別」「体重」を記載する
- ・握力測定（筋力の目安）、右と左2回ずつ行い、結果を記載する
- ・判定「弱い・普通・強い」にチェックする
- ・「決意表明」もしくは「今週の目標」を決めてもらう
- ・年齢を確認し、該当するみかんちゃんシートを渡し、裏面について説明する
- ・運動等に取り組めていたら「はなまるシール」を貼る
- ・最後に「できましたシール」を貼り、健康づくりシートを渡す（終了） ⇒ 希望者は「② SNSの活用」「③ 保健指導」へ進む

② SNSの活用 ※希望者のみ

- ・健康長寿ネット「介護予防のための生活機能チェック」への回答（3分）
- ・結果を説明する

③ 保健指導 ※希望者のみ

- ・「暮らしの保健室」を紹介 もしくは 個別指導
- ・厚生労働省：e-ヘルスネット、身体活動・運動 用語一覧を参照（個別）
- ・健康づくりのための身体活動・運動に関する説明（個別）
- ・筋肉シート等を用いた説明（個別）



[評価]

数値目標の年1回開催を達成することができた。夢緑祭で開催したことから多数の参加者があった。参加者には現在の運動習慣と目標値との乖離や達成度について考えていただいた。ほとんどの参加者は「歩行」「運動」「筋トレ」の必要性を理解されており、今後の生活で目標値を目指して取り組む決意を表明されていた。健康長寿ネット「介護予防のための生活機能チェック」の回答者は2名であった。人体解剖模型や絵本に関心を寄せる参加者も多く、小学生以下では人体解剖模型に、大人は両方に関心を寄せていた。

Ⅲ. 今後の課題

多くの参加者に、正しい情報を活用した健康づくりを体験いただく機会を提供することができた。今後も参加者の利便性に配慮した開催方法で事業を継続していきたい。

5) 「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援

担当者：清水律子、鈴木聡美、平生祐一郎、萩原由佳

【事業要旨】

認知症の有病率は年々増加している。認知症の症状の一つに記憶障害があることから、認知症の人に対して「何もわからない、何もできなくなる」といった偏った認識をもつことがある。認知症を正しく理解すると、認知症の人のその行動の理由がわかり、どう対応したらいいかにつながる。一人ひとりの認知症の方に向き合い、寄り添うケアについて考えられるように、認知症に関する講座や相談会・事例検討会を開催する。

【地域貢献のポイント】

1. 認知症についての理解が深まる。
2. 認知症の人への対応力が向上する。
3. 介護者の心身の負担の軽減となる。
4. 教員、学生、施設職員が協働して、認知症の人に支援できる。

【昨年度からの課題】

昨年度から事業を行い知識の習得につながっているが、対応力の向上には至っていない。認知症の人を理解し、正しい知識をもってケアにつなげるためには、ケアの創意工夫しながら実践することが重要になる。高齢者施設の医療福祉職が、認知症の人を理解してケアにつなげるために、認知症にかかわる知識の提供やディスカッションをとおして、ケアを具体的に検討できるように支援する必要がある。

I. 活動計画

[重点課題]

高齢者施設の医療福祉職員の認知症の人への理解を深める。また、認知症の人への対応力を向上させる。

[実施計画]

認知症の人への対応に困難を感じている高齢者施設に出向き、医療福祉職員を対象として、定期的に認知症に関する講座や事例検討会を開催する。講座や事例検討会については、実際の対応に困難を感じていることに関連した内容で行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 認知症に関する講座・グループディスカッション
 - 1) 概要
 - ・対象者：高齢者施設に勤務する介護職や看護職などの16名
 - ・場 所：県内の高齢者施設

・日時・講座内容：下記参照

日 程	講 座 内 容
6 月 25 日	第 1 回講座 ・認知症対策基本法 ・認知症相談会
8 月 19 日	第 2 回講座 ・認知症の症状（BPSD）とコミュニケーション
9 月 11 日	第 3 回講座 ・認知症の人とのコミュニケーション 1 ・グループディスカッション
10 月 30 日	第 4 回講座 ・認知症の人とのコミュニケーション 2 ・グループディスカッション
11 月 27 日	第 5 回講座 ・睡眠の基礎知識と良い睡眠をもたらす援助 ・グループディスカッション
令和 7 年 2 月 10 日	第 6 回講座 ・スタッフ研修に向けて ・グループディスカッション（写真参照）
令和 7 年 3 月 6 日	第 7 回講座 ・リアリティ・オリエンテーションとアクティビティ・ケア ・グループディスカッション

2) 講座・グループディスカッションの様子



3. 研修の感想とアンケート結果

本研修は認知症の方への対応力の向上につながると思いますかの質問に対し、「思う」「やや思う」と回答した者の割合が、92.9%であった（図1）。その理由に、「認知症について講義を聞いて、話し合い、実践することで理解がふかまっていくと思う」「この講義で初めて知ったことがある。実際にそれを実践することで、多少なりとも効果を実感している」があった。「やや思わない」の回答があったが、その理由は担当フロアに認知症の人がおらず「活かす機会がなかった」であった。本研修を受け、認知症の方への関わりに変化はありましたかの質問に対し、「あった」と回答した者の割合は64.3%であった（図2）。具体的な変化として、「日々の関わりの中でその方に応じた言葉がけ、対応を意識できるようになった」「以前よりもやさしく接することができるようになった」があった。「どちらとも言えない」と回答した者の割合が35.7%であった。その理由に、「頭ではわかっているが、業務に追われてしまっている」と回答があった。その他の自由記述に、「ケアは奥が深く、私たちの関わりで良くも悪くもなります。より良いケアができるようになりたいです」「認知症の方への病院受診に付き添うことが増え、そこでも認知症の方への対応の話聞くことが出来ている」があった。

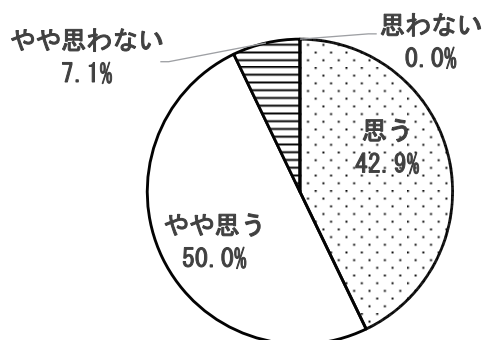


図1 本研修は認知症の方への対応力の向上につながると思えますか

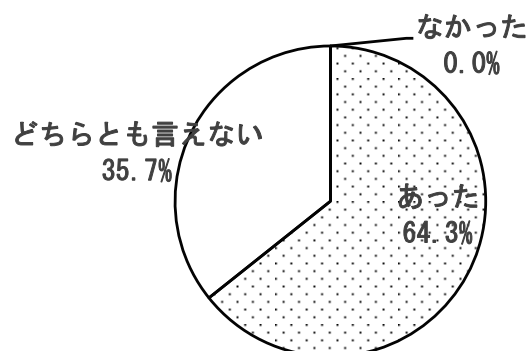


図2 本研修を受け、認知症の方への関わりに変化はありましたか

[評価]

本研修は定期的に年7回開催することができた。研修は、認知症の知識の習得にむけた講座を行い、認知症の正しい理解につながった。また、グループディスカッションを行い、認知症の人とのコミュニケーションや日常生活援助を具体的に考えることができるように支援できた。ディスカッションした内容は、実践に活かされており、「前より療養者さんの表情が穏やかになったように感じる」や「上手くいかないこともあるが、上手くいくこともある」といった話も聞かれた。認知症の人への対応力が大きく向上したと実感するには至らなかったが、日々のケアに前向きに取り組めるようになってきていることから、認知症対応力の向上につながったと評価できる。年間を通し、継続的に研修を開催することにより、医療福祉職員の意識が前向きに変化し心理的な負担の軽減にもつながっていた。学生ボランティアと協働できなかったが、概ね対象者のニーズに応じた支援ができた。

Ⅲ. 今後の課題

本事業では、認知症にかかわる基本的な知識を講義したが、その知識をケアに活かすことは難しかったと考えられる。習得した知識をケアにどう活用したらいいか、また実施したケアを振り返り、さらに良いケアになるよう創意工夫するには専門的な知識をもつ者の支援が必要と考えられる。高齢者施設では、認知症の人へのケアに困難を感じている医療福祉職などがいると考えられることから、認知症の理解と対応力の向上につながる継続的な支援は必要である。

6) みかん大 暮らしの保健室

担当者：平生祐一郎、森下直紀、荒木学、矢崎美穂、長谷川明子

【事業要旨】

住民への健康支援や地域コミュニティの形成を目的に、①健康チェック、②看護職等による健康相談、③世代間交流、④居場所づくりを行っている。希望者には、アロマハンドマッサージやフットケアを行っている。また、管理栄養士や歯科衛生士との連携や、学生の知識や実践の向上を図っている。

【地域貢献のポイント】

住民が自己の健康に関心をもち、主体的に健康づくりに取り組める。住民同士の交流を促し、地域コミュニティの形成に貢献する。さらに、本学や他学部の学生に対する教育的側面があり、医療人材育成の場としても期待される。

【昨年度からの課題】

事業担当者間で運営の在り方や具体的な方法を共有し、暮らしの保健室が効果的に運営できるよう検討を重ねる。また、専門職や学生による社会貢献活動の場や、事業担当者の確保に努める。

I. 活動計画

[重点課題]

多職種との連携や出張を強化し、住民の健康を包括的に支援する。月 10 名程度の参加者を確保するために、チラシなどで積極的に広報する。多くの住民が参加できるよう、本学以外での開催を増やす。

[昨年度からの変更点]

昨年度の振り返りや今年度の運営方法を、事業担当者間でよく検討し共有した。今年度は事業の一部を学生に企画してもらい、自ら事業を組み立て実施する力を養った。地域やイベントへの出張を増やして、保健室の存在を知ってもらうとともに、住民が気軽に健康づくりをできる環境を整えた。

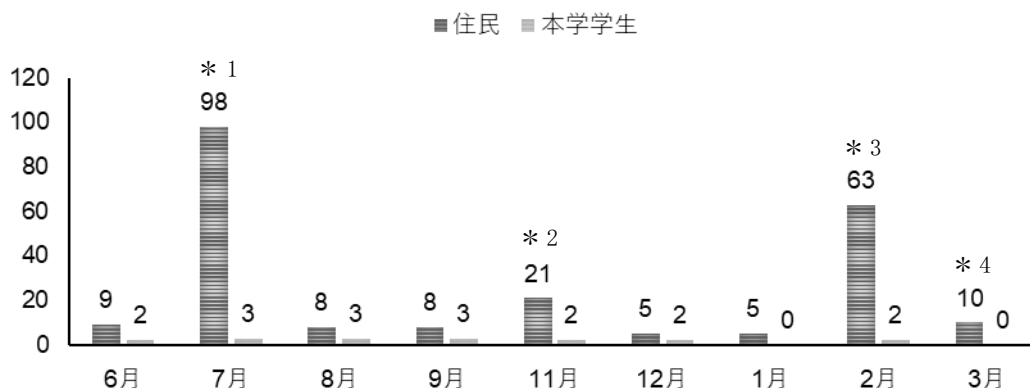
[実施計画]

実施前に事業担当者と昨年度の振り返りを行う。事業は月 1 回（原則第 2 木曜日）、学内で開催する。また、地域の要請やイベントなど、学外での実施も積極的に行う。内容は健康チェックや看護職等による健康相談を実施する。アロマハンドマッサージは専門の研修を受けた教員、フットケアは教員の指導下で練習を積んだ学生が行う。専門職による健康教育も継続して行う。

II. 活動の結果と評価

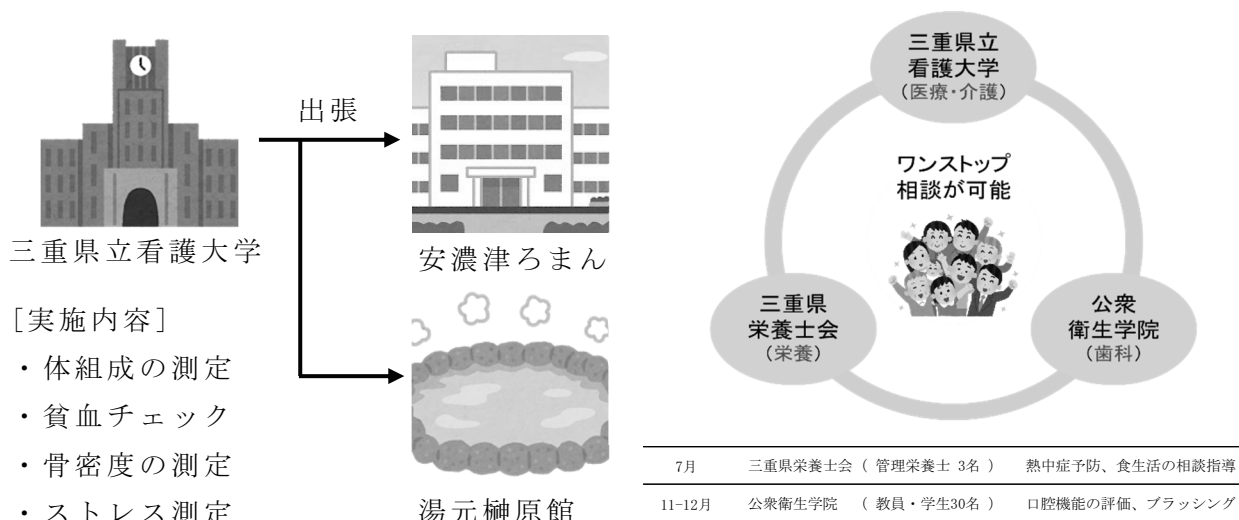
[結果]

1. 参加者の状況



出張：*1 夢緑祭、*2 安濃津ろまん、*3 湯元榊原館、*4 一身田公民館の住民を含む。

2. 他施設への出張と多職種連携



参加者数は、住民が延 227 名、学生が延 17 名であった。出張先はデイサービスや温泉施設、地域の公民館であった。管理栄養士や歯科衛生士に協力してもらい、参加者への健康教育と個別相談を実施した。みえまちキャンパスでは、学生が本事業への参加や地域貢献活動を発表し、プレゼンテーション部門で最優秀賞を受賞した。

[評価]

事業は計画通り実施することができ、住民の満足度も高い印象であった。他施設で実施できたことは、他の住民への支援だけでなく、地域ケアシステムの構築にもつながる。また、学生が事業の企画段階から参加したことで、地域課題に対する支援能力を身につけたと考える。

III. 今後の課題

住民や施設から事業継続の要望があるため、運営方法などを事業担当者で検討していく。

7) 僕たち私たちでも出来る！

夏の危険から身を守るための基礎講座

担当者：多久和有加、井上千彰、中野由佳、山本奈津美、一尾麻美

【事業要旨】

本事業は、楽しい夏休みを過ごせるよう、子どもたち自身が夏のあらゆる危険（熱中症・食中毒・水の事故など）から身を守り、危険を回避し、予防できる自助の精神を育てることを目的としている。多くの子どもたちが集まる学童保育施設を訪問し、高学年の子どもたちに、夏の危険から身を守るための基礎知識を教える。その後、学んだ知識を高学年から低学年へと伝えていくことで、より多くの子どもたちが、自分自身を守るための知識を身につけられることを目指している。

【地域貢献のポイント】

地域の子どもたちが、夏の危険について学びを深める場を提供する。また、参加した高学年の子どもたちが、低学年の子どもたちや家族に学びを伝え、広げていくことで、地域全体の健康意識の向上につながる。

【昨年度からの課題】

子どもたちが夏の危険から自ら身を守るためには、熱中症や食中毒予防の知識を身につけることが重要である。そのため、できるだけ多くの学童保育施設に本活動の内容を周知し、参加を促す広報を行う必要がある。

I. 活動計画

1. 数値目標

- 1) 開催施設：学童保育施設 1～2 施設以上
- 2) 事業参加者：10 名以上

2. 実施計画

1) 事業実施までの流れ

- (1) 事業チラシを作成し、学童保育施設指導員の会へ配布を依頼し募集を開始
- (2) 開催内容についての打ち合わせ及び資料作成
- (3) 募集があった学童保育施設との打ち合わせ（開催日時、参加人数、講座内容の詳細説明）

2) 事業実施

- 3) 参加者へのアンケート調査を実施と評価

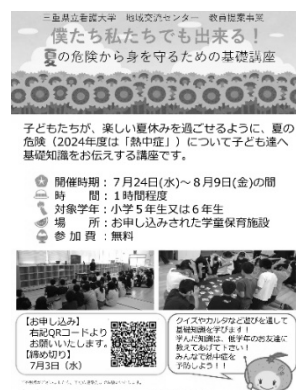
II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 事業実施までの流れ

今年度は、より多くの学童保育施設に本活動内容を周知し、参加してもらえるように事業チラシを作成した。そして、5月に開催された「学童保育施設指導員の会」で配布を行った。

昨年度より3施設多い申し込みがあり、今年度は、計4施設で事業を実施した。1施設は「食中毒予防」、3施設は「熱中症予防」をテーマとした。子どもたちが楽しく基礎知識を学ぶことができるように担当者会議を3回実施し、内容検討・資料作成を行った。その後、各学童保育施設との打ち合わせを経て、事業実施に至った。



【事業チラシ】

2. 事業実施

1) 日時、講義内容

開催場所	A 学童保育施設	B 学童保育施設	C 学童保育施設	D 学童保育施設
テーマ	食中毒	熱中症	熱中症	熱中症
日時	2024年7月24日	2024年7月29日	2024年7月29日	2024年8月1日
参加者	小学生14名 学童指導員3名	小学生21名 学童指導員2名	小学生18名 学童指導員3名	小学生17名 学童指導員2名
講座内容	<p>【食中毒】</p> <ul style="list-style-type: none"> 食中毒に関する基礎知識（食中毒とは、原因、症状、予防3原則など） 手洗い実験（手洗い実験、洗い残しスケッチ） 食中毒に関する冊子作成 食中毒予防啓蒙活動の依頼 まとめ、アンケート実施 <p>【熱中症】</p> <ul style="list-style-type: none"> 熱中症に関するかるたの実施 熱中症クイズと解説 熱中症に関する冊子作成 熱中症予防啓蒙活動の依頼 まとめ、アンケートの実施 			

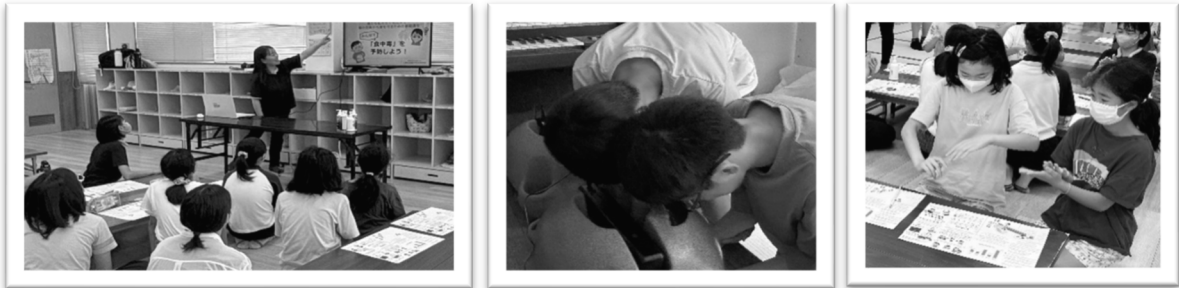
上記の講義内容に沿って事業を実施した。

食中毒予防講座では、まず、子どもたちに食中毒についての基礎知識を説明した後、蛍光塗料を汚れに見立てた手洗い実験を実施した。子どもたちは、普段の手洗いでは、落としきれない汚れを可視化することで、汚れがたまりやすい箇所を認識できていた。その後、2回目の手洗いでは、正しい手洗い方法を意識しながら、1回目より丁寧に手洗いを実施していた。

熱中症予防講座では、クイズ前に熱中症クイズの答え・ヒントになる事柄が記載されているカルタをチームに別れて実施した。その後、カルタを活用しながら、熱中症クイズに取り組んだ。クイズの解説を聞きながら、熱中症予防の基礎的知識を学習した。

また、本事業の内容を、再度子どもたち自身で振り返られるように、「食中毒」「熱中症」予防講座で使用したスライドと同様の内容を印刷した A3 用紙を各回ごとに配布した。この用紙は、切込みを入れることで冊子にできるように工夫されており、子どもたちは、色を塗ったり、空欄にメモをしながら、自分のオリジナルの冊子を作成した。

【食中毒予防講座の様子】



【熱中症予防講座の様子】



後日、本事業に参加した高学年の子どもたちが、事業内で作成した自作の食中毒予防冊子、熱中症予防冊子を見ながら、低学年の子どもたちに「食中毒予防講座」「熱中症予防講座」を開催した。低学年の子どもたちにもわかりやすく、話す内容を工夫しながら伝えていた。



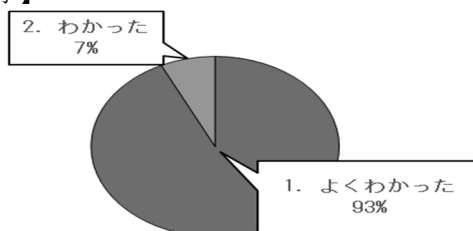
【高学年の子どもたちから低学年の子どもたちへの食中毒や熱中症講座】

3) アンケート結果

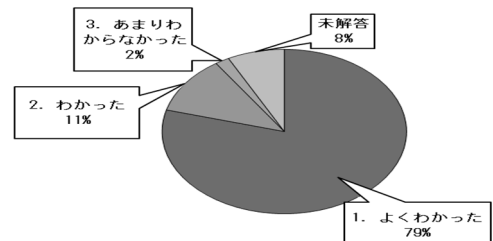
- ・アンケート参加者：食中毒予防講座 14 名、熱中症予防講座 53 名
- ・アンケート回収率：食中毒予防講座 100%、熱中症予防講座 94.6%
- ・アンケート結果の詳細

(1) 食中毒・熱中症についてわかりましたか。

【食中毒】

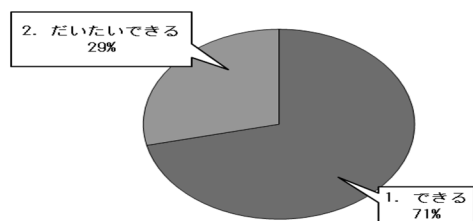


【熱中症】

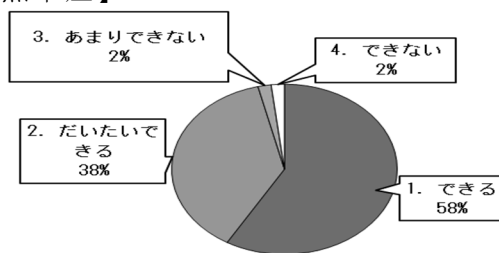


(2) 食中毒・熱中症について、自分で予防や対策ができそうですか。

【食中毒】



【熱中症】



[評価]

今年度は、4施設を訪問し、70名の子どもたちに食中毒・熱中症に関する基礎講座を実施することができ、数値目標は達成できた。また、事業実施後のアンケート結果から、食中毒・熱中症について、「よくわかった」「わかった」が、9割以上であり、自分で予防や対策ができそうかについても、9割以上が「できる」「だいたいできる」と回答した。本事業の目的である、子ども自身で危険を回避し予防できる自助の精神を育てることにつながったと考える。具体的な予防対策への自由記述を以下に抜粋する。

【食中毒予防】

- ・ こまめに手洗いをする、学校に行ってからあまり手を洗わないから気をつける。
- ・ 食べ物に直射日光を当てないようにする。
- ・ つめ、指先、手の甲まで丁寧に洗うことを気をつけたい。

【熱中症予防】

- ・ のどがかわく前に飲むようにする。
- ・ 朝学童にくるときに、いつも帽子をかぶる。
- ・ 朝ご飯を食べるとか、今習った事をこれからもする。

また、当日、中日新聞社の取材を受け、後日事業内容が中日新聞に掲載された。これにより、地域住民へ十分な情報発信ができたと考える。さらに、今年度、既に次年度開催の要望が寄せられており、継続した事業実施につなげることが出来た。



III. 今後の課題

次年度も、子どもたちの夏休み期間を利用して、本事業を継続していく。また、津市内の学童保育だけでなく、他の地域や、子ども会・スポーツクラブとも連携し、より広範囲に情報を届けられるように努める必要がある。

8) みかん大哲学カフェ

担当者：安部彰、浦野茂、鈴木聡美、関根由紀、林辰弥、森下直紀

【事業要旨】

現代では人々のライフスタイルや価値観の多様化にともない共生をめぐる問い——のぞましい共生のありかたをめぐる問い——は、容易に共通解を導きだせない難問となりつつある。しかし現況がそうだからこそ、むしろその問いはかつてないほどの重みをもちはじめているともみなしうる。そして後者の視点に立つならば、我々は共同探求の方法としての対話、それもできればバックグラウンドを違える人々がお互いにその異なりを尊重しつつ織りなす多声的な対話をつうじて、かかる難問を敢然と探求すべきだろう。そのような対話を経ることにより我々は、答えにはいたらずとも、探求前よりも諸問題の構造や奥行きをより鮮明に理解できるようになるはずだから。

【地域貢献のポイント】

このかん、医療・看護職のフィールドは病院から地域社会へとひろがりつつある。しかしこうした活動のフィールドの拡張は必ずしもコミュニケーションの豊饒化を意味しない。そこにおけるコミュニケーションが「医師・看護師と患者」あるいは「多職種間」という閉じた役割関係のもとでのそれであり続けるかぎりは。したがって、やはりコミュニティには、人々がそれぞれの役割や立場をこえて忌憚なく発しあう多様な意見が交流する場が不可欠だ。近年では、そうした対話の場としての「哲学カフェ」が全国にひろがりつつあるが、本事業は三重県におけるそのような場となりゆくことで、地域貢献に資することができればとかがえている。

【昨年度からの課題】

当初計画どおりに事業が実施できなかったことが昨年度の反省点であったが、今年度は計画どおり実施することができた。

I. 活動計画

数値目標：年2回の開催。各回参加人数10名程度。

II. 活動の結果と評価

1-1. 第1回みかん大哲学カフェ開催情報

- 1) 日時：2024年8月26日（月）18時00分～20時
- 2) 場所：アストプラザ4階・橋北公民館和室
- 3) 参加人数：8名（本学教職員6名・一般2名）

1-2. 活動の結果

今回の哲学対話のテーマは「ことば」である。ことばは人間の主要なコミュニケーション

ンツールであり身近なものであるが、あらためてかんがえてみると、いろいろ謎めいてもいる。たとえば、ことばはひとを元気にも傷つけもするが、なぜ／いかにしてこのような力もちうるのか？あるいは、私たちはしばしば「ことばにならないおもい」をなんとかして相手に伝えようと苦慮するが、そもそもその内なる「なにか」は言語化したり、伝えたりできるものなのか？当日は以上のような問いをめぐり、さまざまに実りある対話が展開された。

2-1. 第2回みかん大哲学カフェ開催情報

- 1) 日時：2025年3月7日（水）18時00分～17時30分
- 2) 場所：アストプラザ4階・橋北公民館和室
- 3) 参加人数：7名（本学教職員6名・一般1名）

2-2. 活動の結果

今回の哲学対話のテーマは「地元（ホーム）」である。近年では「地元」を「ホーム」と呼ぶこともふえているが、あらためてかんがえてみると、両者の意味は重なりつつも異なっている。たとえば「地元」は主に「出身地」をさすが、「ホーム」はもっとひろい意味を有するように見える。つまり「ホーム」は、出身地のみならず、さらには郷愁を感じる土地・組織や、慣れ親しんだ文化・生活圏をもさすようにおもわれる。またこのように「ホーム」が多分に主観的な概念であるがゆえに、各自にとっての「ホーム」も時々により移り変わったり伸び縮みしたりするのだろう。当日は以上のような知見が、さまざまに実りある対話によって導かれた。

[評価]

2回とも参加人数が数値目標には至らなかった。よって次年度は、周知期間を長くする等の広報対策を講じる予定である。

Ⅲ. 今後の課題

上述のとおり今年度は計画どおり年2回事業を実施することができたので、次年度も計画を継続する予定である。

9) がん患者を有する家族：就学生の集い

-I can cope with family-

担当者：大川明子、ドライデンいづみ、伊藤雅浩

【事業要旨】

がんに親が罹患している就学生は、その対処法が分からない場合が多く、悩んでいる。これらの就学生の支援をはじめとして幅広く悩みを持っている患者家族の支援には、一人で悩まず、みんなで開放的に経験談や接し方などの情報共有する場が必要である。このための患者や家族：就学生との向き合い方を考えていく集い。

【地域貢献のポイント】

がん患者を支える家族、特に就学している学生に焦点を当てて、安心して勉学に励むことができるよう、こころの支えとなる場の提供をする。

I. 活動計画

<数値目標>

5名の参加者を目標とする。

<実施計画>

がんに親が罹患している就学生が集いお互い悩みを話し合う。また参加者の要望を聞く。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 本事業の周知

三重県内の大学・短期大学（三重県立看護大学、三重大学、鈴鹿国際大学、高田短期大学）に右図のチラシを配布した。

2. 就学生の集いの実施

ゼミの面談の際、家族が“がん”であるから卒業研究をしたいと相談を受けることが多いことから、本提案事業を提案した。友達や家族に相談することもできず、ひとりで悩んでいる就学生がいる。今回は本学4年生5名が患者（家族）への思いや接し方について悩んでいることがあった。また、支えている家族が疲弊している様子も話していた。誰に話したらよいかわからず、ずーと悩んでいたとのこと、少し話すことで気持ち、気分が和らいだとのこと、表情が和らいだ様子が見られた。

令和6年度地域交流センター事業
がん患者を有する家族：就学生の集い
- I can cope with family -

家族が“がん”になって、あなたは悩んでいませんか？



家族ががんに罹患してしまったため、

- 家族のこと
- 家計のこと
- 就学のこと など

で、あなたはつらい思いをしていませんか？

話すことで、対処法が見つかるかも知れません。つらさが和らぐかも知れません。

一人で悩まず、開放的に経験や接し方などを話し、情報を共有しませんか。

開催日時：令和6年12月25日まで随時開催

申し込み方法：下記メールで申し込み

開催場所：三重県立看護大学 研究棟1階 中会議室

参加費：無料

申込先：akiko.kawa@mcn.ac.jp

三重県立看護大学 大川 明子

<評価>

学生は公に話すことができず、悩んでいることが多い。家族関係は個別性が高く、悩みは個人的な要素も多いため、集まった学生同士が悩みをすぐに話し合うことは難しい。そのため、学生同士の関係づくりが必要である。また、プライバシーの配慮や相談しやすい方法を検討する必要がある。

Ⅲ. 今後の課題

集まった就学生同士の関係性作り工夫し、話し合える雰囲気を作る。必要時、個別対応をする必要がある。

10) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

担当者： 大川明子、伊藤雅浩

【事業要旨】

乳がんの治療に伴い乳房切除術をおこなった患者の乳房パットを作製する。参加者は患者さんを含めて誰でも参加でき、ご自身の胸の大きさに合わせたオーダーメイドの乳房パッドを参加者ご自身で作製する。素材はダブルガーゼで、中身は樹脂ビーズを使用し、肌ざわりや汗も吸い取り、洗濯も可能で、乾燥性も抜群である。講師は乳房切除術を体験した人であり、病気の語り合いもおこなっている。

【地域貢献のポイント】

医療施設以外でも乳がん患者のケアができること、生活している地域だからできるケアを考え、患者の日常生活の活性化につなげていく。また、患者同士が語り合い、がんとともに生きる場の提供ともなる。

I. 活動計画

〔数値目標〕

5名の参加者を目標とする。

〔実施計画〕

乳房パットを作製する。

作成しながら病気のことなどを話し合える場作りとする。また参加者の要望を聞く。

II. 活動の結果と評価

〔結果〕

1. 本事業の周知

治療施設（市立四日市病院、三重県立総合医療センター、鈴鹿中央総合病院、鈴鹿回生病院、松阪市民病院、松阪中央総合病院、三重中央医療センター、伊勢赤十字病院）に右図のチラシを配布した。

2. 乳房パットづくりの実施

令和6年12月17日に実施した。講師の指導のもと、参加者2名、教員2名が参加して乳房パットを作製した。乳房パットを作製しながら病気の思いや、これから始まる治療の不安、家族のことなどのおしゃべりをして、和やかな雰囲気のリマンマカフェを終えることができた。また、参加者はハンドメイドで仕上げた乳房パットを嬉しそうに持ち帰られていました。会が終わる頃には表情が和

令和6年度地域交流センター事業

Re-mamma Café (リマンマ カフェ)



体験者と一緒に、自分に合った快適な乳房パッドを、楽しく作りませんか？



- ご自分の胸の大きさに合わせて簡単に作れます。
- 洗濯が可能で、すぐに乾きます。
- 中身に樹脂ビーズを使うので、重みもあります。
- お手持ちのフルカップブラに、直接入れる事ができます。
- ガーゼ・タオルが汗を吸い取ります。
- 術後間もない方から、再建ご予定の方にも快適です。

開催日時：令和6年12月17日（火）13:00 - 16:00
応募締切：令和6年12月9日（月）
開催場所：三重県立看護大学 研究棟2階
生涯看護分野研究室2

参加費：2,000円（含 材料費、お茶菓子代）
申込先：下記メール（先着5名）

三重県立看護大学 大川 明子

らぎ会話が弾んでいた。

[評価]

乳がん患者さんは術後ボディイメージの変化に悩んでいることや術後化学療法を受ける不安など、参加者の会話の中から聞くことができた。ダイレクトに話を聞くだけでなく、創作しながら会話をすることで患者さんの本音を聞くことができた。

また、今回自身で乳房パッドを作製することにより、以後継続して自身で自身のための乳房パッドを作製できることから、セルフケアにもつながると考えられる。

以上の事から、患者同士で会話をすることで共感することができていた。参加者は罹患して間もない状況であり、情報を求め参加したと述べていたこと、自身のための乳房パッドがいつでも作られるようになることから、本事業が心理的な軽減ができる場になると考えられる。



Ⅲ. 今後の課題

参加した人のその後の使用状況などを把握するため、継続的に参加してもらえるような工夫を検討する。

11) 英国アフタヌーン・ティー@みかん大

担当者：ドライデンいづみ、岩田朋美、上田貴子、大川明子、川島珠実、林辰弥、
一尾麻美

【事業要旨】

三重県民の多文化交流のために、近代看護の母ナイチンゲールの出身地イギリスの文化や歴史の紹介とともに、お茶や音楽の効能も体験する英国アフタヌーン・ティーを開催する。五感を満たすアフタヌーン・ティーを楽しみ、心と身体をリフレッシュして、地域住民の健康維持とリラックス交流を支援する。

【地域貢献のポイント】

- 看護大学の健康知識の共有と提供
- 地域住民、外国人、看護大学教職員及び学生の交流
- SDGs の目標である「質の高い教育をみんなに」と「人や国の不平等をなくそう」の達成
- 外国文化の紹介と体験機会の提供

【昨年度からの課題】

早期に地域住民に開催日時や内容等が周知できるよう準備を検討する。また、周知用のチラシの文言についても慎重に内容を検討しながら作成し、より多くの地域住民が参加でき健康を意識できる場づくりを目指す。

I. 活動計画

[数値目標] 年間 1 回程度

[実施計画] 令和 7 年 2 月 15 日（土）14 時～16 時

令和 7 年 3 月 8 日（土）14 時～16 時

1. 参加者の募集（広報・チラシ・ポスター）
2. 運営方法
 - ・チラシ・ポスター、大学ホームページで本イベントを周知する。
 - ・アフタヌーン・ティーに使用する飲食物ならびに資料を準備し、学内で英国アフタヌーン・ティーを開催する。
3. 昨年度からの変更点
 - ・より多くの地域住民が参加できるよう 2 回に開催時期を分けた。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. ジェンダー・フリーのバレンタイン・TEA・デー

1) 日時・場所・担当者・テーマ

日時：令和 7 年 2 月 15 日（土）14 時～16 時

場所：小会議室

担当者（当日運営）：教員 3 名

テーマ：極寒でもサバイバルできるロシアン・ティーとロシアン・スイーツ

2) 参加者

参加人数：7名 内訳：本学学生（3年生）1名、日本人4名、アメリカ人2名

3) 内容

ジェンダーや国籍等に関係なく、誰もが心地よく過ごせる場やすべての参加者が自分らしく楽しめる環境を提供することを目的としたインクルーシブな雰囲気のアフタヌーン・ティー・イベントを目指した。全員がマジックに参加できるマジック・ショーも開催した。資料では、チョコレートやロシアン・ハーブ・ティーの効能を説明することにより、脳とこころとからだの健康に焦点を当てた。



2. 春の音楽 アフタヌーン・ティー

1) 日時・場所・担当者

日時：令和7年3月8日（土）14時～16時

場所：学生ホール

担当者：教員5名、ボランティア学生2名（当日運営）

教員1名（後日アンケート集計）



テーマ：「音楽の国」オーストリアのハーブ・ティーとウィーンのスイーツ

2) 参加者

参加人数：23名 内訳：卒業生1名、日本人19名、アメリカ人2名、イギリス人1名

3) 内容

音楽コンサートやマジック・ショーとともに、誰もがリラックスして心地よく過ごせる場を提供することを目的としたインクルーシブな雰囲気のアフタヌーン・ティー・イベントを目指した。セルフサービス式に飲食を提供することにより、参加者が自由に好みの飲食を楽しむことを目的とした。資料では、ハーブ・ティーの効能を説明することにより、参加者の健康意識を高めることに焦点を置いた。





[評価]

より多くの地域住民が参加できるよう2回に時期を分けて開催することにより、数値目標の年1回開催を達成することができた。両イベントのアンケートでは、「とても楽しかった」や「とても満足」といった評価とともに、「音楽の内容・選曲」・「飲食」・「会場の雰囲気」・「参加者との交流」・「マジック・ショー」の5項目すべてが高く評価される結果となった。

Ⅲ. 今後の課題

今後は計画の内容を継続するにあたって、早期に学内ホームページやポスター・チラシ等で、地域住民に開催日時や内容等が周知できるよう準備を検討する。

12) 看護職を目指したい小・中学生支援

「スピーチ・コンテスト」@みかん大

担当者：ドライデンいづみ、岩田朋美、上田貴子、小池敦、荒木学、一尾麻美

【事業要旨】

三重県の小学生・中学生が「なりたい自分になる」支援をするため、将来の夢や就きたい職業について自信を持って語ることでできる場として、スピーチ・コンテストをはじめとするイベントを企画・開催する。子どもたちが好きなことや将来の自分像を自由に語ることで、人前で話すことへの苦手意識もなくなる。

【地域貢献のポイント】

- 看護大学の健康知識の共有と提供
- 地域住民（子どもから大人まで）の交流
- 三重県民の健康とヘルスリテラシーの向上を支援
- SDGs の目標「質の高い教育をみんなに」、「ジェンダー平等を実現しよう」、「住み続けられるまちづくりを」の達成

【昨年度からの課題】

スピーチ・コンテストの参加者の対象を小・中学生に限定せず、子どもから大人までへと拡大することで、参加者を確保する方向で進めていく。また、アンケートの実施についても検討する。さらに、ヒアリング調査の結果を踏まえ、コンテスト（イベントを含む）の年1回の開催及びスピーチ・セミナーのイベントを検討していく。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 開催回数：1回程度
- ・ 事業参加者：100名以上／1回

[実施計画]

1. 参加者の募集（広報・チラシ）
2. 運営方法
 - ・ 大学施設設備や「夢緑祭」のチラシを宣伝に使用する。
 - ・ 学生ホールにボードや用紙、ペン、付箋を準備し、参加者を呼び込む。
3. 内容

こころの医療センターがコラボをする形で、学生ホールにて「健康宣言」と「アルコールパッチテスト」を開催する。夢緑祭の参加者に付箋に健康宣言を記入してもらい、ボードに貼り付けてもらう。学内外の参加者から健康意識の情報収集や予備調査を実施し、スピーチ・コンテストのテーマの可能性及び方向性を検討する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 「スピーチ・コンテスト」ところの医療センターとのコラボ

1) 日時・場所・担当者

日時：令和6年7月13日（土）11時～16時30分

場所：学生ホール（夢緑祭）

担当者（当日運営）：教員4名、ころの医療センター・スタッフ3名、
学外協力者アメリカ人2名

2) 参加者

参加人数：120名 内訳：健康宣言記入参加者120名、パッチテスト参加者120名

3) 内容

参加者（学生・一般）が健康について考え、目標を書いてボードに貼り付けていった。またアメリカ人学外協力者によるゲームで脳とからだのよい運動となった。「アルコールパッチテスト」では、学生も含めた参加者がアルコール摂取してもよいかどうかを判断するよいきっかけとなった。参加者の中には、スウェーデンからの高校生やアジア諸国の親子連れも見られ、国際色豊かなイベントとなった。「健康宣言」の内容を確認し、一般にどういった健康話題に興味を持っているのかをカテゴリー別に分類して、今後の事業のスピーチ・コンテストにおける題材選びに役立てる。

[評価]

数値目標の年1回開催を達成することができるよう、またより多くの地域住民が参加できるよう夢緑祭で開催したことから学内外から120名の参加があり、数値目標の100名を達成した。参加者は、自ら健康宣言をすることで、健康意識を高めていた。健康宣言の内容としては、減量や睡眠、歩く運動への関心が高かった。

Ⅲ. 今後の課題

今後は計画の内容を継続するにあたって、スピーチ・コンテストが開催できるよう準備を検討する。夢緑祭での健康宣言内容の結果を踏まえ、教員提案事業単独開催よりも、他団体や他機関とのコラボにより、一層地域住民の関心が高まるようイベント開催の周知方法や開催日時についても検討していく。



13) こどもたちに「自分のからだ」を伝える事業

担当者：西山修平、宮崎つた子、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、地域の教育・福祉に関わる機関・団体と協力連携して、小学校入学前の好奇心の強い子どもたちを対象とし、「自分のからだ」について、紙芝居や教材を用いて伝える活動である。

【地域貢献のポイント】

1. 地域のニーズへの対応
2. 本学の専門性の活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 地域、教育・福祉機関で子どもの健康教育に取り組む意識の醸成
5. 子どもの自己肯定感の向上に寄与
6. いじめや虐待防止に貢献

I. 活動計画

[数値目標]

1. 関連する機関・団体からの連携希望：1件以上
2. 連携機関・団体との合同会議(事前・事後会議含む)：5回程度
3. 連携機関・団体での「自分のからだ」を伝える事業の実施：3回以上

[実施計画]

関連する機関・団体への広報・募集

1. 連携希望機関・団体の情報収集
2. 連携機関・団体からの希望に応じて企画内容の検討
3. 実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打ち合わせ(学内)
4. 実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打ち合わせ(依頼先と合同)
5. 事業開催に関する準備、当日までのリハーサル・サポートの実施
6. こども達に「自分のからだ」を伝える事業の実施(当日)
7. 実施後の評価(依頼先と合同・当日)
8. 事業担当者(学内)間の反省会の実施と評価の検討
9. 依頼先との反省会(連携機関・団体との合同反省会)の実施

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 方法

初年度行う事業であるが、関連する県内のNPO団体(以下NPO)より連携希望があり、

NPOの活動を支援・協働する形で全5回のプログラムをプロセス(①各回の企画・活動案の作成、②使用教材と役割の決定、③学内リハーサル、④プログラムの実施、⑤親・NPOスタッフアンケート実施、⑥事業後の反省会および次回の打ち合わせ)に沿って実施した。また本事業の最終回終了後に参加者(親・子)の振り返りや事業後にNPOと事後会議を行い、事業に対する参加者・スタッフの評価、次年度に向けての改善点などの検討を行った。

2. 実施内容

全5回のプログラムは、表1のとおりである。プログラムは、①導入(手遊び)②紙芝居(「NPO法人『からだフシギ』」の開発教材)③ワーク④からだのぬりえで構成した。①の導入の手遊びは、テーマに関連する内容の手遊び、②の紙芝居は読み聞かせを、NPOのスタッフにより行った。③のワークは大学教員が担当し、紙芝居の内容の理解を深めるため、様々な教材を活用して体験して学ぶ機会を設けた。教材は、NPOのスタッフや大学教員が制作したものと既製品を使用した。④は、テーマを反映した自作のぬりえを配布し、ワーク後に子どもたちが取り組んだ。

表1 全5回のプログラム内容

開催日	紙芝居	ワーク・教材	ぬりえ
第1回 7月25日	たべもののおりみち	①たべもののおりみちをみてみよう ②小腸の長さ体験 ③胃の中身スライム	たべもののおりみちをたどってみよう
第2回 8月1日	おしっこのはなし	①おしっこについて ②おしっこをくらべてみよう	おしっこのいろをみてみよう
第3回 8月7日	すってはいて	①肺の位置を確認してみよう ②模型で学ぶ肺のメカニズム ③すってはいて呼吸を感じよう	すってはいて
第4回 8月23日	のうとしんけい	①脳のはたらき ②しんけい伝言ゲーム ③お豆腐実験	のうとしんけい
第5回 8月29日	おとこのこおんなのこ	①だいじなところをたいせつにしよう ②「イヤ!」っていおう!	おとこのこおんなのこのだいじなところ

3. 参加者

本事業の参加者は、親10名、子ども14名で子どもの年代として4歳から6歳であった。5回のプログラムの参加延べ人数は、親55名、子ども67名の合計122名であった。NPOスタッフの参加延べ人数は39名参加した。

[評価]

数値目標として、1)については1件のNPOと連携したため達成できた。2)については、本事業を行う前にNPOと事前会議を行い、各事業前後に1回ずつの会議を行い事業の内容

や方向性、スケジュールといった合同会議を7回実施し、3) 事業に関しては計5回事業を実施したため、この2点については大きく達成できたと考える。

またそれぞれの事業終了時にアンケートを実施しており、5段階評価で「とても満足」「満足」と回答した参加者が100%であったことから、本事業を遂行した意味合いは大きいと考える。参加者からの具体的な感想を以下に一部抜粋して記載する。

- ・性教育をどのようにしたらいいかわからないという意見をよく耳にするので、この講座で第三者に教えていただけるのはありがたかった。
- ・親子で共通の知識を得られるので、身体のことを話題にしやすいし、次の学びにつなげやすい。
- ・自分の身体づくりやしぐみを知る機会があると、自分で身体を大切にしようとするようになった。

Ⅲ. 今後の課題

NPOとの連携において会議を複数回行うことで、事業の方向性やその回でどういった内容を伝えるべきかを共通認識として捉えることができ、事業を円滑に執り行うことができた。次年度以降も、教育・福祉関連機関と連携し、こどもたちに「自分のからだ」の大切さを認識できるように新たなプログラムなどを検討し事業を遂行していく。

ワーク：模型で学ぶ肺のメカニズム



ワーク：しんけい伝言ゲーム



14) 災害に備えよう

担当者：清水律子、中西貴美子、浦野茂、森下直紀、菅原啓太、上杉佑也、荻野妃那、
荒木学、山本奈津美、萩原由佳

【事業要旨】

南海トラフ地震発生危機が刻々と迫る今、地域住民が危機感をもち防災・減災対策を行うことが求められている。本事業では、本学の看護教育・研究機関としての機能を活用して、地域住民の「自助」「互助」を高め、防災の日常化を目指している。

【地域貢献のポイント】

1. 啓発ブースへの来場を通じて、日常的に災害に備える方法や最新の防災に関する情報を発信できる。
2. 啓発ブースで防災・減災対策に関する話題提供や地域交流センター活動報告会により個人や地区組織で取り組む防災力の向上となる。

I. 活動計画

[重点課題]

地域住民の防災への関心は高いが、その意識は日常的なものではなく、災害への備えも十分ではない。

[実施計画]

1. 啓発ブースを開設（年1回）
2. 地域住民や本学の学生や教職員などへの情報発信（年1回）
3. 学生ボランティアの協力（1～4年生 3～5名程度）

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 啓発ブースを開設

1) 概要

(1) オープンキャンパス

対象者：オープンキャンパス来場者

日 程：令和6年8月3日（土）

場 所：本学

テーマ：「災害に備えよう」

目 的：災害の備えについての情報発信

学生ボランティア：1～4年生の3～5名

(2) 津市健康まつり

対象者：健康まつり来場者 * 「津まつり」と同時開催

日 程：令和6年10月13日（日）

場 所：津リージョンプラザ

テーマ：「災害時における感染対策」

目 的：災害時における感染症予防方法の情報発信と感染症対策グッズの紹介

学生ボランティア：なし

2. 啓発ブースの詳細（写真：津市健康まつりでの活動）

オープンキャンパスでは、災害時の備えとして防災グッズなどを展示した。主に学生ボランティアを中心として啓発活動を実施した。

津市健康まつりでは、避難所生活での感染症対策についてのポスター（下参照）や、感染症対策グッズを紹介して啓発活動を行った。感染症対策グッズについては、実際に手に取ってもらい、感染症対策の関心が高まるように説明した。体験企画については、ハサミや糊を使わない組み立て式の紙食器作りのブースを開設した。

＜感染症対策グッズ紹介＞



＜紙食器作り体験＞



避難所生活での感染症対策(特に感染性胃腸炎)を知ろう!

感染症について

避難所で特に流行しやすい感染症

急性呼吸器感染症 例:COVID-19 インフルエンザ等

感染性胃腸炎 例:ノロウイルス ロタウイルス

微生物が原因となって引き起こされる病気の総称

＜代表的な腸炎＞
ウイルス性胃腸炎
例:ノロ、ロタ、アデノなど
代表的な症状
発熱、下痢、嘔吐、腹痛など

細菌性胃腸炎
例:病原性大腸菌、サルモネラ菌など
代表的な症状
腹痛、下痢、嘔吐、血便など

ノロウイルスの特徴

- 時の嘔吐・下痢症状が強い
- 2～3日で改善していくことが多い
- 潜伏期間が1～2日で、感染力が強く、秋～冬場に爆発的に流行する傾向

ロタウイルスの特徴

- 初期に39度台になることが多い
- 嘔吐は1～3日程度で改善
- 下痢は1週間ほど継続
- 便がレモン色なり、重症化すると白っぽく変化

予防方法について

手指衛生

- 水が使用できないことを想定して、『アルコールを含んだ手指消毒薬』や『ウェットティッシュ(アルコールを含有した除菌シートが好ましい)』を避難グッズに入れておくのと良いでしょう
- 手指消毒のポイント4つ
- 可能な限り汚れを落としてから使用する(流水で手を洗えない時は、ウェットティッシュで目に見える汚れを先に落とす方が効果的)
- 十分な量の手指消毒剤を使用する(手全体に塗り込んで、15秒以内に乾燥しない分)
- 塗り残しやすい部分を知っておき、意識的に塗り広げる※1・2
- 消毒すべきタイミングで実施する※3

※1 手指消毒の手順

- ① 十分に水を濡らします
- ② 手のひら同士をこすり合わせます
- ③ 手の甲をこすり合わせます
- ④ 手の指をこすり合わせます
- ⑤ 手の指の関節をこすり合わせます
- ⑥ 手の指の関節をこすり合わせます
- ⑦ 十分に乾燥させます

※2 洗い残しの多いところ

※3 手指消毒を行うタイミング

食事の前
食品や未調理の食材に触れる前後
トイレに行った後
おむつ交換、便や吐物を処理した後
病人の世話・傷の手当の後
咳やくしゃみ・鼻をかんだ後
動物に触れた後
マスクや手袋を外したり、ごみを取り扱った後
多数の人が利用する場所の入退室時、共有物に触れた後

トイレでの感染予防

- 入り口でトイレ用のサンダル履き替える
- 便後は汚物処理の方法を徹底し、汚物の保管場所へ破棄する
- トイレ後は、石けんと流水による手洗い、または手指消毒を行う
- バケツなどにくみ置きした水を使う場合は、直接バケツの中の水で手を洗わない
- 手を拭くタオルの共用はせず、個人用タオル、もしくはペーパータオルを用いる
- トイレを汚した場合は職員又は管理者等に知らせる

食事時の感染予防

- 食事は石けんと流水による手洗い、又は手指消毒を行う
- 消費期限・賞味期限を確認する
- できるだけ早く食べ、食べ残したものは思い切って捨てる
- 食器は洗淨する
- 水が使えない場合は、食器にラップなどを巻いてから使用し、使用後はラップを捨てる
- 袋入りの食べ物は、手でちぎって食べたりせず直接食べる

3. 企画の感想とアンケート結果

オープンキャンパスでは、防災グッズなどの展示をみた来場者から「参考になった」等の感想があった。津市健康まつりでは、ポスターや展示品をみた来場者から「避難所は水が使えないこともあるから感染対策は必要ですね」、「指に洗い残しが多くなるんですね。指までしっかり洗うように気を付けます」、「非常食はあるけど、こういった物（衛生管理グッズ）準備してませんでした。確かに、あった方がいいですね」といった感想があった。紙食器作りの体験者から「こんな物あるなんて知りませんでした」、「結構、丈夫ですね」の感想があった。津市健康まつりでのシールアンケートは、ポスター内容と感染対策グッズについて、参考になったかどうかを尋ね、最も参考になった内容が、

「感染対策グッズ」、次いで「避難所で特に流行しやすい感染症の特徴」であった(図1)。

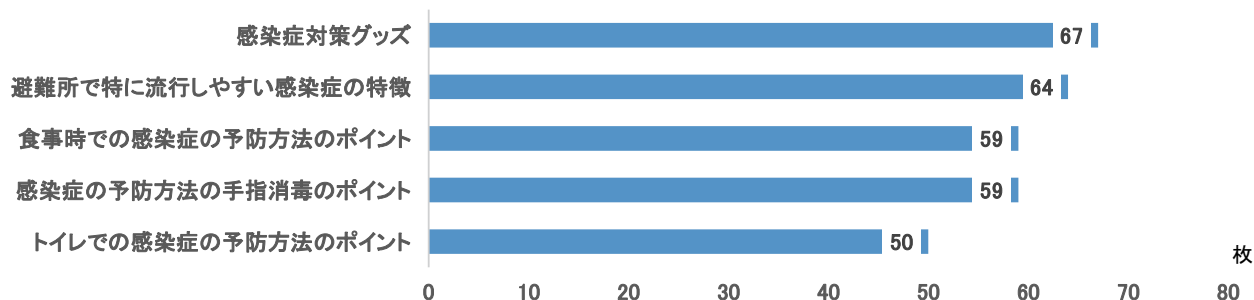


図1 参考になった内容

[評価]

オープンキャンパスでは、防災グッズの展示や学生ボランティアの誰にでも理解しやすい説明により、来場者の災害への備えの意識づけにつながった。

津市健康まつりでは、避難所生活での感染症対策についてポスターを活用して説明し、さらに展示した感染症対策グッズを用い実演することで、地域住民への啓発になった。看護大学教員による情報提供は、根拠を基に必要性や対策方法を示されることから、地域住民にとって正しい知識を得る機会となっている。そして、知識の提供だけでなく体験企画を設けることで、地域住民にとって災害への備えが身近に感じられ、防災への備えの意識が高まっていた。

Ⅲ. 今後の課題

災害に備えるためには、防災を日常化とすることが重要である。地域住民は防災に関心があるが、その意識が日常化しているとは言い難い。そのため、災害に備える意識が継続するように、災害にかかわる情報を定期的に発信する必要がある。また、災害対策は、日々進化していることから、最新の情報や日常的に備えるための工夫・方法の情報を発信することも、災害の備えにつながる。さらに、看護大学教員による根拠に基づいた情報提供は、地域住民は正しい知識を得る機会となる。引き続き、地域住民が来場するイベントなどで、防災の意識の向上や防災を見直す機会となるような啓発活動を実施していく。

15) 社会的に養育が必要な子どもとその子どもを育てる

家族の交流および活動支援事業

担当者：宮崎つた子、中北裕子、長谷川明子、上杉佑也、ドライデンいづみ

【事業要旨】

地域には、社会的養育のもとで暮らす子ども達が居り、その子ども達を様々な形態で育てている家族がいる。本事業の目的は、親や家族の養育に関する悩みの軽減、社会的養育のもとで暮らす子ども達にとっての健やかな育ちの場の支援である。今年度は、地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を2回、クリスマス会を1回実施できた。

【地域貢献のポイント】

- ・社会的養育のもとで暮らす子どもの親や家族のニーズへの対応
- ・本学の専門性の活用
- ・本学の地域貢献活動への広報的効果
- ・地域社会に対する（社会的養育の必要な子ども達にとっての健やかな育ちの場の重要性に関する）意識の醸成
- ・子育て不安の軽減や児童虐待防止に貢献

【昨年度からの課題】

参加者は社会的養育のもとで暮らす子どもとその家族のため、連携協力団体と協議しながらニーズに合う参加人数調整や開催場所の選定を行うことが課題である。また、連携団体が開催しているイベントを活用した交流会支援や学生ボランティアの参加を促す広報の工夫が必要である。

I. 活動計画

[数値目標]

1. 福祉、関係機関からの協力・連携希望：1団体以上
2. 親や家族の交流会開催支援：1回以上
3. 親や家族の交流会参加者：延べ5人以上
4. 参加者のアンケート満足度（4件法）：3以上

[実施計画]

1. 事業実施のための広報
2. 事業の実施
 - 1) 連携団体と連携して親・家族の交流会の企画を支援する。
 - 2) 連携団体と連携して親・家族の交流会実施・運営を支援する。
 - 3) 事業評価のためのアンケートを実施し、参加者や支援者の満足度、意見や要望等

について連携団体と共有・評価する。

3. 事業の反省会の実施：反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 第1回目連携団体との打ち合わせ

1) 日時：令和6年11月15日（金）、14時00分～15時00分、三重県立看護大学

2) 参加者：5名：関係団体2団体（里山学院フォスタリング、リボン会）から各1名、本学教員3名

3) 内容：連携団体から、社会的養育が必要な子どもを育てる親は、家族同士の出会いや交流を求めているが、その機会が少ないなどの課題について説明があった。その内容を踏まえて、12月15日の事業の企画について打ち合わせを行った。

2. 第2回目連携団体との打ち合わせ

1) 日時：令和7年1月27日（月）、11時00分～12時00分、三重県立看護大学

2) 参加者：5名：里山学院3名、本学教員2名

3) 内容：連携団体から令和7年3月中旬に、鈴鹿・亀山支部交流会の支援依頼があり、日程や企画内容の確認を行った。

3. 中勢支部交流会とクリスマス会支援

1) 日時・場所：令和6年12月15日（日）津市たるみ子育て交流館

・交流会：10時00分～12時00分

・クリスマス会：12時00分～15時30分

2) 参加者・関係者

・交流会：参加者23名（里親13名、子ども10名）、支援者12名（連携団体支援者6名、保育関係専門職2名、学生ボランティア3名、教員1名）

・クリスマス会：参加者23名（里親13名、子ども10名）、支援者18名（連携団体支援者2名、他大学学生ボランティア11名、本学学生ボランティア3名、教員2名）

3) 内容

・交流会：大人の部は交流会、子どもの部はクリスマスをテーマにした工作

・クリスマス会：ランチ会、お楽しみ企画①ジャグリングボール作り/遊びコーナー（皿回し他）、お楽しみ企画②（三重大ジャグリング披露と体験会）、他



4) アンケート結果および評価（参加者評価は連携団体と一部共有した結果）

・参加者（終了後の感想）：「素敵な企画と細やかなお世話をありがとうございました」「若い人、子ども達からエネルギーをもらいました」「午前の部は親子分かれ

てであったが、親も子もそれぞれ有意義に過ごせた」「学生ボランティアさん達と一緒に楽しめた」と肯定的な意見であった。

- ・ボランティア学生のアンケート結果：満足度（4件法）は、参加者3名全員が「満足」であった。本日のボランティアに参加した感想では、「今回のボランティアでは子どもたちと遊ぶだけでなく、家族と過ごす時間の大切さを目の前で見ることができた」などの感想であった。

4. 鈴鹿・亀山支部交流会支援

- 1) 日時・場所：令和7年3月16日（日）、9時30分～12時00分、牧田コミュニケーションセンター
- 2) 参加者・関係者：参加者11名（里親6名、子ども5名）、支援者15名（連携団体支援者9名、保育関係専門職2名、学生ボランティア2名、教員2名）
- 3) 内容：大人の部は交流会、子どもの部は工作



5. ボランティア学生のアンケート結果：満足度（4件法）は、参加者2名が「満足」であった。ボランティアに参加した感想は、「最初はとても緊張したが、小さい手で手を握ってくれたりして、こういう子どもたちを守りたいと思った」「悲しい思いをする子どもたちがより多くの里親と出会うことが出来たらいいなと感じた」「先生方の子どもに対する接し方や話し方がとても印象的で、実習に活かせるなと思った」などであった。

[評価]

支援事業終了後の連携団体からは、「社会的養育が必要な子どもを育てる親は、家族同士の出会いや交流出来る機会を求めている現状があり、本学との連携・協力事業によって子どもたちが安全に過ごすことが出来、親も安心して交流の時間をもてた」と好評であった。学生ボランティアのアンケート結果からも、社会的養育のもとで暮らす子ども達や家族への支援の必要性や交流を通して様々な学びの機会となったと思われる。本支援事業の数値目標および実施計画はすべて達成することができた。

Ⅲ. 今後の課題

今後も、同じ状況の里親・家族同士の仲間づくりを支援する必要があると考える。この支援活動を通して、里親や家族の養育に関する悩みの軽減に貢献し、社会的養育のもとで暮らす子ども達にとっての健やかな育ちの場の支援につなげていきたいと考える。

Ⅱ. 卒業生支援事業

1. 卒業生支援プロジェクト
2. 卒業生のきずなプロジェクト

1. 卒業生支援プロジェクト

担当者：岩田朋美、斎藤真、長谷川智之、ドライデンいづみ、田端真、荒木学、
米川さや香、山本奈津美、一尾麻美、片岡祐樹、中野由佳

【事業要旨】

本事業では、卒業生相互の情報共有およびキャリアディベロップメントを支援することを目的に、三重県立看護大学同窓会（以下、同窓会）と連携し、各種事業を展開している。

今年度は、①同窓会活動支援、②卒業生調査の公表、③在学生に対する同窓会の周知を実施する。

【地域貢献のポイント】

本事業における地域貢献のポイントは以下の2点である。

- ・ 同窓生が大学や同窓会のイベントに参加することで、同窓生間の情報共有およびキャリアディベロップメントに寄与することができる
- ・ 在学生が卒業後においても同窓会会員の相互交流について知ることで、キャリアディベロップメントの一助となることができる

【昨年度からの課題】

在学生および卒業生が本学や同窓会を身近に感じることができるよう、同窓会と連携し、卒業生に対する各種イベントの企画、発信を行っていくことが必要である。

I. 活動計画

[重点課題]

1. 同窓会が主催するイベントを1回以上支援する。
2. 卒業生調査の結果を学内外に公表する。
3. 同窓会加入者数が昨年度より1名以上増加する。
4. 同窓会と意見交換会を1回開催する。

[実施計画]

1. 同窓会主催の講演会の運営を支援する。
2. 卒業生調査の結果の公表に向けて、調査結果のまとめ方を検討する。
3. 在学生に対して同窓会周知活動を行う。
4. 同窓会との意見交換会を開催し、今後の同窓会支援の在り方を検討する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 同窓会講演会への支援

令和7年3月1日（土）に開催された同窓会主催の講演会『笑激!!! バラエティ番組から学ぶ！「コミュニケーション向上委員会」』（講師：Wマコト）を支援した。昨年度に作成した同窓会講演会開催に関する申し合わせ事項にもとづき、同窓会、地域交流センター卒業生支援事業担当者、ならびに本プロジェクトが密に連絡をとりながら、それ

それぞれの役割を担った。本プロジェクトでは、周知活動と当日の運営を支援した。周知活動として、学部生および大学院生にはメールによる案内を2回行った。教職員には、同窓会作成のチラシを配付するとともにメールによる案内を行った。また、当日の運営において、本プロジェクトメンバー3名が、会場準備、受付、会場案内などの役割を担った。



同窓会講演会会場の様子

当日の参加者は48名（内訳：来場者32名、オンライン16名）であった。このうち、卒業生は40名であった。また学内者の参加者は、在学生1名、同窓会会員以外の教職員6名であった。

2. 卒業生調査結果の公表

三重県立看護大学と同窓会が協働で実施した卒業生調査の結果は、卒業生のキャリアの動向の把握や卒業生支援の検討のための貴重な資料である。この調査結果の公表に向けて取り組んでいる。今年度は、三重県立看護大学紀要投稿規定改訂後に論文投稿ができるよう、第2報の調査結果のまとめ方について検討を進めた。

3. 在学生に対する同窓会の周知

7月13日（土）に開催された夢緑祭において、同窓会PRコーナーの案内を行った。また、大学内のイベントに参加した学生に同窓会グッズを配付し周知を行った。同窓会の報告によると、4年生の同窓会加入者は昨年度よりも数名増加したものの、卒業予定者の3割程度であった。

4. 同窓会との意見交換会

令和7年3月13日（木）に、同窓会会長および大学（地域交流センター長、地域交流センター卒業生支援事業担当者、本プロジェクト責任者）で今年度の活動内容および次年度計画を共有した。

[評価]

重点課題1「同窓会が主催するイベントを1回以上支援する」は、同窓会、卒業生支援事業担当者、ならびに本プロジェクトが連携しながら講演会開催を支援することができた。しかしながら、在学生の参加者が1名と少なく、在学生への周知活動に課題が残った。重点課題2「卒業生調査の結果を学内外に公表する」については、結果の公表には至らなかったものの、それに向けて着実に前進することができた。重点課題3「同窓会加入者数が昨年度より1名以上増加する」については、新規加入者数は昨年度より微増となり目標を達成したものの、低調が続いている。重点課題4「同窓会と意見交換会を1回開催する」は、計画通りに活動し、目標を達成することができた。

Ⅲ. 今後の課題

昨年度より、同窓会主催の講演会開催を支援してきた。引き続き同窓会のニーズをふまえ、同窓会ならびに卒業生支援担当者と連携しながら同窓会主催のイベント開催を支援していく。また、同窓会主催イベントへの参加は、在学生の同窓会に対する認知度を上げ、

親近感を高めることが期待される。在学生の参加者が増加するよう、イベントの周知方法を検討することが必要である。

同窓会周知活動を継続して行っているものの、同窓会新規加入者数の低調が続いている。同窓会と協働しながら新規加入者確保における課題を分析し、本プロジェクトが実行できる加入者確保に向けた新たな取り組みを検討する必要がある。

2. 卒業生のきずなプロジェクト

担当者：中北裕子、林辰弥、灘波浩子、日比野直子、ドライデンいづみ、川島珠実
米川さや香、辻まどか、片岡祐樹、荻野妃那、山本奈津美

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。

【地域貢献のポイント】

1. 卒業生が気楽に母校に立ち寄る場を設けることで、卒後に困った際に、ハード・ソフト両面でのリソースを大学で得ることができることを知ってもらう。
2. 仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後1～3年までを対象に卒業生支援事業として大学がフォローすることで、離職予防に貢献する。
3. 医療機関に就職した卒業生に比べ、保健所に就職した卒業生は採血技術の習得の機会が限られている。支援を行うことで、県民へのサービス向上につなげることができる。

【昨年度からの課題】

茶話会参加者の満足度は高く、今後も継続実施を希望する声が多数あった。また、採血練習では、技術向上の機会だけではなく、参加者同士の交流にもなっていたことから、継続して開催する必要が認められた。参加者の多くが就職先や所属長からの配慮により参加できていた一方で、本会の情報が周知されていない施設もあることがわかった。stメールとチラシの双方を活用し周知を行うと共に、実習等で卒業生の就職先を訪れる際には、積極的に茶話会の対象者及びその上司に茶話会の開催について呼びかけることが必要である。

I. 活動計画

[数値目標]

1. 卒後1年目を対象に茶話会を2回（7月、2月）開催する。
出席者数は、第1回、第2回茶話会それぞれ30名程度を目標とする。
2. 卒後2年目を対象に茶話会を1回（2月）開催する。
出席者数は、30名程度を目標とする。

[昨年度からの変更点]

1. 周知の強化：開催チラシだけではなく、stメールを複数回送信するとともに、教員が連絡先を知っている卒業生に個別で周知を行う。

[実施計画]

【茶話会の開催】

1. 卒後1年目の卒業生を対象に第1回茶話会を7月に対面にて開催する。保健所就職者を対象に採血練習のブースを設ける。

2. 第2回茶話会は例年3月に開催していたが、医療機関からの「年度末は勤務調整が難しい」との声により2月に対面にて開催する。
3. 卒後2年目の卒業生を対象とした茶話会を2月（卒後1年目卒業生対象の茶話会と同日）に対面にて開催する。
4. 各職場の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。全体会終了後、個別に本学教員に相談できる時間を提供する。特に2月は2学年を同時に集合する場とすることで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。
5. 茶話会の開催に向けて
 - 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
 - 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して連絡し、会への出席を呼びかける。
 - 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
 - 4) 教職員には開催周知共に、参加協力を依頼する。
6. 茶話会の開催後
 - 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アドレスを活用して、配信する。
 - 2) 茶話会への参加協力についてのお礼文書を参加者の就職先に郵送する。
7. 卒業生への周知
 - 1) 卒業式のリハーサル時に、「卒後1年目対象茶話会の開催予定」を周知する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 第1回茶話会
 - 1) 令和6年7月13日（土）14時～16時に大講義室にて開催した。卒業生15名、教員11名／計26名の参加があった。
 - 2) 参加者全員が近況を報告しあい、新人職員研修や仕事、職場の様子について共有することができた。
 - 3) 保健師対象に採血練習の場を設けたところ、看護師就職者が採血のコツを教え合うなど、卒業生同士が技術を通して交流する場にもなっていた。
 - 4) アンケート結果（回答者13名、回答率86.6%）：茶話会を知った方法は、病院へ配布したチラシが79.6%、本事業メールからが69.2%、教員からが7.6%であった。参加に対する支援は、休暇41.6%、勤務扱い8.3%、特になしが41.6%であった。開催方法（夢緑祭との同日開催含む）や時期・時間・内容について、全員が「満足」と回答し、2月の茶話会開催を希望していた。
※自由記述抜粋：「先生らがあたたかく迎えてくださって嬉しかったです！」「話しやすい雰囲気、快く迎えてくれる雰囲気がとてもよかったです」「先生方や同級生と話せて楽しかったです」「みんなの貴重な話が聞けてよかったです。ありがとうございました！」「同期と話せて楽しかったです」

【ウェルカムメッセージ】



【採血練習の様子】



【参加者記念撮影】



2. 第2回茶話会

- 1) 令和7年2月1日(土)14時～16時に卒後1・2年目の卒業生を対象として、中講義室1にて開催した。卒業生23名(卒1:13名、卒2:10名)、教員7名/計30名の参加があった。
- 2) 旅行帰りに駆け付けた卒業生もあり、参加者全員がケーキやお菓子を食べながら、近況を報告し合った。卒2全員から卒1にメッセージがあり、異学年の交流が行われた。
- 3) アンケート結果(回答者19名、回答率82.6%)：茶話会を知った方法は、病院へ配布したチラシ52.6%、本事業メールからそれぞれ47.3%、教員から15.6%、学年LINEが0%であった。参加に対する支援は、休暇31.6%、勤務扱い5.2%、特になし26.3%であった。開催時期・時間・内容について、開始時刻について「どちらともいえない」1名の他は「満足」と回答し、今後も同様の茶話会開催を希望していた。開催方法(大学内・対面)についても「どちらともいえない」1名の他は「満足」と回答としていた。第2回目の茶話会を卒後1、2年目とすることに対しては、全員が「望ましい」と回答し、後輩にも同様の企画を行うことに対して全員が「望ましい」と回答した。

大学が行う支援として希望するものとして、茶話会の他に再就職支援、進学等キャリアアップに関する相談のほか、看護技術演習(採血や注射)を望む声もあった。
※自由記述抜粋：「三重県立看護大学で、学生時代から生徒と先生の距離が近く話しやすかったからこそ先生にも会いたいと思えた。大学に誇りを持っています」
「先生方は「いつでも遊びに来て!」と言ってくさいますが、北勢からだとなかなか...平日は仕事なので余計に難しいです...」「久しぶりに会えて嬉しかったです。

お話も楽しかったです」「ぼちぼちやっていきましょう!」「同期が頑張っていると
思えると明日からでも頑張れると思ったし、色々な働き方があると思いました!」
「保健師の免許をとった意味が生きてくるかも」

【参加者記念撮影】



〔評価〕

今年度の茶話会の参加者は、第1回は26名であったが、第2回は卒業生が20名を超え、
教員を含めた参加者は目標の30名を達成することができた。第1・2回とも茶話会は16時
に終了したが、その後もほとんどの卒業生が名残惜しそうに語り合う姿が見られ、卒業生
が解散したのはほぼ17時であったことから、卒業生同士、卒業生と教員が再会を喜びあえ
た意義はあったと考える。職場から離れ、同窓生や教員らと近況を語り、辛さを共有して
同窓生が同じように頑張っていると知ったことで「もう一年、頑張ろう」という気持ちに
繋げることができたと推測する。2学年同時開催による異学年交流は、卒後1年目の卒業
生にとっては「身近な先輩」の体験談から、教科書や研修では得られない現場ならではの
対応・工夫を聞けたり、「現実的な目標」に気づくきっかけになると思われる。また、卒後
2年目の卒業生にとっては、自分の経験を語ることで自己成長を再認識できたり、自分の
話が誰かの役に立ったと感じられたりすることが、今後も仕事を続けていく自信につな
がると思われる。このような異学年交流は、他施設の働き方・教育体制を広く知ること
で自身の職場の特徴にも気づくきっかけになったほか、「母校とのつながり強化」にもな
ったと推察する。

Ⅲ. 今後の課題

本事業は、卒業後の成長支援の一環として有効であること、実務経験初期における離職
予防・定着支援の役割を果たしていること、同年代・他施設とのつながりをつくる貴重な
交流の機会であることから、今後も継続すべきと考える。

第1回目の技術練習ブースは、採血実施機会の少ない保健師が、実務前に技術を習得す
ることに加え、参加者同士の交流にもなっていたことから、今後も継続して実施する。第
2回の茶話会は2学年同時開催で、異学年共に満足度が高く、効果もあったため、継続し
て実施する。開催案内はstメールとチラシの双方を活用し周知を行うと共に、実習等で卒
業生の就職先を訪れる際には、積極的に茶話会の対象者及びその上司に茶話会の開催につ
いて継続して呼びかけることが必要であると考えられる。

Ⅲ. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修
2. 助産師（中堅者・指導者）研修
3. 三重県認知症対応力向上研修
 - ・ 三重県看護職員認知症対応力向上研修
 - ・ 三重県病院勤務以外の
看護師等認知症対応力向上研修
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業

1. 三重県新人助産師合同研修

担当者：大平肇子、渡邊聡子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」「妊産褥婦及び家族への説明と助言」「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

新人助産師が助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう、助産師としての成長を支える機会を継続的に提供する。

I. 活動計画

三重県より「令和6年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、三重県内の医療施設で働く新人助産師を対象とした4日間の研修をおして、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の習得を支援する。これまでの本事業の評価にもとづき、「仲間とともに、わかち合い、みがき合い、輝く助産師になる！」をテーマに、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後1年以上が経過し、医療施設における行動制限が緩和されていることをふまえて、新型コロナウイルス感染症パンデミック前と同様に対面形式のみの講義形態とした。

〔重点課題〕

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和6年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。

II. 活動の結果と評価

〔結果〕

1. 研修プログラム

昨年度の本事業のアンケートで得られた新人助産師の研修会へのニーズをふまえて、4日間の研修プログラムを企画し実施した（表1）。参加者同士の交流を促進するため、グループディスカッションの機会を設けた。また、より多くの参加者と交流ができるよう、できる限り同じメンバーとならないようグループ分けを行った。さらに、今年度は開始時に各自で目標を設定したうえで、各日終了時に振り返りを行った。

表1 令和6年度三重県新人助産師合同研修プログラム

日程	午前(10:00~12:00)		午後(13:00~16:00)	
11月2日 (土) 1日目	あいさつ 研修の目標設定	周産期分野における感染管理の実際 (10:30~12:00) 【講義】	母乳育児支援の基礎と実践 (13:00~15:30) 【講義・演習】	
	三重県立看護大 学教員	三重大学医学部附属病院 感染管理認定看護師 新居 晶恵	日本母乳の会理事 パルモア病院看護部長代行 井田 久留美	
12月7日 (土) 2日目	周産期のメンタルヘルス ー予防とケアー (10:00~12:00) 【講義・演習】		ハイリスク妊産婦の看護 (13:00~14:20) 【講義・演習】	新人助産師のための ストレスマネジメント (14:30~15:50) 【講義・演習】
	三重大学医学部附属病院 看護師長・母性看護専門看護師 森實 かおり		三重県立総合医療センター 看護師長 佐藤 里絵	岐阜協立大学 准教授 小野 悟
1月13日 (祝・月) 3日目	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 (10:00~12:00) 【講義】		ハイリスク新生児の看護 (13:00~15:30) 【講義・演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内菌 広匡		国立病院機構三重中央医療センター 副看護師長・新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美	
2月8日 (土) 4日目	産婦人科診療ガイドラインにもとづく緊急時の対応 (10:00~12:00) 【講義】		事例検討をとおした助産師の判断と看護実践 (13:00~15:50) 【演習】	
	伊勢赤十字病院 部長 前川 有香		伊勢赤十字病院 部長 前川 有香 国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 副看護師長 鈴木 薫、副看護師長 東 真由美	
				本日の振り返りと共有 (15:30~16:00) 三重県立看護大学教員
				本日の振り返り (15:50~16:00) 三重県立看護大学教員
				本日の振り返りと共有 (15:30~16:00) 三重県立看護大学教員
				修了式 (15:50~16:00) 三重県立看護大学教員

2. 研修の申込み状況

6月に妊婦健康診査を実施している県内の医療施設58施設（病院18施設、診療所40施設）、教育機関4施設、職能団体3団体に開催案内を送付し、参加者を募集した。13施設から29名の申込みがあった。このうち2名が本学卒業生であった。

3. 研修申込み者の属性

研修申込み者29名の就業場所は、診療所3名（10.3%）、病院26名（89.7%）で、病院のうち周産期母子医療センターは17名（58.6%）であった。また、勤務部署が新生児集中治療室（NICU）は5名（17.2%）であった。看護師経験者は4名（13.8%）、経験年数の範囲は1~7年であった。研修修了時点（回答者20名）での分娩介助件数は、「1~9例」4名（20.0%）、「10~19例」3名（15.0%）、「20~29例」1名（5.0%）、「30例以上」2名（10.0%）であった。「経験なし」は10名（50.0%）で、全員が病院勤務であった。その理由として、NICUで勤務していることや2年目あるいは3年目以降で分娩介助を行うことなどが挙げられた。

4. 受講状況

研修各日の出席者数と出席率は、1日目28名（96.6%）、2日目29名（100.0%）、3日目26名（89.7%）、4日目6名（20.7%）であった。積雪のため欠席者が多かった4日

目を除き、出席率は概ね 90%以上であり、昨年度よりも 5%程度高かった。出席日数は皆出席 6 名 (20.7%)、3 日間 19 名 (65.5%)、2 日間 4 名 (13.8%) であった。4 日目の欠席者には、講師の承諾を得たうえで講義資料を郵送した。

[評価]

1. アンケートの回答状況

研修各日のアンケートの回答者 (回収率) は、1 日目 27 名 (96.4%)、2 日目 27 名 (93.1%)、3 日目 26 名 (100.0%)、4 日目 3 名 (50.0%)、修了時 20 名 (69.0%) であった。4 日目の出席者が 6 名と少なかったため、欠席者には研修会全体への評価をたずねる修了時アンケートへの回答をメールで求めた。



3 日目『ハイリスク新生児の看護』
グループワーク

2. 研修内容

研修内容について、4 日間全てにおいて全員が、「期待通り」または「まあまあ期待通り」と回答し、肯定的評価を得た (図 1)。その理由として、『母乳育児支援や感染管理等自分が働く上で役に立つ知識や技術を学ぶことができた (1 日目)』『搬送元、搬送先での役割やどのような情報が必要かなどグループワークを通して学べた (2 日目)』『何気なくしていた新生児ケアの重要性が理解できた (3 日目)』『具体的な対応も知ることができた (4 日目)』などが挙げられた。

本研修が助産師としての基本的知識や技術の習得につながったか、ならびに助産師としての意欲の向上につながったかについて、それぞれ回答者全員が「大変そう思う」または「まあまあそう思う」と回答した (図 2, 3)。助産師としての基本的知識や技術の習得につながった理由として、『全ての分野の勉強が満遍なくでき、講師の先生の経験談などを聞き実践的に学べた』『グループワークも取り入れられており、周りの助産師と交流する機会が多く、色々な話が聞けた』『新たな知識を身につけることができた』などが挙げられた。助産師としての意欲の向上につながった理由として、『わからないことや実力不足を感じ、もっと勉強しようと思った』『自分の知識の甘い部分などを知ることができ課題も見つかった』といった研修をとおした自己の課題の明確化や、『様々な施設のことが知れて刺激になった』『他施設の方との交流もありモチベーション向上につながった』など、グループワーク等をとおした新人助産師同士の交流が挙げられた。また、NICU 勤務者からは、『分娩に関わることが助産師の全てではなく、産後のケアの中でも助産師としてできることはあるのだと学べた』ことが挙げられた。以上の結果から、本研修事業が新人助産師の臨床実践能力の獲得ならびに助産師としてのモチベーション向上に資する研修会であったと考える。しかしながら、「大変そう思う」と回答した人の割合は、例年よりもそれぞれ 10%程度低かった。昨年度までのアンケート結果からは、4 日目の事例検討が実践的な知識の習得やモチベーション向上に寄与していることがうかがわれた。今年度は、4 日目の出席者が少なかったことが結果に影響した可能性がある。

本研修をとおして得られた自己の課題として、『緊急時・異常時の対応』『妊産褥婦への心理的支援』『アセスメント能力』『母乳育児支援』『新生児の看護全般』などの臨床実践における課題のほかに、『自己学習を行い、より安全な医療を届けられるよう努

力する』『臨床で必要な知識がまだまだ足りないと感じた。引き続き勉強を続けていきたい』などの自己研鑽や、『なんでも挑戦して、復習して、経験をつんでいきたい』など今後の助産師としての取り組み方に関する課題が挙げられた。

3. 研修会の運営

研修会の運営については、回答者の全員が「よい」または「まあまあよい」と回答し、好評を得た（図4）。その理由として、『時間管理もしていただいております、質問しやすい空気感でもあった』『グループ分けをしていただいたおかげで同期がいない中でもグループディスカッションがしやすかった』『最後に振り返りの時間をいただけると、今日学んだことを具体的に振り返ることができる』などが挙げられた。

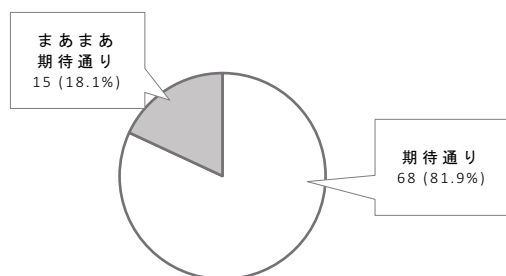


図1 研修内容が期待通りであったか (n = 83)

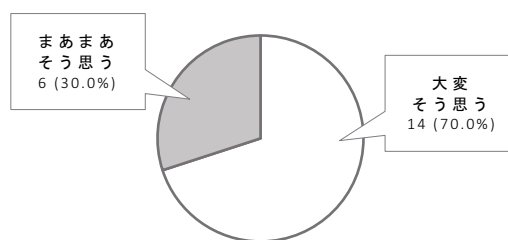


図2 基本的知識や技術の習得につながる研修であったか (n = 20)

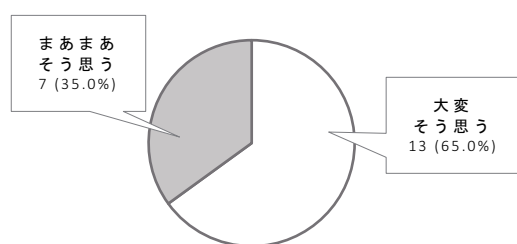


図3 意欲の向上につながる研修であったか (n = 20)

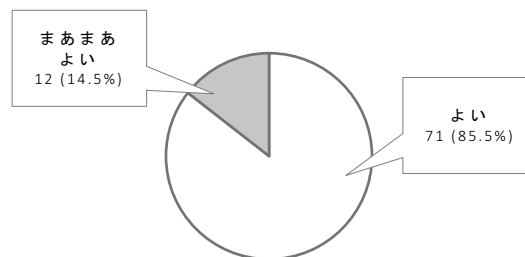


図4 研修会運営に対する評価 (n = 83)

Ⅲ. 今後の課題

本研修会には、NICU勤務の新人助産師も参加する。また、産科病棟勤務であっても分娩介助経験のない参加者もいる。本研修プログラムには、妊産褥婦・新生児に関する内容を偏りなく組み入れるとともに、周産期分野における感染管理やストレスマネジメントなどのテーマも取り入れている。さらに、グループディスカッションなどの機会を設け、新人助産師同士の交流の促進に注力している。こうした工夫が、本研修事業がさまざまな背景をもつ新人助産師から肯定的な評価を得ている要因と考える。今後も、新人助産師や臨床現場のニーズをふまえて、周産期の幅広いテーマをプログラムに組み入れることが必要である。次年度も開催時期・方法・内容を工夫して、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、助産師としてのモチベーションや助産観を高めあう関係性を醸成していくことが課題である。また、三重県は地域により天候が大きく異なる場合があるため、悪天候時の研修開催に係る対応について検討することが必要である。



4日目 事例検討をとおした助産師の判断と看護実践：グループワークの様子

2. 助産師（中堅者・指導者）研修

担当者： 大平肇子、渡邊聡子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。県内で就業する助産師が、妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県の委託を受け、県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした研修を企画し提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をとおして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症の予防対策は緩和されたが、助産師の多様な勤務形態に対応した開催方法を検討するとともに、助産師にとって安心して受講できる環境を整え、魅力ある研修とする。

I. 活動計画

三重県より「令和6年度助産師（中堅者・指導者）研修事業」を受託し、三重県内の医療施設・教育機関で就業する中堅層（助産師経験年数概ね5年以上）および指導者的立場の助産師を対象とした3日間の研修を実施する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度は「自分自身のキャリアを見つめ、助産師の役割拡大について考えよう」をテーマに、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の予防対策は緩和されたが、助産師の多様な勤務形態に対応し、講義形態を対面形式とオンライン形式を併用し、研修参加者が事前にいずれか選択できるように配慮した。また、アンケート実施にあたっては Microsoft Forms を活用した。

〔重点課題〕

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和6年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 研修参加者から、自らや就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修プログラムについて

令和6年10月26日(土)、11月9日(土)、12月21日(土)の3日間(10:00～15:30)の研修プログラムを実施した(表1)。昨年度の本事業のアンケートで得られた結果等をふまえて、研修プログラムを企画した(表1)

表1 令和6年度助産師(中堅者・指導者)研修プログラム

	午前(10:00～12:00)			午後(13:00～15:30)
10月26日 (土) (1日目)	妊婦や育児中の母子をケアする看護職の災害への備え 【講義・演習】			理論にもとづくペリネ(骨盤底筋群)のケア ～身体の声に耳を傾けて感じ取ろう!～ 【講義・演習】
	三重県立看護大学 母性看護学教授 渡邊 聡子			ド・ガスケ研究所 日本セクション シャラン山内由紀
11月9日 (土) (2日目)	ワークショップとグループワークで 助産師としてのキャリアを見直そう! 【講義・演習】			無痛分娩のアセスメントとケア 【講義】
	かつはら助産院 勝原 則子	三重大学医学部附属病院 看護師長・母性看護専門看護師 森實 かおり	三重県立看護大学 母性看護学教授 大平 肇子	神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部 看護学科 准教授 田辺けい子
12月21日 (土) (3日目)	困難な状況にある若年女性に対して必要な支援 ～三重県での現状や課題をふまえて～ 【講義】			困難な状況にある若年女性に対する助産師の支援 【講義】
	総合心療センターひなが 精神科・児童精神科 精神科専門医・指導医、精神保健指定医 山田 智子			まつしま病院 ユースウェルネスKuKuNa 室長 幸崎 若菜

2. 研修参加者の募集および受講状況について

7月に県内医療施設116施設(病院18施設、診療所40施設、助産所58施設)、教育機関7施設、市町母子保健担当者29施設に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目24名、2日目27名、3日目25名であり、のべ応募者数は76名であった。応募者(実人数)42名の受講状況の内訳は、1日のみ19名、2日間13名、3日間11名であった。

出席者は41名(実人数)であり、出席率は97.6%であった。研修各日の出席者数と出席率(出席者/応募者)は、1日目22名(91.7%)、2日目26名(96.3%)、3日目25名(84.0%)であった。出席者のうち、オンライン形式を選択した者は(午前、午後で多かった人数)、1日目11名(52.4%)、2日目13名(50.0%)、3日目12名(63.2%)であり、全日、5割を超える状況であった。応募者の就業場所は病院18名、診療所6名、助産所16名、教育機関2名であった。

[評価]

1. アンケートの回答状況

研修各日終了時のアンケートの回答者(回収率)は、1日目17名(77.3%)、2日目20名(76.9%)、3日目15名(71.4%)であった。

2. アンケート結果

1) 研修内容について

研修内容が期待通りであったかについては、1日目は、期待通り11名(64.7%)、まあまあ期待通り4名(23.5%)であり、その理由は「災害時の経時的な被災者の現状を知ることができた」、「以前からガスケアアプローチの講義を受けてみたかった」などであった。2日目は、期待通り13名(65.0%)、まあまあ期待通り7名(35.0%)であり、その理由は「今後の生き方にとっても参考になった」、「これから無痛分娩を導入するのでタイムリーだった」などであった。3日目は、期待通り14名(93.3%)であり、その理由は「若年女性やハイリスクな状況にある方への支援を考えるきっかけとなった」、「メンタルは苦手分野だったが勉強になった」などの理由が挙げられた。

2) 本研修が助産実践能力の向上につながるかについて

本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には、大変そう思う11名(64.7%)、まあまあそう思う5名(29.4%)であり、その理由として「再度、災害対策マニュアルや備えを見直してみようと思う」、「授乳姿勢、分娩時の体位など取り組んでみたい」などが挙げられた。2日目には、大変そう思う10名(50.0%)、まあまあそう思う9名(45.0%)であり、「助産師としてどうありたいかを考えることにつながった」、「無痛について医師を含むチームで考えていきたい」などが挙げられた。3日目には、大変そう思う12名(80.0%)、まあまあそう思う3名(20.0%)であり、「精神科につなげることが必要と思いました」、「スクリーニングを問診に使用する」、などが挙げられた。

3) 研修参加者にとって必要な取り組みや課題について

研修をとおして得られた助産実践能力の向上に必要な取り組みや課題をたずねると、1日目には「退院指導の際に防災を意識した内容が必要であると感じた」、「まずは自分の身体を整えること」などが挙げられた。2日目は「これからの働きかたについて具体的な計画を立てていく」、「無痛分娩は遷延するという実感もあるが、逆にリラックスして過ごすことで順調な進行だと感じる分娩もある。感覚的にとらえているところも丁寧に振り返る必要がある」などが挙げられた。3日目は「多職種連携のしかた」、「紹介後の症例に関心を持つこと、社会資源の活用法を知ること」などが挙げられた。

4) 研修会の運営について

研修会の運営については、1日目には、よい7名(41.2%)、まあまあよい8名(47.1%)、あまりよくない2名(11.8%)であり、その理由は「質問しやすい雰囲気、人数もちょうどよかった」、「オンラインのグループワークのすすめ方が難しかった」、「講師が顔を動かすと音声揺れて聴き取れなかった」などであった。2日目には、よい13名(65.0%)、まあまあよい7名(35.0%)であり、「室内も暖かく、画面も見やすかった」、「オンラインでの音声聞き取りにくいところがあった」などの理由が挙げられた。3日目には、よい15名(100%)であり、「ハイブリット開催はとても参加しやすい」、「司会・進行等、とてもスムーズでした」などが挙げられた。

5) 希望する研修内容について

今後開催を希望する研修内容として、「ガスケアアプローチを再度」、「困難な状況にある若年女性や精神疾患合併に対して必要な支援を再度」、「マタニティヨガ」、「産痛緩

和」、「母乳ケア」、「栄養管理」、「NIPTの知識と遺伝看護」、「精神疾患を抱える妊産褥婦の関わり」、「帝王切開をいいお産にするためのケア」、「産科の混合病棟化について」、「カンファレンス、グループワークの効果的な進め方」などが挙げられた。

6) その他

その他、本事業に対する意見として、「毎年内容が充実しており、楽しみにしています」、「内容は大変関心があるものでモチベーションの挙がる時間になっている」、「都合がつかず受けられないときはビデオ受講ができればありがたい」などがあつた。

Ⅲ. 今後の課題

アンケート結果から、受講形態を各自の事情に応じて選択できるようにしている点が好評であつた。今後もハイブリッド形式で実施していくことで多くの参加者の受講が見込まれる。しかし、オンラインでの実技演習は、音声に不具合が生じていた。マイク設備の検討、もしくは、実技演習の場合は対面のみとするなど方法について検討していく。また、中堅層以上の助産師は、「最新の周産期に関する話題」、「実践を通じた学び」、「多職種連携」、「後輩の教育」などを課題と捉えており、「自己研鑽の継続」を望んでいることが伺えた。本研修に対する助産師の期待も高いため、参加者が希望する研修内容と、周産期医療における助産師を取り巻く課題をあわせてテーマを検討し、魅力ある研修としていくことが課題である。



3. 三重県認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター；清水律子、川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では、今後の認知症高齢者の増加により、身近な主治医（かかりつけ医）のもとに通院する高齢者の中からも経過中に認知症を発症するケースの増加等が予想されることから、医療従事者が認知症ケアについて理解し適切な対応をできるようにするための研修等を実施し、各地域における早期診断・早期対応のための体制を整備している。本事業は、三重県の委託をうけ、下記の研修を実施するものである。

1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

病院勤務以外（診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等）の看護師、歯科衛生士等の医療従事者に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や認知症ケアの原則、医療と介護の連携の重要性等の知識について修得するための研修

2. 看護職員認知症対応力向上研修事業

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴などに対する実践的な対応力を習得するための研修

1) 病院勤務以外の看護職等認知症対応力向上研修

【地域貢献のポイント】

認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手を育成する。

【昨年度からの課題】

研修プログラムと開催日程の検討。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する。
- ・県内全域から参加者を得る。

[実施計画]

昨年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・地域交流センター委員である老年看護学領域の教員が事業担当に加わる。
- ・到達目標達成に向け、十分な研修時間の確保のため、講義時間を120分（R5 100分）、事例検討時間を90分（R5 60分）とする。
- ・遠方からの受講者に配慮し、午後開催とし、また週末開催では参加しにくい受講者に配慮し、第2回を木曜日に開催する。
- ・各回、演習時にファシリテーターを4名配置する。
- ・演習時のグループ編成を、職種だけでなく、所属施設・地域を考慮し行う。

- ・講義後アンケートの尺度を変更する。

実施計画

- ・研修案内は、7～8月に、三重県長寿介護課が県内診療所・介護事業所にMLによるHPリンクのお知らせにて周知する。本学からは、保健所11施設、保健センター：高齢福祉関連課33施設、三重県訪問看護ステーション協議会、三重県訪問看護事業所224施設、地域包括支援センター68施設、各専門士・師会7か所に開催案内を送付する。また歯科医師会の協力を得て、県内歯科にチラシを配布する。さらに本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・11月10日（日）と2月6日（木）の2回実施する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修の実際

研修プログラム（表1）のとおり、2回実施した。受講者は108（62+46）名（R5 123名）で、県内全域延べ78施設（北部23施設、伊賀9施設、中部37施設、伊勢志摩6施設、紀勢・東紀州3施設）より参加した。研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

表1 研修プログラム

科目		時間	講師
講義	1.基本的知識	13:00～ 15:00	清水 律子 (県立看護大学 老年看護学 准教授)
	2.地域における実践		
	3.社会資源等		
事例検討とGW	テーマ:多機関連携・多職種連携で認知症の人を早期から支える	15:10～ 16:40	清水 律子(県立看護大学 老年看護学 准教授) 【ファシリテーター】 ・田端 真(県立看護大学 老年看護学 助教) 11/10 認知症看護認定看護師 ・奥野 歩(済生会松阪総合病院) ・谷口 陽子(武内病院) ・川北 典子(永井病院) ・宮本 桂子(市立伊勢総合病院) 2/6 ・中東 瞳(済生会松阪総合病院) ・駒田 美穂(済生会松阪総合病院) ・谷口 陽子(武内病院) ・川北 典子(永井病院)

2. 受講者アンケート結果（回収率：第1回96.8% 第2回95.7%）

1) 受講者の属性

受講者は40歳代が38.5%と最も多く、職種は看護職が多いものの、年代・職種・所属施設は様々であった。

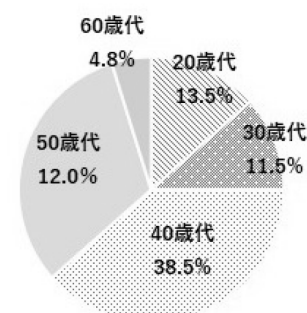


図1 受講者年代

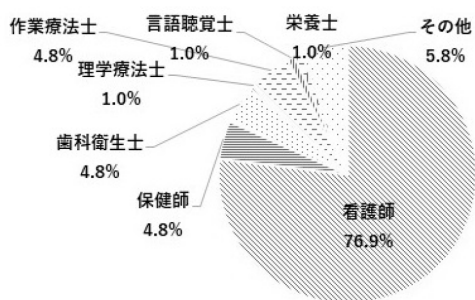


図2 受講職種

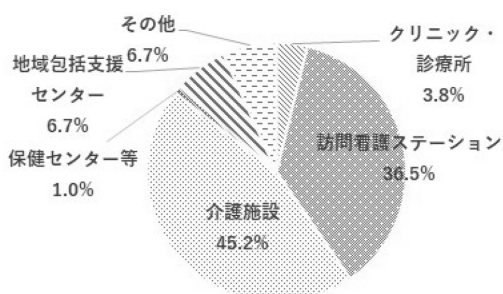


図3 受講者所属施設

2) 科目の到達目標

科目の到達目標の到達度を図4に示す。概ね「そう思う」、「ややそう思う」の割合が高く、合わせて86.5~100%（R5：70.4~96.9%）であった。その理由は、講義では「認知症の種類や特色を学び、視野を広げたことで、関わり方や視線・話し方を振り返る機会になった。」、「早期発見・早期対応の大切さを学んだ。」、「その人らしい生活、意思決定の支援の重要性を理解できた。」、「幅広い支援について学んだ。」などであった。一方、「ややそう思わない」、「そう思わない」の回答理由は「概要は分かったが、自分の中でしっかり理解できていないため。」、「自信がない」などであった。

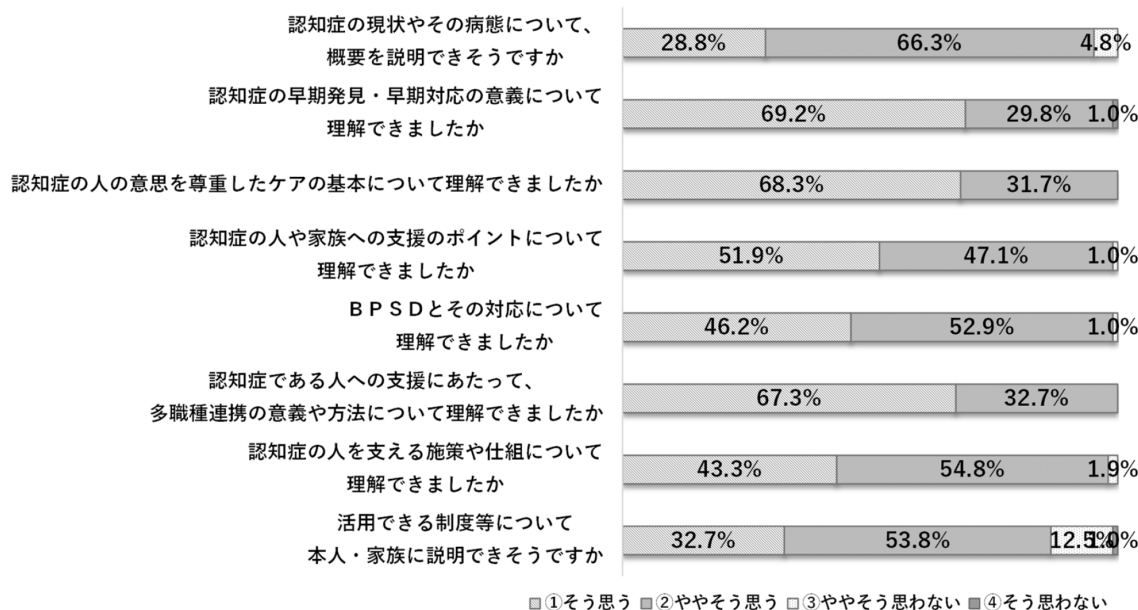


図4 到達目標における到達度

3) 満足度

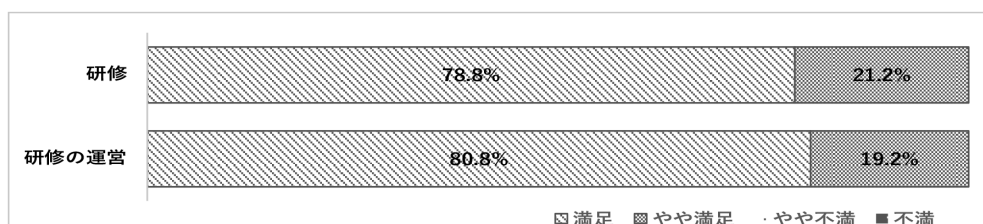


図5 研修満足度

満足度を図5に示す。研修および研修の運営とも「満足」・「やや満足」を合わせて100%と高かった。その理由は「認知症を深く理解できた。」、「認知症の人を早期から支えるには多職種、多機関の連携の重要性を学べた。」などであった。



【事例検討の様子】



【グループワーク発表の様子】

4) 研修への要望について

「開催曜日」では、「日曜日」、「土曜日」、「木曜日」の順に希望が多かった。理由をみると、「休暇がとりやすいから」と週末を希望する者と、「業務時間内の開催の方が参加しやすい。」と平日を希望する者がみられた。一方「開催時間」は「午前・午後どちらでもよい」が最も多く59.6%、次いで「午後のみ」22.1%であった。

3. リフレクション・ミーティング

次年度に向け、「認知症看護に特化せず、認知症対応力向上につながるよう配慮」、「認知症の方と接する場合の心がけの紹介」など認知症看護認定看護師などの活用、他のグループワークの結果を十分きけるような形式とする、ことが挙げられた。

4. 受講者の捉える地域の課題と望むサポート

地域の課題は「職種」、「連携」が多く、次に「社会」「資源」「活用」、望むサポートでは「研修」「参加」の言葉が多く挙げられた。

[評価]

数値目標である「昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する」は達成できなかったが、「県内全域から参加者を得る」は達成できた。また、科目の到達目標の達成状況および研修満足度は高く、その理由からも、本研修の「地域貢献のポイント」である「認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となること」に向けて、効果的な研修を実施できたと評価する。今後は、研修への要望から今年度のプログラム（日曜と木曜の午後開催）を継承し、リフレクション・ミーティングで挙げられた内容を考慮した研修としていきたい。さらに、受講者は、多職種との連携や社会資源の活用を課題と捉え、研修のサポートを望んでいるため、本事業の担う役割は大きく、継続して取り組みたい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・リフレクション・ミーティングで挙げられた内容を考慮した研修

2) 看護職員認知症対応力向上研修事業

【地域貢献のポイント】

- ・病院で認知症ケアに携わる看護師の質の向上に貢献する。
- ・同じ職場の看護職員等に対し、研修で学んだ知識や実践対応力を指導することで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築ができる。

【昨年度からの課題】

研修プログラムの検討。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・昨年度の受講者数より多くの受講者を獲得する
- ・県内全域から参加者を得る

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・地域交流センター委員である老年看護学領域の教員が事業担当に加わる。
- ・到達目標達成に向け、十分な研修時間の確保のため、「認知症に関する知識」の講義時間を240分（R5 180分）、「認知症看護の実践対応力」を360分（R5 330分）とする。
- ・体制構築・人材育成の演習時にファシリテーターを10名配置する。
- ・講義後アンケートの尺度を変更する。
- ・修了書の送付は、報告書提出者に限ることとする。

実施計画

- ・研修案内は、6月に県内病院（93）へ送付するとともに、本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・9月8～10日（日～火）に実施する。
- ・受講者による所属先での研修会の実施後、報告書の提出を受け（締切1月中旬まで）、提出者に修了証書を送付する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修の実際

研修プログラム（表1）のとおり、実施した。申込者は85名、受講者は84名39施設（R5 63名28施設）で、県内全域（北部18施設、伊賀3施設、中部11施設、伊勢志摩3施設、紀勢・東紀州4施設）より参加した。令和3～5年度54～63名に比し多くの参加が得られた。実施報告を提出した研修修了者に、三重県知事より修了証書が交された。

表 1 令和 6 年度 研修プログラム

科目	時間	テーマ	講師
認知症に関する知識	講義60分	意義と役割 施策・社会資源等	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授
	講義150分	認知症の病態論	山川 伸隆 いせ山川クリニック 院長
認知症看護の 実践対応力	講義150分	実践対応力Ⅰ 对患者（1対1）	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授
	講義30分・演習60分	実践対応力Ⅰ 認知症に伴う行動・心理症状（BPSD）、 せん妄	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授
	講義150分	実践対応力Ⅱ チームや連携による対応	藪下 茂樹 鈴鹿中央総合病院 社会福祉科長 社会福祉士（医療ソーシャルワーカー） 介護支援専門員
	講義30分・演習60分	実践対応力Ⅱ 身体拘束	横山 智子 桑名市総合医療センター 認知症看護認定看護師
体制構築 ・人材育成	講義45分・演習150分	認知症ケア体制構築	森 治子 市立四日市病院 認知症看護特定認定看護師
	講義45分・演習150分	スタッフ育成・教育	谷口 陽子 医療法人 障純会 武内病院 認知症看護認定看護師
	演習時のファシリテーター		ファシリテーター：認知症看護認定看護師 川北 典子（医療法人 永井病院） 福田 敬乃（名張市立病院） 田米 美里（済生会 明和病院） 廣野 美徳（伊勢赤十字病院） 中西 一美（マチナス訪問看護ステーション） 宮本 桂子（市立伊勢総合病院） 杉島 珠実（上野病院）

2. 受講者アンケート結果

1) 受講者の属性（回収率 100%）

受講者は 40 歳代が 44.6%と最も多く、経験年数は 20 年以上と 10 年以上 20 年未満が 35.7%であった。所属は総合病院が 51.8%と最も多かった。

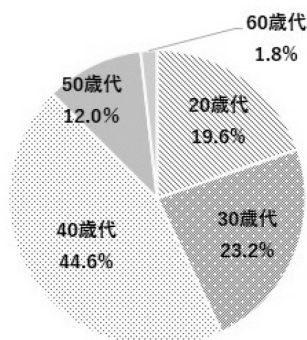


図 1 受講者年代

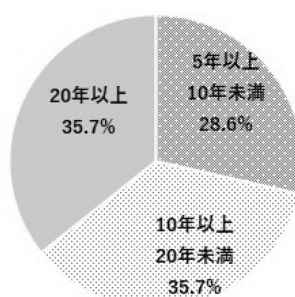


図 2 受講者経験年数

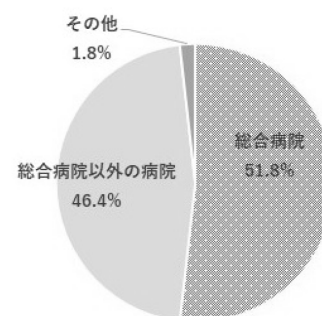


図 3 受講者所属病院

2) 科目の到達目標

(回収率：認知症に関する知識：96.4%、認知症看護の実践対応力：98.8%体制構築・人材育成 66.7%)

科目の到達目標の到達度を図4に示す。「そう思う」・「ややそう思う」の割合が高く、91~100(R5 87.3~100)%であった。一方、「そう思わない」と回答した者(1.8%)の理由は、科目「体制構築・人材育成」の「到達目標：病院・病棟の課題を把握し、体制等の実情に応じて、病院・病棟や地域単位で認知症ケアに取り組む体制の構築を考えることができる」では「管理者向けの研修であって、一スタッフでは、少し内容が濃く荷が重いと感じた」、「到達目標：自施設において看護職員向けの研修を企画・実施し、継続学習を含むスタッフ育成計画を立てることができる」では「研修の企画、実施はできるが、計画書として書くのが難しい。短時間での演習は難しかった」であった。

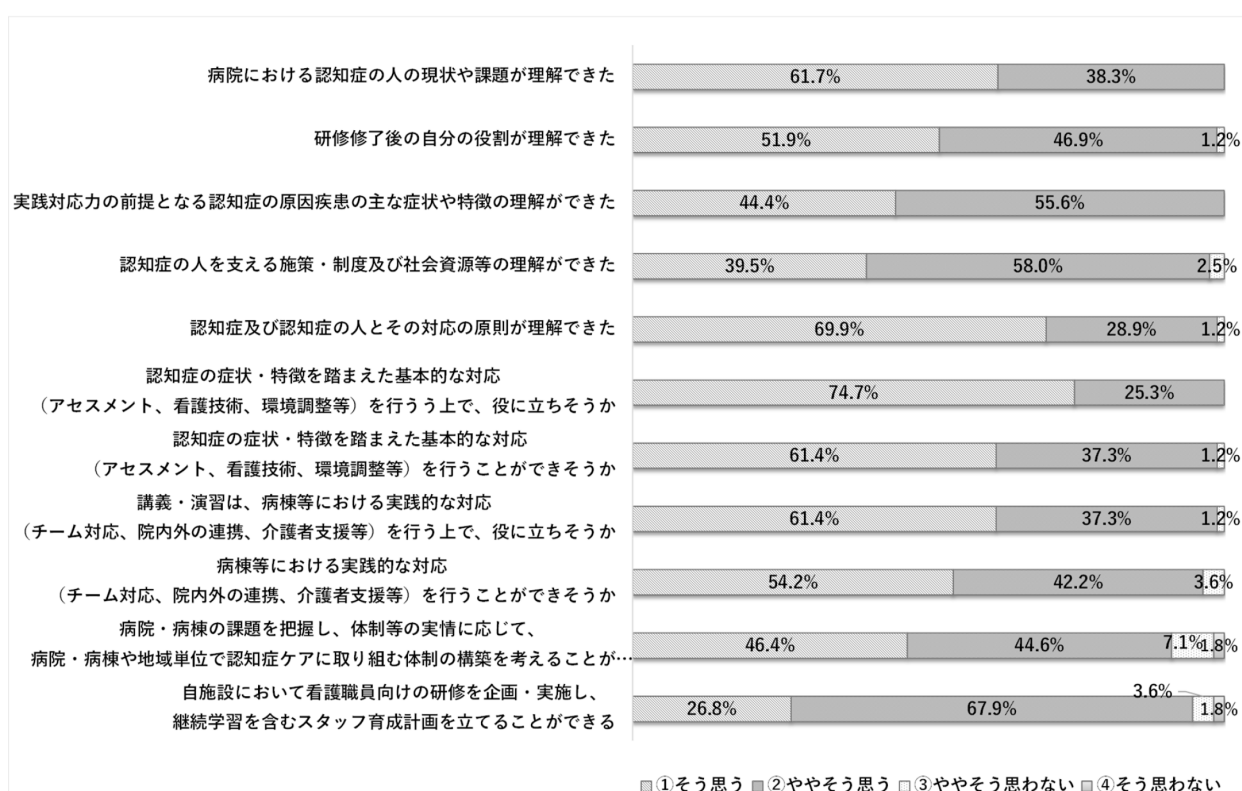


図4 到達目標における到達度

3) 科目の満足度

科目の満足度を図5に示す。「満足」・「やや満足」と回答した者は96.4~97.5(R5 86~100)%と高く、その理由は、科目「認知症の知識」では、「基礎から学べた」、「認知症を取り巻く様々な役割や、症例が分かりやすい講義で、良かった」、科目「認知症看護の実践対応力」では、「対応例の記載があり、わかりやすかった」、「講義内容を踏まえた対応策をディスカッションできたことが良かった」、科目「体制構築・人材育成」では、「具体的でわかりやすい」、「病院の課題がみえ、取り組む必要性がわかった」、「チームや体制が整っている病院とそうでない病院とでは、認知症患者に対する普段からの関わり方、症状が出た時の対応方法に対する知識の差を感じ、(体制構築の)重要性を学んだ」、などであった。

一方「やや不満」の理由は、科目「認知症に関する知識」では、「資料がもう少し欲しかった」、科目「認知症看護の実践対応力」では、「具体的な話が聞きたかった」、「グループワークの時間がもっと欲しい」、科目「体制構築・人材育成」では、「初めて聞く内容だったこともあり、時間内に理解するのは難しい」、「指導案、企画書などの書き方が、わからないまま終わってしまった」などであった。

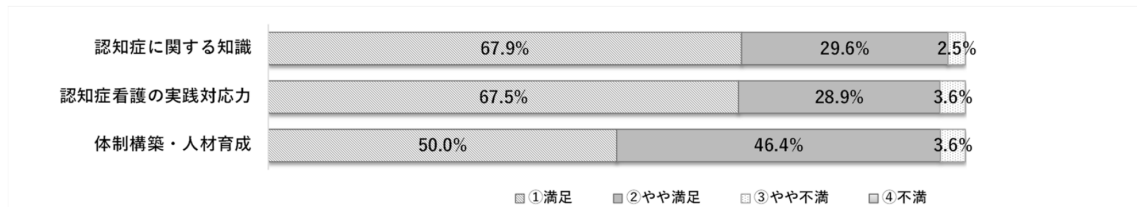


図5 科目における満足度

4) 研修運営について

「開催日程」では、「日曜から火曜まで」が71.4%であったが、「全て平日がよい」や「子どもがいるため平日が出席しやすい」など平日を希望する声もあり、考慮する必要があると考える。「研修会全体の運営」は、「満足」・「やや満足」で100%、その理由は「凄く分かりやすくよかった」、「10時集合だったので、ありがたかった」などであった。研修に対する感想では、「凄く勉強になった」、「それぞれ研修内容のねらいが分かる内容で、大変学びになった」などであった。

5) 自施設での研修

自施設の課題に応じた様々なテーマで、延べ約1700名の看護職等に行われた。

[評価]

県内全域より多くの参加者が得られ、数値目標は達成できた。また科目の到達目標の達成状況および満足度は高く、その理由からも今後の実践に役立つ研修となったと評価できる。しかし、達成状況や満足度の低い者の回答の理由をみると、「理解が難しい」、「管理者向けの研修であって一スタッフで荷が重い」など、認知症看護に関する指導的立場の者でないと本研修を役立てることが難しいことが伺えた。今年度は受講対象者を「指導的立場の看護職員」としていたが、次年度は「認知症の人と接する機会が多い看護職員」を強調して記載し、グループワークも、受講者の背景に応じたグループ分けを行いたい。また3日目の科目「体制構築・人材育成」で「時間内に理解するのは難しい」との受講者の声もあるため、2日目に「体制構築・人材育成」の導入部分の説明の時間を設けたプログラムとしたい。

自施設での研修では、多くの職員に実施でき、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築に役立つ研修となったと評価できる。



【GWの様子】

Ⅲ. 今後の課題

- ・研修目的に合った受講対象者の募集とその背景に応じたグループワークにおけるグループ分け
- ・適切なプログラムの構築

4. 母子保健体制構築アドバイザー事業

担当者：地域交流センター；中北裕子、川瀬浩子

【事業要旨】

三重県では母子保健体制構築アドバイザーが、各市町の母子保健における現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理したうえで、助言・指導や情報提供を行うことで、地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、個別支援型アドバイザー派遣・広域支援型アドバイザー派遣・ミニ講座および情報交換会を実施し、大学の教員や経験豊富な保健師がアドバイザーになることで、市町では地域の課題に対して学術的な視点から学びを得ること、さらに地域ネットワークの構築につながることを期待されている。

【地域貢献のポイント】

- ・地域の実情に応じた母子保健体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実・強化に貢献する。

【昨年度からの課題】

- ・個別支援の広報
- ・ミニ講座および情報交換会：受講者から得た希望テーマや訪問より抽出した地域の課題、参加しやすい日程調整、および「情報交換会」について時間配分を考慮したプログラムの立案

I. 活動計画

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・地域交流センター委員である公衆衛生看護学領域の教員が事業担当に加わる。
- ・広域支援型アドバイザー派遣等において、市町の抱える問題の可視化に努め、個別支援型アドバイザー事業が必要と判断される市町を選定する。
- ・広域支援型アドバイザーは経験豊富な保健師が担当する。
- ・ミニ講座および情報交換会では、市町や保健所等のみならず、子ども家庭センターで母子保健業務、子育て支援に携わる職員を対象とする。またミニ講座を45分とし、情報交換会の時間を十分確保する。

実施計画

- ・4～6月に、三重県子ども福祉部およびアドバイザー教員と打ち合わせを行う。
- ・三重県子どもの育ち支援課より母子保健担当者に対し、MLの活用による周知を行う。
- ・三重県における母子保健体制構築アドバイザー事業実施要領に基づき事業を実施する。
各市町における地域課題の分析及び事業評価、支援体制の整備、支援ネットワークの強化等、対象市町に応じた内容について、以下1～2により、アドバイザーが必要な助言・指導等を行う。また3により、情報提供や情報交換会を行う。

1. 個別支援型アドバイザー派遣

事業概要：広域支援型アドバイザー派遣等において個別支援型アドバイザー事業が必要と判断される市町、または助言・指導を希望する市町からの申請に基づき、市町に必要な助言・指導等を行う。

方 法：三重県の担当課（子育て支援課母子保健班）が7月に市町へ事業紹介を行う。その後市町からの申請を受け、個別支援型アドバイザーに依頼する。個別支援型アドバイザー：県内登録教員4名

表1 個別支援アドバイザー

氏名	所属・役職
宮崎 つた子	三重県立看護大学 小児看護学 教授
中北 裕子	三重県立看護大学 公衆衛生看護学 准教授
大谷 喜美江	四日市看護医療大学 看護医療学部 看護学科 公衆衛生看護学 准教授
山路 由実子	鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 公衆衛生看護学 准教授

2. 広域支援型アドバイザー派遣

事業概要：随時アウトリーチ（約2年間をかけて三重県内全市町を訪問）を行い、市町の現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理し、助言・指導等を行う。広域支援型アドバイザー：西畠 知子（元 名張市保健師）

3. ミニ講座及び情報交換会

事業概要：抽出された地域課題を解決するため、市町やその他関係機関との情報共有や学びの場として、ミニ講座や情報交換会を行う。

対 象：市町や保健所等および子ども家庭センターで母子保健業務、子育て支援に携わる職員など

方 法：Zoomによるオンラインで3回開催

II. 活動の結果と評価

[結果]

個別支援型アドバイザー派遣

1. 事業の実際

A市より母子保健事業の評価への依頼があり本学教員が2回訪問した。参加人数は、延べ11名であった。ネウボラの様々な事業の現状を分析し、課題や今後の取組みを整理した。

2. 事業参加者アンケート結果

アンケート結果（回収率100%）では、支援に対して「満足」が100%で、その理由は「内部では気づけていない視点でアドバイスをいただき、改善の方向性を見出せた」、「社会背景の変化とともに、新たな視点で展開する必要があることを再認識できた」などであった。大学の専門領域の教員が、アドバイザーとして支援することで、事業の整理や記録の見直し、さらには事業の質の向上に寄与できた。

広域支援型アドバイザー派遣

1. 事業の実際

昨年度訪問した市町以外の13市町を対象とし、参加人数は市町担当者延べ53名、保

健所担当者延べ 15 名、県担当者延べ 2 名であった。調査用紙より、訪問対象市町の母子保健対策の現状や課題について事前把握し、可能な限り保健所担当者・県担当者とともに訪問し、母子保健対策の詳細を聞き取るとともに、課題や今後の予定について情報を共有した。調査内容は、「子ども家庭センター設置の現状と課題」、「母子保健計画について」とした。訪問より抽出した地域の課題は、以下の 2 点である。

【人材不足】

多くの市町が、国県から政策として示された新規事業を含む母子保健事業の事業組み立てに追われていた。また子ども家庭センターの設置に伴う保健師の分散配置が進み人員不足の上、統括支援員を担える経験者がいないという市町もある。保健師の経験年数に偏りのある市町が多く、新任期中堅期前半の保健師の多い市町では、育休者も多い。

【支援の多様化】

出生数は減少しているにもかかわらず、発達に支援の必要な児や養育能力が十分ではなく育児不安を抱え傷付きやすい母が増加している上、多問題を抱える困難事例が増えている。産科や小児科等医療資源が減少し、出産を含む母子保健事業の継続が危ぶまれる市町もある。外国人妊婦や母子が増え、意思疎通を含め対応に時間がかかる。

アドバイザーより、「訪問し、出席者一人ひとりの想いを共有、共感することがエンパワーにつながると感じた。保健師だけでなく事務職の上司や社会福祉士等とも情報共有、意見交換することができた。また、管轄保健所の母子保健担当保健師を交えて対象市町の現状や課題等の情報共有をすることで保健所保健師としての役割を考えて貰える時間になった。」と報告があった。

2. 事業参加者アンケート結果（回収率 90.4%）

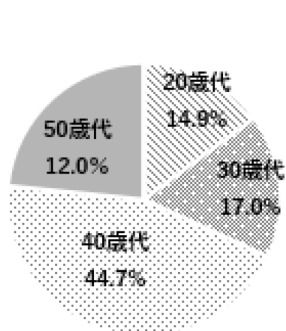


図1 参加者年代

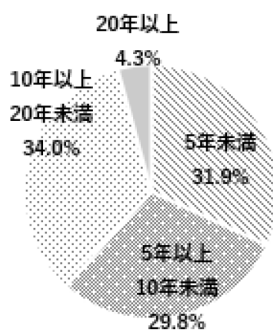


図2 経験年数

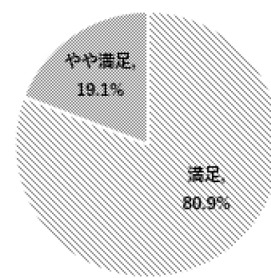


図3 支援満足度

参加者は 40 歳代が 44.7%と最も多く、保健師が主であった。支援に対して、「満足」、「やや満足」を合わせて 100%（R5:93.9%）、その理由は「専門知識と豊富な経験のあるアドバイザーから助言をいただく機会はとても貴重であった。」、「保健所の保健師とみえる関係性づくりの構築に繋がった。」、「保健師としての地域保健活動のやりがいについて再認識できた。」などであった。

以上の結果より、専門知識と経験豊富な保健師がアドバイザーとして広域に訪問することで、同じ視点で実情を把握し、他地域の取り組み状況の紹介や現状に応じた詳

細なアドバイスができた。さらに、保健師としてのモチベーションアップにも貢献できたと考える。また、保健所や県の担当者とともに訪問することで、支援ネットワークの強化につなげることができた。

ミニ講座及び情報交換会

1. 事業の実際

表2 ミニ講座のプログラム

日程	時間	テーマ	講師
9月20日(金)	10時00分～11時00分	子どもの「ために」から子どもと「ともに」 ～心の声を聴くアドボカシー～	一般社団法人 子どもの声からはじめよう 代表理事 子ども家庭庁参与 川瀬 信一
11月1日(金)	13時30分～14時30分	災害時における妊産婦および新生児への対応の課題	三重県立看護大学 母性看護学 教授 渡邊 聡子
11月27日(水)	10時30分～11時30分	子どもの声を【きく】ために ～こころがけたい「3つだけのきく」～	大阪公立大学 現代システム科学研究科社会福祉学分野 教授 大阪公立大学 現代システム科学域 教育福祉学類 教授 伊藤 嘉余子

参加しやすいよう、曜日や時間を意図的に変えて予定を組み、3回開催し、参加人数は延べ49名、16.3名/回（R5 30.3名/回、R4 14.8名/回）と昨年度を下回り、令和4年度と同程度であった。3回とも参加がなかったのは、県内29の市町中20市町（R5 13市町）、8つの県保健所中7保健所（R5 2保健所）であった。一方、チャイルドラインなど市町や保健所以外からの参加もあった。

2. 事業参加者アンケート結果（回収率 第1回62.8% 第2回74.1% 第3回85.7%）

ミニ講座の理解度（図4）では「そう思う」・「ややそう思う」を合わせて90～100%と、肯定的な評価が占める割合が高かった。その理由は第1回「この視点を忘れない様にしたいと思った」、第2回「具体的事例を示していただき、講師が伝えたいことを明確にまとめていただいていた」、第3回「実際の子どもの様子も交えて教えていただき分かりやすかった」などであった。ミニ講座の満足度（図5）では「満足」・「やや満足」を合わせて90.1～100%と評価は高く、その理由は「新しいことが学べた」、「実際の業務の中で活かせることばかりで勉強になった」などであった。

一方、情報交換会の満足度（図6）では、第3回のみ「やや不満」・「不満」と回答した者がみられ、その理由は「時間が足りなかった」などであった。プログラムではミニ講座を45分・情報交換会15分としていたが、第3回では講座の時間が延び、情報交換会の時間が充分とれなかったことが影響したと考える。次年度の企画にあたり、事業時間への要望は現状のままの「1時間」が最も多いが、「ゆったりと講義を聴きたい」、「情報交換の時間を増やしても良いと思う」などを理由に「1.5時間」を希望する者が25.7%あるため、ミニ講座は1時間、情報交換会への参加は希望者とし、時間を30分となるプログラムとしたい。また、次年度以降に取り上げてほしいテーマは「医療的ケア児への支援」、「愛着障害への支援」、「ペリネイタルロスへの支援」、「災害関係」などであった。大学の専門領域の教員が、アドバイザーとして企画・運営に携わったことで、的確なテーマや講師の選択ができ、情報交換会でのファシリテーターの役割を担えた。

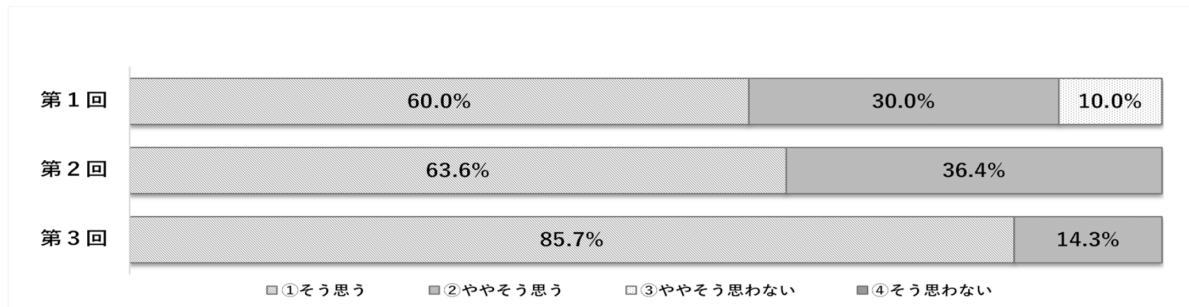


図4 ミニ講座の理解度

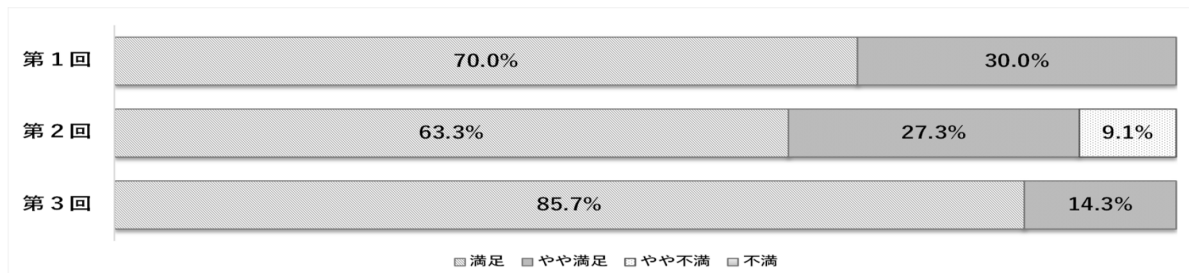


図5 ミニ講座の満足度

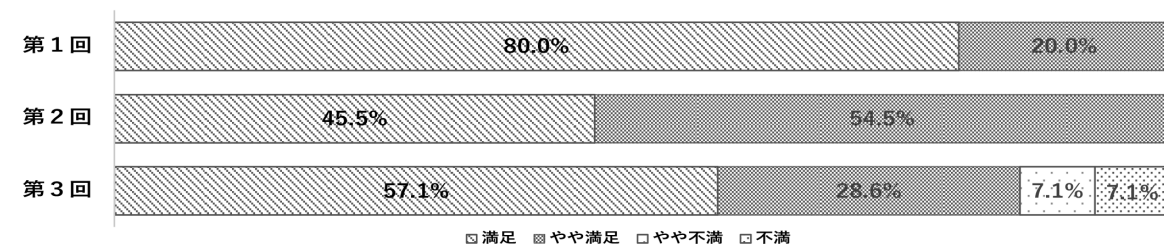


図6 情報交換会の満足度

[評価]

事業に関する評価は高く、事業の目的である「地域の実情に応じた体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実を図ること」に向けて効果的な事業を実施できたと評価する。また、昨年度同様、ミニ講座の企画・運営について、大学の専門領域の教員がアドバイザーになることで、「学術的な視点から学びを得ること」に関しても効果的な事業を実施できたと評価する。しかし、個別支援アドバイザー派遣の活用が少なく、制度が有効に機能していないのは残念である。今後は広域支援で個別支援が相応しい課題と判断した市町に推奨するなど、働きかけていきたい。またミニ講座では、アドバイザーの訪問より抽出した地域の課題や、ミニ講座の受講者から得た希望テーマ、および前年度好評であった「発達障害への支援」も考慮し、テーマを設定していきたい。さらには引き続き、参加しやすい日程調整、および「情報交換会」について時間配分を考慮したプログラムを検討したい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・ 個別支援の広報
- ・ 受講者から得た希望テーマや訪問より抽出した地域の課題、参加しやすい日程調整、および「情報交換会」について時間配分を考慮したプログラムの立案

IV. 認定看護師教育

1. 認定看護師教育課程 (B 課程)

「感染管理」

2. 認定看護師(感染管理認定看護師)

フォローアップ研修

1. 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」

担当者：地域交流センター 川島好子、新居晶恵、辻真弥、大川明子、宮崎つた子

【事業要旨】

本教育課程は、看護の質向上及び看護職者のキャリア支援に向けた教育を行うことを目的に、感染管理領域において高度で専門的かつ質の高い看護を提供できる人材を育成する。

【地域貢献のポイント】

感染管理に関する高度で専門性のある知識、看護技術、特定行為を習得し、水準の高い看護実践を多職種と連携し、協働して提供できる人材を育成することにより、地域社会の多様な保健・医療・福祉施設における感染管理の質的向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

研修生にとって充実した学習環境の確保、教育体制や実習環境を整備し、研修生の実践力が向上できる指導・支援体制を整える。修了生を支援するためにフォローアップ研修の内容を検討する。

I. 活動計画

[数値目標] 研修生数を 20 名程度とする

[実施計画]

1. 教育期間：5月8日～2月12日
2. 授業時間：90分を1時間とし、原則5時限
3. 授業形態：共通科目・専門科目の特定行為研修
区別科目は、e-ラーニングでの学習形態を活用



写真1 入学式（宣誓）

表1. 授業科目

共通科目	時間数	専門科目（認定看護分野）	時間数
1. 臨床病態生理学	40 (30)	1. 感染管理学	15
2. 臨床推論	45 (34)	2. 疫学・統計学	30
3. 臨床推論：医療面接	15 (12)	3. 微生物学	30
4. フィジカルアセスメント：基礎	30 (23)	4. 医療関連感染サーベイランス	45
5. フィジカルアセスメント：応用	30 (23)	5. 感染防止技術	30
6. 臨床薬理学：薬物動態	15 (12)	6. 職業感染管理	15
7. 臨床薬理学：薬理作用	15 (12)	7. 感染管理指導と相談	15
8. 臨床薬理学：薬物治療・管理	30 (23)	8. 洗浄・消毒・滅菌とファシリティ・マネジメント	15
9. 疾病・臨床病態概論	40 (30)	(小計)	195
10. 疾病・臨床病態概論：状況別	15 (12)		
11. 医療安全学：医療倫理	15 (12)	専門科目 (特定行為研修区別科目)	時間数
12. 医療安全学：医療安全管理	15 (12)	1. 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連	22 (17)
13. チーム医療論（特定行為実践）	15 (12)	2. 感染に係る薬剤投与関連	39 (30)
14. 特定行為実践 (小計)	15 (12) 335 (259)	(小計)	61 (47)
15. 指導	15	演習及び臨地実習	時間数
16. 相談	15	統合演習	15
17. 看護管理 (小計)	15 380	臨地実習（認定看護分野）	150
		臨地実習（特定行為区分）	30
		(小計)	195
合計 831時間			

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修生の概要

1) 研修生 19 名

(三重県内 12 名、県外 7 名)

平均年齢 39.1 歳、男性 9 名、女性 10 名

所属：病院 19 名

2) 令和 7 年 2 月 12 日 18 名本教育課程修了

(三重県内 12 名、県外 6 名)



写真 2 修了式（謝辞）

[評価]

認定看護師教育課程（B 課程）「感染管理」3 期生 19 名の入学式を 5 月 8 日実施した。B 課程とは、日本看護協会において認定看護分野と特定行為研修を組み込んだ研修である。本教育課程は、特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同し、指導・支援を行うことができた。

研修生による授業評価アンケートの結果では、「授業において全体的に満足している」について「そう思う 95%」、「ややそう思う 3.5%」と 98.5%を示したことから、満足度の高い教育課程であると考えられた。令和 6 年度の専門科目（認定看護分野）授業のうち本教育課程修了生 7 名も講師として授業を実施した。講師も研修生のために多くの学びを提供しようと熱心に講義をした。研修生は、「修了生の具体的な活動や経験を加えた授業内容が理解しやすい」という意見が多くあった。

臨地実習前に特定行為の進め方や症例記録の記載方法、認定看護分野の記録について説明を行った。本年度は、さらに具体的な事例をもとに、特定行為の症例記録や手順書の作成について演習を行い、理解できるよう支援した。

臨地実習は、14 施設の協力を得て、研修生の希望を優先し、1 施設 1～2 名の研修生を配属した。実習施設の中には、本教育課程の修了生が実習指導担当者として活躍していた。本教育課程の修了生は、実習記録や症例記録の記載方法、感染対策の考え方について、研修生の頃の経験を活かし、研修生に寄り添った指導・支援を実施した。そのため、研修生は「授業内容と実習がつながり、深く理解できた」という声もあった。認定看護分野と特定行為研修区分の臨地実習を 28 日間 1 施設で行う教育機関は本教育課程のみであり、昨年と同様に実習施設の協力と指導者の熱心な指導により実践することができた。

令和 6 年度日本看護協会認定審査において、令和 5 年度修了生 20 名全員が合格したため、本教育課程から 35 名の感染管理認定看護師を育成することができた。35 名のうち 22 名が三重県内の病院に所属する修了生である。

III. 今後の課題

令和 4 年度に開講した認定看護師教育課程（B 課程）「感染管理」を令和 7 年度閉講する。3 年間の教育活動を通して、三重県の感染管理領域において高度で専門的かつ質の高い看護を提供できる人材育成と質的向上に寄与することができたと考える。

今後、本教育課程を修了した感染管理認定看護師が高い能力を発揮し活躍することができるようフォローアップ研修の支援内容を検討していく。

2. 認定看護師フォローアップ研修

担当者：地域交流センター 川島好子、新居晶恵、宮崎つた子、辻真弥

【事業要旨】

本学認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」修了生を対象としたフォローアップ研修を開催し、最新の知見や技術の習得によって認定資格取得後の各自の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で感染対策の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

【昨年度からの課題】

特定行為を含む認定看護師として活躍を期待されているため、実際の活動について学ぶ機会を提供し、引き続き支援する。

I. 活動計画

[数値目標] 令和5年度修了生の認定審査合格率100%をめざす。

[実施計画]

1. 本教育課程修了生20名が過去問題に解答することにより、日本看護協会認定審査に向けて準備を行う。

日時：1回目：令和6年6月26日（水）9時～12時

2回目：令和6年9月4日（水）9時～12時

会場：三重県立看護大学 講義室4（講義棟3階）

内容：令和5年度修了生へ過去問題の解答と解説



写真1 グループワークの様子

2. 本教育課程を修了した感染管理認定看護師が活動を報告し、参加者同士、情報交換・情報共有することで、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

3回目：感染管理認定看護師フォローアップ研修

日時：令和7年2月1日（土）9時～12時30分

対象：認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」令和4年度・令和5年度修了生

会場：三重県立看護大学 多目的講義室（講義棟2階）

内容：本教育課程を修了した1期生4名が活動報告を発表する。

（プログラム）

9：05 講義「20年間を振り返り」 地域交流センター主任教員 川島好子

10：10 活動報告「限られた時間の中で、兼任として」医療法人宏徳会 安藤病院 高橋路子

10：25 活動報告「透析施設における感染管理認定看護師の活動」

社会医療法人 名古屋記念財団 新生会第一病院 山本晃裕

10：40 活動報告「2024年度活動報告」 医療法人 富田浜病院 長谷川翔平



写真 2 活動報告の発表

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 参加者の概要

1回目: 19名 (三重県内 11名、県外 8名)

2回目: 19名 (三重県内 11名、県外 8名)

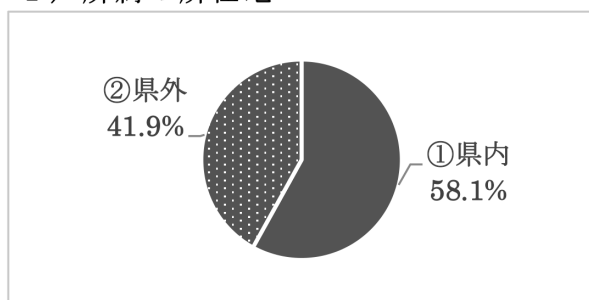
3回目: 31名 (三重県内 19名、県外 12名)

2. 令和5年度修了生認定審査 20名合格 (合格率 100%)

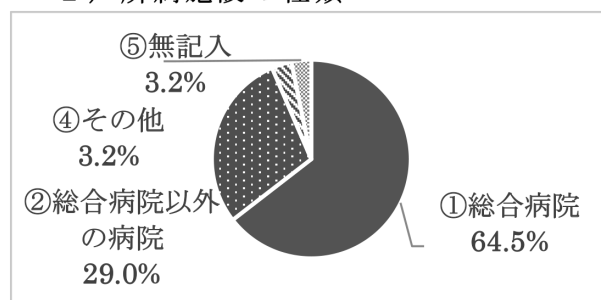
[評価]

3回目のフォローアップ研修は、令和5年度修了生が感染管理認定看護師として16名参加した。令和4年度修了生15名と合わせて参加者31名となった。

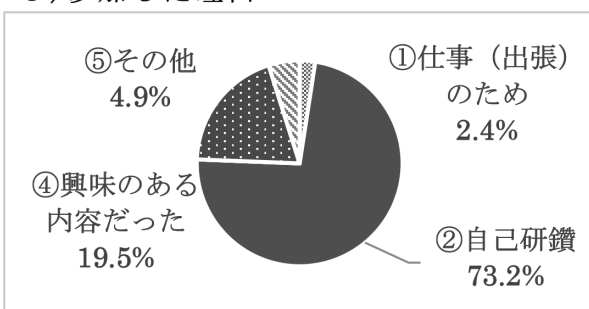
1) 所属の所在地



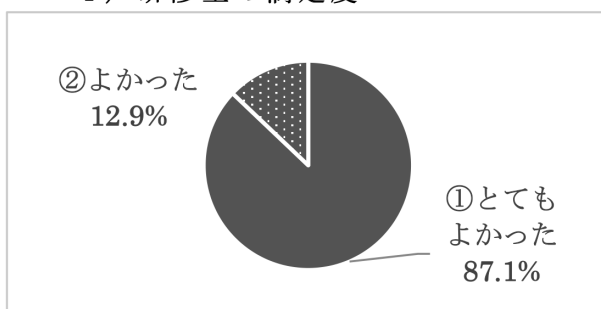
2) 所属施設の種類の種類



3) 参加した理由



4) 研修生の満足度



アンケート結果 (回収 100%) から、参加者にとって本研修は満足度の高い有益な研修であったと考える。加えて、「特定行為を所属施設でどう進めていくか」、「特定・認定看護師としてどう活動していくか」、「今後の活動を考える良い機会になった」という意見が多くあった。また、「活動報告の発表やグループ内でのディスカッションの内容に共感でき、学びや良い刺激をもらった」、「この研修を次年度も続けてほしい」という意見もあった。

III. 今後の課題

感染管理認定看護師フォローアップ研修では、修了生の活動報告を通して、自己の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上に寄与した。今後も特定行為を含む認定看護師として活躍を期待されているため、引き続き本教育課程修了生の支援を継続していく必要があると考える。

V. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣

1) みかん大出前講座

2) みかん大リクエスト講座

1) みかん大出前講座

担当者：＜講師＞出前講座テーマ登録教員

＜運営＞地域交流センター 宮崎つた子、長谷川明子

【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質の向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

担当教員の受入れ可能件数に達し実施できなかったテーマや要望の多い内容については、そのテーマ・内容に関する講座の充実により、県民の多様なニーズに応じた出前講座を展開する。

I. 活動計画

[数値目標]

1. 過去2年の実施件数 49件(令和4年度)～55件(令和5年度)に準ずる件数を実施する。
2. 満足度の評価として、アンケート結果による肯定的評価が98%を上回る(令和5年度98.3%、令和4年度95.5%)。

[実施計画]

1. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
2. 申込受付の期限は、令和6年11月29日とする。
3. 申込があった際には、担当教員と日程調整を行い、日時を決定する。
4. 講座の開催は、令和7年3月末日までとする。
5. 出前講座のうち、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合は、本学ホームページで参加者を募り、公開講座として実施する。
6. テーマ毎の受付上限件数に達した場合は、本学ホームページに掲載し周知する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

今年度の出前講座のテーマを表1に示す。【A 健やかな暮らしのために】のテーマ数は20、【B 将来の職業選択のために】のテーマ数は6、【C 高めよう保健・看護の力】のテーマ数は4であり、合計30テーマの登録があった。これらのテーマは、ホームページ上で5月13日に公開するとともに、同日中に「講師派遣のご紹介」パンフレットの送付を行い、今

年度の申込受付を開始した。

申込件数は49件、実施件数は46件であった。参加者総数は、1165名(令和5年度1597名・令和4年度1351名)であった。実施に至らなかった3件は、天候不良による中止1件、感染症の流行による中止1件、先方の運営上の都合による中止1件であった。また、一般公開をした出前講座は、3件であり、公開出前講座の参加者総数は36名であった。なお、コロナ禍に最大7件まで増加したオンラインでの講座の要望は、今年度は1件のみであった。

今年度の出前講座の実施内容を表2に示す。出前講座のテーマ分類別では、【A 健やかな暮らしのために】が36件、【B 将来の職業選択のために】が4件、【C 高めよう保健・看護の力】が10件であった。派遣先の分類では、高齢者施設をはじめとする社会福祉機関と、学校の生徒、保護者、教員を対象とした教育機関が並んで多く、12件であった。「その他」は、主に高齢者のサークル活動への派遣であった。

今年度は、一般向け、医療従事者向けともに、実技を伴う講座(A-5・A-10・A-16・A-17)への申し込みが多い傾向にあった。

特に、一般向けでは、座学だけでなく、健康増進のための軽い運動やリラクセスを促すメソッドをとり入れた講座を実施したいとの問い合わせが相次ぎ、該当する講座は、いずれのテーマも実施可能件数の上限に達した。また、「認知症」に関する3つの講座についても、すべて実施可能件数の上限に達し、その後も、要望する問い合わせが相次いだ。

講座終了後のアンケートの回収率は、76.1%であった。講座への満足度は、「とてもよかった」が73.8%、「よかった」が25.0%であり、参加者の98.8%から肯定的評価が得られた。「あまりよくなかった」は0.40%、「よくなかった」は0.20%、無回答は、0.60%であったが、その理由の多くは未記入であり、記入のあった複数の回答に肯定的な感想が記入されており、Microsoft Formsの入力ミスである可能性も考えられた。

[評価]

実施件数は過去2年間の実施件数をわずかに下回ったが、講座への肯定的評価については、98.8%と数値目標を上回り、昨年度の98.3%を超える結果となった。

表1. みかん大出前講座の全テーマ

分類	No.	テーマ
A 健やかな暮らしのために	A-1	子どもの成長発達と毎日の生活習慣—子ども達の脳が疲れている?—
	A-2	地域で育てよう!子どものやる気と自己肯定感
	A-3	思春期男子のころとからだを理解しよう
	A-4	子どもに関わる大人に必要な性のお話
	A-5	救急蘇生のい・ろ・は
	A-6	はじめよう!従業員の健康づくり
	A-7	健康寿命100歳を目指して 楽しく・おいしく減塩しましょう!
	A-8	体験して考える高齢社会
	A-9	健康で長寿な街づくり
	A-10	認知症について楽しく学ぼう
	A-11	認知症を知って、日々のケアに活かそう—認知症の基礎知識
	A-12	認知症を知って、日々のケアに活かそう—認知症の症状とケア
	A-13	”がん”と向き合う
	A-14	血栓症の発症原因とその治療薬
	A-15	薬に関する四方山話
	A-16	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ
	A-17	音楽療法 de ヘルシー・ライフ!
	A-18	アニメで英語を身につけよう!
	A-19	「普通」ってなんだろう
	A-20	社会的活動としての話すこと・聴くこと
B 将来の職業選択のために	B-1	看護の仕事について
	B-2	看護職(保健師、助産師)のお仕事を知ろう
	B-3	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業
	B-4	大学で学ぶこと
	B-5	どんな仕事に興味があるかな
	B-6	知っておこう!働くために必要な健康管理
C 高めよう保健・看護の力	C-1	性暴力被害を受けた方たちへの看護について考えよう
	C-2	医療事故はなぜ起きる?—ヒューマンエラーを防ぐための人間工学—
	C-3	職場のメンタルヘルス
	C-4	ストレスを知り、看護に活かす

これらの結果より、今年度も、本学教員の専門性を活かし、県内の保健・医療・介護に関わる専門職だけでなく、高齢者や学生・保護者をはじめとする地域住民の多様なニーズに応じた質の高い講座を提供することができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

県民へ満足度の高い講座を提供できた一方で、要望が多かった「認知症」に関する講座や実技を伴う講座については、受付終了により講座を提供できず、県民の要望に十分応じることができなかった。このことについては、全教員と情報共有をし、次年度、これらの講座の充実を図る必要がある。

表 2. みかん大出前講座実施内容一覧

分類	テーマ	件数	派遣先	参加者
A 健やかな暮らしのために	子どもの成長発達と毎日の生活習慣 ー子ども達の脳が疲れている？ー	2	社会福祉機関、教育機関	看護師、養護教諭、学童保育指導員
	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感	1	その他（PTA協議会）	小学生保護者
	思春期男子のころとからだを理解しよう	4	教育機関	養護教諭、特別支援学校教職員・生徒
	救急蘇生のい・ろ・は	5	医療機関、社会福祉機関、 その他（老人クラブ）	看護師、介護士、コメディカル、保育士、生活相談員 相談員、事務員、清掃職員、子育てボランティア、高齢者
	体験して考える高齢社会	1	教育機関	高校生
	健康で長寿な街づくり	3	行政機関、 その他（地域サークル、協同組合）	事務職員、高齢者
	認知症について楽しく学ぼう	5	社会福祉機関、行政機関 その他（地域サークル、自治会）	高齢者、介護支援者、一般
	認知症を知って、日々のケアに活かそうー認知症の基礎知識	1	社会福祉機関	介護支援者 他
	認知症を知って、日々のケアに活かそうー認知症の症状とケア	3	医療機関、社会福祉機関 その他（老人クラブ）	看護師、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士 介護士、生活相談員
	血栓症の発症原因とその治療薬	2	行政機関、ボランティア団体	職員、一般
	業に関する四方山話	2	その他（企業、地域サークル）	企業職員、団体会員、高齢者
	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	3	行政機関	高齢者、未就学児・親子、ボランティア団体会員
音楽療法 de ヘルシー・ライフ！	3	行政機関、ボランティア団体	高齢者、ボランティアスタッフ、職員 一般市民、子育てボランティア、保育士、支援員	
「普通」ってなんだろう	1	その他（地域サークル）	高齢者	
B 職業選択のため	看護の仕事について	1	教育機関	中学生
	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう	3	教育機関	中学生、中学校教員、高校生
C 保健・看護の力	医療事故はなぜ起きる？ ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー	1	医療機関	看護師
	職場のメンタルヘルス	4	社会福祉機関、教育機関	看護師、介護士、介護職員、介護支援専門員 事務職員、生活相談員、高等専門学校教員 他
	ストレスを知り、看護に活かす	1	社会福祉機関	看護師、栄養士、介護職員、施設指導員 施設職員 他

2) みかん大リクエスト講座

担当者：＜講師＞全教員

＜運営＞地域交流センター 宮崎つた子、長谷川明子

【事業要旨】

みかん大出前講座のテーマに該当しない講師派遣について、県民から要望のあったテーマ・内容に応じて講師を派遣し、有料で出張講座を行う。

【地域貢献のポイント】

- ・みかん大出前講座に該当しないテーマに対し、「みかん大リクエスト講座」により依頼に応じることで、県民の多様な要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

講師として派遣される教員に偏りがなく、幅広い分野から様々な教員を派遣できるように工夫する。

I. 活動計画

[数値目標]

1. 過去2年の実施件数(令和5年度54件・令和4年40件)の平均値47件を上回る件数を実施する。
2. 満足度の評価として、アンケート結果による肯定的評価が99%を上回る(令和5年度99.7%、令和4年度100%)。

[実施計画]

1. 昨年度からの変更点

申し込み時に、教員の指定がなかった場合、昨年度までは、関連する領域や関連する研究テーマに取り組む教員へ依頼をし、講師を決定していたが、今年度は、公募により募集するものとした。

2. 5月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。

3. 申込受付の期限は、令和6年11月29日とする。

4. 申し込みを受け、テーマや内容に合わせて、教員を派遣する。

・教員の指定があった場合、該当する教員と依頼元双方の条件が合致した際には、日程、テーマを決定し、講師を派遣する。

・教員の指定がない場合、メールにて公募をかけ、応募のあった教員と日程調整を行い、日程、テーマを決定し、講師を派遣する。

・講座までの準備期間には、依頼元と教員間で講座の内容等について直接調整をすすめる。

5. 講座の開催は、令和7年3月末日までとする。

II. 活動の結果と評価

[結果]

申込件数は46件、実施件数は43件であった。実施に至らなかった3件は、先方の都合による中止1件、依頼側からの条件が教員の提供する内容と合致しなかったことによる中止1件、指定日時が本学教員の学内の用務と重なり担当できる教員がいなかったことによるキャンセル1件であった。参加者総数は、1682名であり、昨年度の参加者総数の1163名を大幅に上回った。

派遣先は医療機関が最も多く17件であり、テーマ・内容は、看護記録を含む看護実践に関するものが7件、看護教育に関するもの5件、看護研究に関するものが5件、今年度は看護管理に関するものは0件であった。医療機関からの依頼について、昨年度は43件で、全体の7割を占めていたが、その大きな理由は、看護研究に関する講座の急増(17件)であった。今年度は、それらの講座を受けた施設が、ステップアップし、「施設単位看護研究支援」を利用して、実際に研究に取り組んでいただくことができた。

また、行政機関からの依頼は、4件から8件に増加し、続いて、職業団体から5件、教育機関から3件、一般企業等から3件の依頼があった。対象は、一般の方、高校生、学校の教員・養護教員、子どもの福祉に携わる方、行政保健師、介護支援専門員など多岐にわたった。

終了後のアンケートは、1449名より回答があり(回収率85.5%)、各講座の評価は、「とてもよかった」が73.8%、「よかった」が26.0%で、肯定的評価が99.8%と高かった。

[評価]

実施件数43件は、数値目標47件に達しなかったものの、参加者総数1682名は、昨年度参加者総数を上回り、コロナ禍以前を含めて、過去最高の数値となった。1682名のうち400名程度が看護職者だが、全参加者の4分の3以上

表1. みかん大リクエスト講座の全テーマ

派遣先分類	テーマ
医療機関 (訪問看護ステーションを含む)	形態機能学を活かした看護実践(ラダーレベルⅡ)
	形態機能学を活かした看護実践(ラダーレベルⅢ)
	訪問看護・訪問介護における精神疾患(疑い)をもつ利用者、家族とのかかわり方
	関連図を書いてみよう
	看護診断を学ぼう
	ケースレポートをまとめよう
	ファシリテーション研修①
	ファシリテーション研修②
	学習者が主体的な学びができる教育方法
	臨地実習指導とは(同内容2回)
	看護研究 ラダーⅣ(全2回)
	看護研究 ラダーⅤ(全4回)
社会福祉	いざという時に介護職員が知っておきたい急変時の医療知識～知っているのと知らないのでは大違い～
	食を提供するボランティアに必要な知識
行政機関	子ども・子育て家庭の現状
	子ども福祉家庭
	子どもを理解するための基礎知識
	心と体の疲れの取り方
	アロマセラピーでこころもからだもリラックス
	女性のためのアロマハンドトリートメント(同内容3回)
	健康寿命をのばそう!!健康的な食生活を送るために
介護予防事業の評価・分析について(全3回)	
教育機関	養護教諭が知っておきたい最新の応急手当 いざというときの日用品を使った応急手当
	こころの健康と自尊心
	10代のメンタルヘルスについて ～こどものメンタルヘルス(SOSの出し方・受け止め方)～
職業団体	熱中症の予防や対応 蜂に刺された時の対応について
	黙って働く腎臓、私って守って健やかに
	健康寿命を延ばすための基礎講座
	健康寿命をのばそう! ～健やかに歳を重ねるためにできること～
一般企業等	メンタルヘルス
	今から始めよう!骨粗鬆症予防
	暮らしの保健室
	こころもからだもこゆるりと

は、学生や教員、行政職員、介護職、企業や団体の職員などである。これまで依頼が多かった医療機関だけでなく、行政機関や教育機関、職業団体からの依頼が増加し、幅広い対象が参加する規模の大きい講座への派遣が増えてきたことがわかる。

医療機関での講座は全実施の4割程度であり、そのテーマ・内容から、実践・教育・研究のあらゆる側面から看護職者のニーズに合わせた講座を開催し、県内の看護の質向上に寄与することができたのではないかと考える。

Ⅲ. 今後の課題

出前講座のテーマに該当しない要望への講師派遣として、「みかん大リクエスト講座」が、幅広い機関、団体から要望を受け、県民に広く利用されている。次年度も講座を広く周知し、県民の多様なニーズに応じた講座を展開する。

2. 看護研究支援

- 1) 看護研究 SEED
- 2) 看護研究エッセンス
- 3) ハウツー看護研究
- 4) 施設対象看護研究支援

1) 看護研究SEED（集合研修）

担当者：＜講師＞片田範子、玉田章、安部彰、小池敦、関根由紀、長谷川智之、
灘波浩子、上田貴子、別當直子（図書館）
＜運営＞地域交流センター；大西範和、川瀬浩子

【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を培うことを目的に、看護研究の基礎知識に関する研修をシリーズで実施する。集合研修と、地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者のためにオンライン研修とを毎年交互に行っている。本年は集合研修の年である。

【地域貢献のポイント】

県内の看護職者が、看護研究の基礎知識に関する研修を受講することにより、研究的思考や研究遂行能力の礎を築く。また日常の看護業務の中から研究テーマを見出すことによって、看護研究へ取組む意欲を高め、研究を実践し、結果、看護の質の向上につながる。

【前回研修からの課題】

科目の講義時間や講義内容の難易度の検討

I. 活動計画

[数値目標]

前回（令和4年度）の集合研修の受講者数（20～23名、延べ216名）程度の受講者を獲得する。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

「看護研究における倫理的配慮」の科目の講義時間を30分増やす。

実施計画

- ・令和6年4月に研修計画を立て、研修は2週間程度の間隔を開け月2回程度となるように調整し、プログラムを作成する。
- ・受講案内は、県内各医療・行政機関等（151施設）へ送付するとともに、本学ホームページに掲載する。
- ・6月4日から8月1日まで集合研修を実施する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修の実際

研修プログラム（表1）のとおり10科目を5日間で実施した。10施設から15名（単回受講（第2回）コース1名、第3～5回受講者1名）の参加者（延べ119名）であった。開催時期がCOVID-19感染症の再燃時期と重なり、体調不良や急な勤務交代による欠席も多かった。一方、参加地域では、県内北勢～伊勢志摩地区と広域にわたっての参加が得られた。

表1 令和6年度 研修プログラムと受講者数

回	日程	テーマ	時間	講師	受講者数
1	6月4日 (火)	看護研究の意義と文献の活用	10:30～12:00	学長	13
		文献検索と図書館の利用	13:00～14:30	図書館	13
2	6月17日 (月)	研究テーマの決め方と計画の立て方	10:30～12:00	玉田 章	13
		看護研究における倫理的配慮	13:00～15:00	安部 彰	13
3	7月2日 (火)	研究デザインのタイプと選択	10:30～12:00	上田 貴子	14
		質的研究(インタビュー)	13:00～14:30	関根 由紀	13
4	7月23日 (火)	量的研究(アンケート)	10:30～12:00	小池 敦	10
		量的研究(実験・計測)	13:00～14:30	長谷川 智之	10
5	8月1日 (木)	研究論文作成	10:30～12:00	玉田 章	10
		プレゼンテーション(演習含む)	13:00～15:00	灘波 浩子	10

2. 受講者アンケート結果

1) 受講者の属性 (*1 受講最終日：回収率 60.0%)

受講者の年代(図1)は、30歳代と40歳代が最も多く、次いで20歳代、50歳代の順であった。経験年数(図2)は、5年以上10年未満が最も多く、次いで20年以上、5年未満であった。職位はスタッフ(77.8%)が最も多く、他は管理職であった。

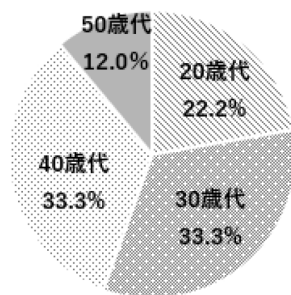


図1 受講者の年代

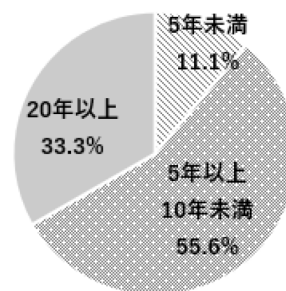


図2 受講者の経験年数

2) 講義内容について (各科目：回収率 83.3～100%)

各講義内容の理解度を図3に示す。「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」と回答した者は、84.6～100%であった。また、「理解しにくかった」を選択した者は全科目でみられなかった。「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」を選択した理由は、「具体的だった」、「知識が深まった」、「演習があり、わかりやすかった」などであった。一方、「あまり理解できなかった」を選択した理由では、「早すぎてついていけなかった」、「難しい言葉があり、理解しがたいところがあった」などであった。

各講義の満足度を図4に示す。「大変満足」、「満足」と回答した者は、「量的研究（アンケート）」62.5%、その他の科目では92.3～100%であった。「大変満足」、「満足」を選択した理由は、「苦手意識がなくなった」、「学びたいことが学べた」、「演習があったため」などであった。「やや不満」を選択した理由では「聞きたい内容が早足だった」、「時間が足りなかった」であった。

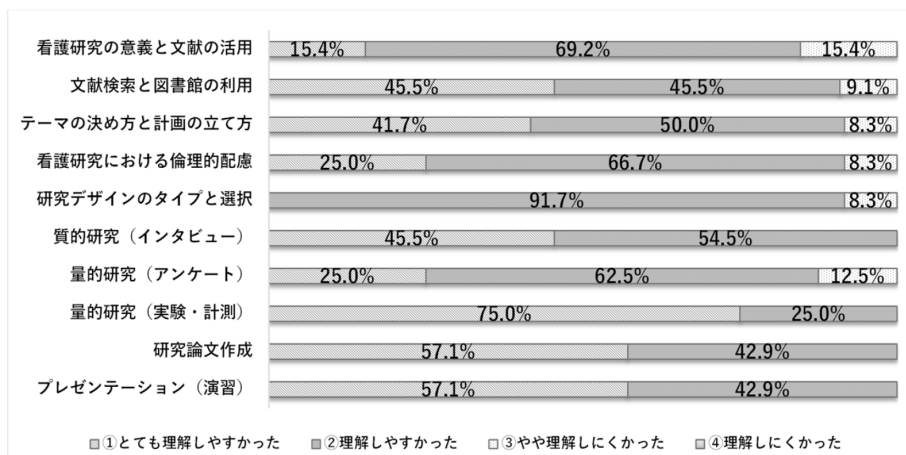


図3 講義内容の理解度

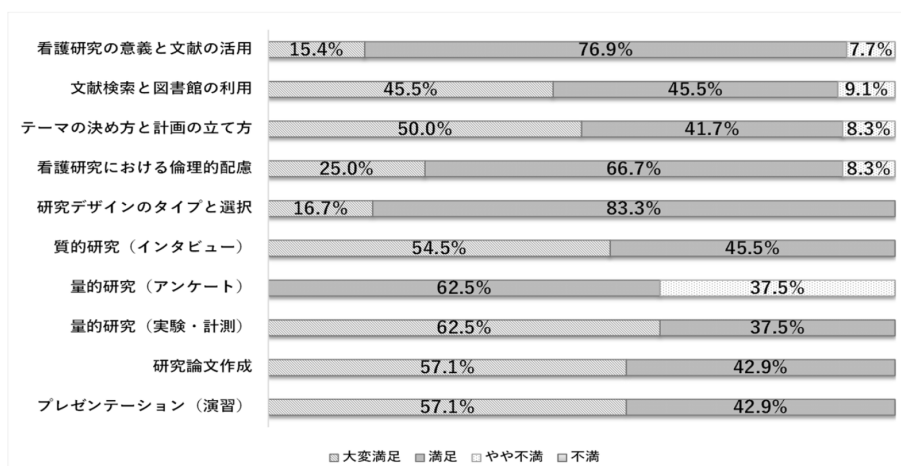


図4 講義内容の満足度



【研修の様子】

3) 本事業全般について (*¹受講最終日：回収率 60.0%)

研修全体に対する満足度を図6に示す。「大変満足」、「満足」を選択した者は、「研修テーマ(科目)」、「研修回数」とも100%であった。「大変満足」、「満足」を選択した理由は、研修テーマ(科目)については、「基礎を学ぶことができた」、「わかりやすく、看護研究に対する苦手意識が減った」など、「研修回数」については、「研究全般の流れを網羅できるので良いと思う」、「ちょうどよい。少ないと内容がうすくなるから」などであった。その他のアンケート結果、「時間帯」では「このままでよい」が88.9%、「方法」では「対面研修のみでよい」と「隔年オンライン研修を続けてほしい」が33.3%、「その他」では「ハイブリッド(対面・オンライン)選択可がよい」の意見もあった。

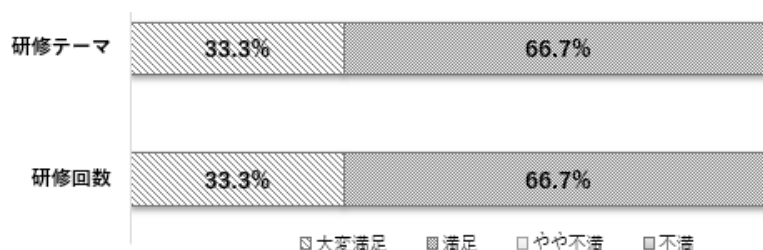


図6 研修全体の満足度

また、研究意欲への設問「この研修を受講して看護研究を開始または継続しようと思いましたが」については、「はい」が88.9%で、その理由は、「興味が強まった」などであった。一方「いいえ」の回答理由は、「研究をサポートするシステムがないため」であったため、受講者全体に対し本学のリクエスト講座を活用できることを伝えた。
* 1：単回の受講者も含む受講者15名の受講最終日に調査

[評価]

数値目標では、以前の集合研修時(令和2年度9施設から15名、延べ122名)(令和4年度9施設から23名、延べ216名)と比較すると、前回より受講施設は1か所増え、伊勢志摩地区からの参加も得られたが、受講者数はコロナ禍の令和2年度程度と少なかった。今後はより参加しやすいよう、受講方法への要望も踏まえ、集合研修とオンライン研修を隔年で行うのではなく、受講者がそのどちらかを選んで参加できるようハイブリッド研修を計画していきたい。また、前回からの課題であった「科目の講義時間や講義内容の難易度の検討」では、講義の理解度は高かったが、「早すぎてついていけなかった」、「難しい言葉があり、理解しがたいところがあった」などの声もあり、また講義の満足度にも幅があるため、引き続き難しい用語の説明や講義の速度に留意し、対象者に合った内容にしていく必要がある。さらに、研修全般に関しては満足度も高く、研修テーマ(科目)・研修回数・時間帯に関しても好評であったが、講師より「研究デザインのタイプと選択」の科目を他の科目内に包含する案が提案されたこともあり、初学者に相応しいプログラムに再編したい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・ハイブリッド(対面・オンラインの選択)研修とする
- ・初学者に相応しいプログラムへ再編する

2) 看護研究エッセンス

担当者： <講師> 斎藤真、長谷川智之、ドライデンいづみ
<運営> 地域交流センター；大西範和、川瀬浩子

【事業要旨】

看護研究に取り組む看護職が、さらなるスキルアップのために、必要な知識や手法を習得し、より質の高い研究ができるよう支援する。

【地域貢献のポイント】

看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・ ホームページ等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内の作成
- ・ プログラムの調整

I. 活動計画

[数値目標]

10名程度の受講者が得られる。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 案内チラシに事業の「概要」を加え、わかりやすくした。
- ・ 研修時間を 10：40～16：10 から 10：00～16：00 に変更し、十分に研究相談ができる時間を設けるとともに、終了時間を早めた。
- ・ 統計解析の最少催行人数を 5 人に変更した。

実施計画

- ・ 令和 6 年 4 月に研修計画を立て、本学ホームページに募集記事を掲載する。
- ・ 令和 6 年 5 月に、研修案内を、県内各医療・行政機関等（151 施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・ 看護研究 SEED やハウツー看護研究を実施する際、受講者へ広報を行う。
- ・ 施設単位看護研究支援の際や看護協会の研修時に研修案内を配布する。
- ・ 8 月から 11 月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

昨年度と同様「統計解析（基本編）」、「統計解析（応用編）」・「英語論文の書き方」が登録された。研修プログラム（表 1）のとおり案内した。しかし申込者数が最少催行人数に至らず、開催できなかった。

表1 令和6年度 研修プログラム

コース	英語論文の書き方	統計解析 (基本編)	統計解析 (応用編)
本コースの 対象	・英語論文執筆に興味がある方 ・英語論文投稿先へのカバーレターや メールでのやり取りが必要な方	・統計手法をブラッシュアップしたい方 ・表計算ソフト(エクセル)を使用した ことがある方	・統計解析(基本編)を修了された方
日時	8月31日(土) 10:00~16:00	10月5日(土) 10:00~16:00	11月9日(土) 10:00~16:00
担当者	ドライデン いづみ	齋藤 真・長谷川 智之	齋藤 真・長谷川 智之
概要	初学者を対象に、便利な英語表現やつなぎの言葉を使って、英文のニュアンスを理解し、英語論文の書き方を学びます。また、英語論文でよく用いるAPAスタイルでの参考文献の記載方法、英語論文投稿先へのカバーレターやメールの書き方も学びます。	初学者を対象に、統計の基礎から研究でよく用いる統計手法(図表の作成)について考え方と実際の使い方を学びます。アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法(t検定、 χ^2 乗検定など)について考え方と実際の使い方を学びます。基本編の知識をもとに、検定の考え方について学びます。
担当者からの コメント	英語論文は形式が整っていたり、内容の「道しるべ」となる転換語や一般化・程度表現を使用するだけでも読み手に内容が伝わりやすくなります。英文作成練習を繰り返して英語の使い慣れをしていきましょう!	統計学について基本から学びたい方におすすです。エクセルによるアンケート調査の解析と統計処理の基本について学びます。	統計解析の基本編を修了された方を対象に応用編となる統計解析手法を学びます。また、結果と考察の書き方についても学ぶ予定です。
最小催行 人数	1人	5人	5人

[評価]

今年度は全てのコースが開催できなかった。令和2年度より企画した本研修であるが、昨年度も開催できなかったコースがあり、事業自体が看護職者の希望する支援とそぐわなくなっているのではないかと考える。今後は、個々の希望に添える内容に調整可能なリクエスト講座等に包括していく方向で検討していきたい。

3) ハウツー看護研究

担当者：＜講師＞浦野茂、関根由紀、小池敦、菅原啓太、斎藤真、長谷川智之
＜運営＞地域交流センター；大西範和、川瀬浩子

【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を演習により体験し、研究の実践に活かせるよう支援する。

【地域貢献のポイント】

看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・HP 等に本事業の実用性を示すことや、分かりやすい研修案内の作成
- ・土曜日開催の開始時間の検討
- ・量的研究コース（実験・計測）の広報
- ・開催希望のテーマを考慮した研修計画

I. 活動計画

[数値目標]

10 名程度の受講者が得られる。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・案内チラシに事業の「概要」を加え、わかりやすくした。
- ・土曜日の研修時間を 9:00～から 10:00 に変更し、また十分に研究相談ができる時間を設けた。
- ・最少催行人数を量的研究コース（実験・計測）は 5 人、量的研究コース（アンケート）は 2 人に変更した。

実施計画

- ・令和 6 年 4 月に研修計画を立て、本学ホームページにて募集記事を掲載する。
- ・令和 6 年 5 月に、研修案内を、県内各医療・行政機関等（151 施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・看護研究 SEED や看護研究エッセンスを実施する際、受講者へ広報を行う。
- ・施設単位看護研究支援の際や看護協会の研修時に研修案内を配布する。
- ・8 月から 12 月に、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 研修の実際

例年開催の「質的研究コース（インタビュー）」・「量的研究コース（アンケート）」・「量

的研究コース(実験・計測)」が登録された。研修プログラム(表1)のとおり3コースを計画した。質的研究コース(インタビュー)は2施設より2名が参加した。量的研究コース(実験・計測)と量的研究コース(アンケート)は申込者が最少催行人数に至らず、開催できなかった。

表1 令和6年度 研修プログラムと受講者数

コース	日時	担当者	テーマ	最少催行人数
質的研究コース (インタビュー)	①8月6日(火) 13:00~16:10	浦野 茂 関根由紀	インタビューによる 質的研究を行ってみる	2人
	②8月19日(月) 13:00~16:10			
	③8月26日(月) 10:40~16:10			
量的研究コース (実験・計測)	①9月7日(土) 10:00~16:30	齋藤 真 長谷川智之	「誤薬防止のための実験検討」 ～身近にある課題を、 実験研究で解決!～	5人
	③9月28日(土) 10:00~16:30			
量的研究コース (アンケート)	①11月2日(土) 10:00~16:30	小池 敦 菅原啓太	アンケートの作成や調査の実施、分析 を体験してみませんか?	2人
	③12月1日(日) 10:00~16:30			

2. 受講者アンケート結果(最終回:回収率100%)

1) 受講者の属性

受講者は30~40歳代、経験年数は5年以上から20年以上、職位は管理職やスタッフと様々であった。



【質的研究コース(インタビュー)】

2) 講義内容について

講義の理解度は、「理解できた」、「やや理解できた」が100%であり、その理由は、「インタビューガイドの作り方から、コード化分析まで理解出来た」などであった。また講義の満足度は、「満足」が100%であった。

3) 本事業全般について

運営および開催時間帯に関しては「満足」が100%で、「受講者は2名であり、肯定的で話しやすい雰囲気を作っていた」などであった。

[評価]

平成29年度に試行、翌年より開催された本研修であるが、令和2年度より非開催のコースがあり、今年度の開催は「質的研究(インタビューコース)のみとなった。実際に受講した者の満足度は高いが、申込者が少ないことより、事業自体が看護職者の希望する支援とそぐわなくなってきたのではないかと考える。今後は、個々の希望に添える内容に調整可能なリクエスト講座等に包括していく方向で検討していきたい。

4) 施設対象看護研究支援

担当者：施設単位看護研究支援講師；小池敦、中西貴美子、大川明子、灘波浩子、
前田貴彦、関根由紀、日比野直子、川島珠実
看護研究発表会支援講師；大川明子
地域交流センター；大西範和、川瀬浩子

【事業要旨】

県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とする。看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループ又は個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行う「施設単位看護研究支援」と、看護研究発表会における講評・審査を行う「看護研究発表会支援」を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質の向上につながる。本事業により、地域の人々によりよい看護実践を還元することに繋がる。

【昨年度からの課題】

- ・受講施設のニーズに合わせた支援方法の紹介
- ・リクエスト講座の動向も合わせた事業の評価

I. 活動計画

[数値目標]

- ・施設単位看護研究支援は過去3年間の平均利用件数7件を維持する。
- ・看護研究発表会支援は過去3年間の平均利用件数1件を維持する。

[実施計画]

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・「その他の看護研究支援」を「施設対象看護研究支援」に名称変更した。

実施計画

1. 施設単位看護研究支援

- ・令和6年1月に募集案内を県内医療機関等（151施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切2月末日）
- ・令和6年3月～4月に申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。
- ・令和6年4月に支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。
- ・令和7年3月迄、担当教員が研究指導を行う。

施設で看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し、本学の教員が出張して指導を行う。施設からの申込みは1施設6研究以内とする。

支援の基本単位は、3時間×4回の指導とする。

2. 看護研究発表会支援

- ・令和6年1月に募集案内を県内医療機関等（151施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切11月末日）
- ・令和6年3月～4月に全教員から支援担当者を募集する。
- ・令和7年3月迄に支援の申込みに対し、発表演題について対応可能な教員を派遣する。
- ・施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 支援の実際

1) 令和6年度の支援状況

施設単位看護研究支援施設（表1）は8件であり、参加者80名、延べ270名（R5 76名、延べ239名）であった。看護研究発表会支援では、1施設より6題の書面講評の依頼があり、昨年度施設単位看護研究を担当していた教員が引き続き担当し、参加者は24名であった。また昨年度のリクエスト講座を利用した施設1件が、施設単位看護研究を利用した。

表1 令和6年度 施設単位看護研究支援施設一覧

No.	施設名	担当教員
1	藤田医科大学 七栗記念病院	大川 明子
2	特定医療法人唯純会 武内病院	川島 珠実
3	公益社団法人 地域医療振興協会 三重県立志摩病院	中西 貴美子
4	JCHO四日市羽津医療センター	日比野 直子
5	松阪中央総合病院	前田 貴彦
6	鈴鹿中央総合病院	瀧波浩子
7	済生会明和病院	小池 敦
8	三重県立総合医療センター	関根 由紀

表2 令和6年度 看護研究発表会支援施設

施設名	担当教員
武内病院	大川 明子

2. 受講者アンケート結果

1) 施設単位看護研究支援

アンケート配布数は80名、回収数は60件（回収率75.0%）であった。支援（図1）に関して、「満足」、「やや満足」が90.0%（令和5年度95.9%）であり、その理由は「計画的に研究に取り組むことができた」、「とても親切にわかりやすく指導していただき、研究への苦手意識が低くなった」であった。

一方「やや不満」、「不満」が10.0%で、その理由は、「やや不満」に関しての「年間スケジュールが綿密に伝えられなかった」のみであった。また、「やや満足」の回答理由の中には、「時間が限られ、充分ではなかった」や「指導回数を増やしてほしい」などの意見もあった。

2) 看護研究発表会支援

アンケート回収数は22件（回収率91.7%）であった。参加者の年代は20～50歳代、

職位も管理職からスタッフと様々であった。支援（図2）に関して、「満足」が81.8%（令和5年度60.8%）であり、その理由は「講評の内容がよく発表者のモチベーションが上がった」、「各研究に対しての講評が的確でわかりやすかった」などであった。一方、「やや不満」、「不満」が18.1%あり、その理由は「出勤扱いでないため」と勤務体制に関する内容であった。

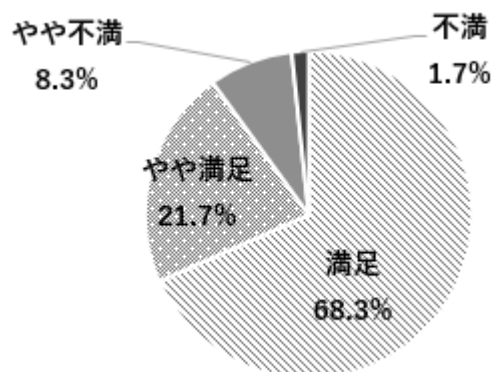


図1 施設単位看護研究支援の満足度

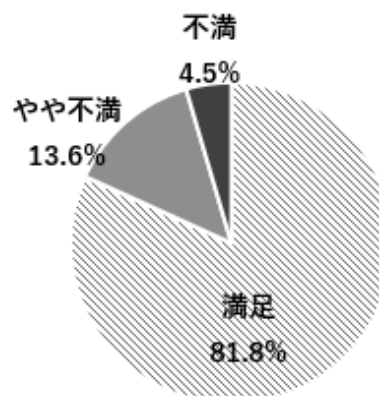


図2 看護研究発表会支援の満足度

[評価]

「施設単位看護研究支援」・「看護研究発表会支援」とも満足度は高く、参加者が記載した回答理由からも、本事業の目的である「看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培う」ことに繋がったと評価する。特に「看護研究発表会支援」では、昨年同様「施設単位看護研究」を担当していた教員が講評したことが満足度の高さに繋がったことが伺えたため、引き続き、ロールモデルとして紹介していきたい。また、数値目標では「施設単位看護研究支援」の「過去3年間の平均件数7件を維持する」を達成できた。

一方、施設単位看護研究支援に関して、少数の意見ではあるが、説明が届いていない状況が伺えたため、次年度は留意していく必要がある。さらに研究支援へのより多くの時間や回数の希望には、リクエスト講座の利用など、受講施設のニーズに合わせた支援方法を紹介していきたい。

Ⅲ. 今後の課題

- ・スケジュールなど支援方法の詳細な説明
- ・受講施設のニーズに合わせた支援方法の紹介

3. 公開講座

3. 公開講座

担当：宮崎つた子、長谷川明子、地域交流センター委員

【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的に実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源を活かした生涯学習等を行う。

【昨年度からの課題】

- ・ 新型コロナウイルスに関する情報を注視し、それに応じた感染防止対策を講じつつ、来場人数を増やすことにより多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。

I. 活動計画

[数値目標]

- ・ 参加者数の目標値
1回の開催につき、一般県民の参加者 100人以上。

[実施計画]

- ・ 昨年度からの変更点
 1. 来場者定員は、駐車場確保の面から 300名から 200名へ減らす。
- ・ 実施計画
 1. 来場(一般県民)とオンライン(学内関係者)の併設により、より多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。
 2. 案内パンフレットを作成し、県内各所に送付するとともに本学ホームページに掲載して周知啓発を行う。
 3. 定員 200名に満たない場合は、当日参加も受け付ける。

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 開催回数
令和6年度は3回の公開講座を開催した。(実施の詳細は後半に記載)
2. 参加者数
一般県民の参加者は、第1回 86名、第2回 167名、第3回 130名、平均 128名であった。
3. 参加者の背景
参加した一般県民の年齢は、70歳代が最も多く、34.7%、次いで60歳代は19.9%、次いで50歳代15.8%、80歳代12.6%であり、60歳以上の参加者が6割を超えた。一般県民の参加者のうち医療・福祉・保健関係者は、25.2%であり、一般の方が7割を超えた。公開講座を知るきっかけは、「大学からの案内」が最も多く45.7%、次いで、「チ

ラシ・ポスター」の 32.8%であり、チラシ・ポスターの配布・発送による案内での認知が 7 割を超えた。

4. 講座の満足度

講座の内容について、「とてもよかった」が 64.6%、「よかった」が 26.5%であり、「あまりよくなかった」は、0.3%(1 名)あり、「よくなかった」は 0.0%、「無回答」が 8.8%であった。

5. 今後希望する公開講座のテーマ

今後、希望するテーマは、「高齢者と健康」138 名「心の健康」131 名が非常に多く、次いで、「認知症」が 106 名、「生活習慣病」が 74 名、「在宅看護・介護」が 67 名の順であった。

[評価]

一般県民の参加者数について、第 1 回のみ 100 名を下回ったが、平均すると目標値を上回る参加があった。また、講座の内容については、第 1 回はリハビリテーションの目的や専門的な内容について、県民の日常生活や生活動作に役立つ講演であった。第 2 回は、認知症に関するテーマ、第 3 回は、講師自身の経験からこころの持ちようや苦境の乗り越え方など、昨年度の参加者からの要望を反映しつつ、「心の健康」にまつわるテーマとした。その結果、9 割以上の参加者から肯定的な評価が得られた。

一般県民の参加者の 6 割以上は高齢者世代であることから、会場内での安全の確保等にも配慮し、会場運営を行い、また、参加者の多様な状況に合わせ、駐車場や会場の座席の確保を行った。

県民のニーズに合わせたテーマの選定や会場運営により、多くの県民に参加いただくことができ、県民の心身の健康への意識や知識を高めることができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

次年度も、県民のニーズに合わせた講座を開催し、より多くの県民の参加と満足を得られるよう広報、運営を行う。

公開講座実施の詳細

1. 第 1 回公開講座

内容：「脳卒中とリハビリテーション」

講師：園田 茂 先生

(藤田医科大学七栗記念病院前院長)

日時：令和 6 年 6 月 29 日 (土)

13 時 10 分～14 時 40 分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン (学内関係者)

参加人数：193 名

【内訳】来場者 104 名 (一般：86 教職員：18)

オンライン 89 名 (在学生：85 教職員：4)

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



2. 第2回公開講座

内容：「認知症早期発見のコツ；

早く見つけて予防介入しよう！」

講師：富本 秀和 先生

(済生会明和病院 病院長・

三重大学大学院医学研究科 特定教授)

日時：令和6年10月19日(土)13時30分~15時00分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(学内関係者)

参加人数：286名

【内訳】来場者189名

(一般：167 報道2 教職員：20)

オンライン97名(在学生または学外理事等：91 教職員：6)

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



3. 第3回公開講座

内容：「夢をつかむ」

講師：登坂 絵莉 先生

(元レスリング女子日本代表・

リオデジャネイロオリンピック

女子レスリング金メダリスト)

日時：令和7年1月11日(土)13時30分~15時00分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(学内関係者)

参加人数：235名

【内訳】来場者149名

(一般：130 報道3 教職員：16)

オンライン86名(在学生または学外理事等：80 教職員：6)

共催：公益財団法人三重県スポーツ協会

後援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



VI. 連携

1. 連携協力協定
2. 県内病院等看護管理者意見交換会
3. 人事交流教員支援

1. 連携協力協定（医療機関・市町）

担当者：地域交流センター 宮崎つた子、川島好子

【目的】

本学と医療機関または市町が相互に連携・協力関係を構築することで、臨床現場や臨地における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

【連携協力協定（医療機関）】

国立病院機構三重中央医療センターと今年度から新たに連携協力に関する協定を結んだ。特に総合周産期母子医療センターとして、母胎や新生児に対する高度な医療や看護について連携し、臨地実習の受け入れの協力を得ている。さらに、急性期医療やがん治療の看護についても臨地実習の受け入れ協力を拡大し、より一層の連携・協力を図り、看護師の質向上に向けて相互に連携強化に取り組む。

表 1. 連携協力協定病院（令和 7 年 3 月 31 日現在）

	医療機関名	協定締結日
1	県立こころの医療センター	平成 25 年 2 月
2	松阪市民病院	平成 26 年 3 月
3	済生会松阪総合病院	平成 26 年 3 月
4	厚生連松阪中央総合病院	平成 26 年 5 月
5	県立総合医療センター	平成 26 年 6 月
6	伊勢赤十字病院	平成 26 年 8 月
7	国立三重病院	平成 27 年 1 月
8	県立一志病院	平成 27 年 11 月
9	厚生連鈴鹿中央総合病院	平成 29 年 4 月
10	市立伊勢総合病院	平成 30 年 3 月
11	岡波総合病院	平成 31 年 3 月
12	伊賀市立上野総合市民病院	令和 2 年 8 月
13	藤田医科大学七栗記念病院	令和 5 年 6 月
14	国立三重中央医療センター	令和 6 年 10 月

【連携協力協定（市町）】

表 2. 連携協力協定市町（令和 7 年 3 月 31 日現在）

	市町名	協定締結日
1	名張市	令和 3 年 3 月
2	津市	令和 3 年 7 月

【令和6年度 連携協力協定機関看護管理者意見交換会】

I. 活動計画

1. 開催日時：令和6年11月21日（木）13時30分～15時30分
2. 会場：三重県立看護大学 大会議室
3. 対象者：連携協力協定機関看護管理者
4. 内容：意見交換会
 - 1) 協定病院と本学との共同研究について
 - 2) 協定病院と本学の連携協力について
(現状の課題を含めて)
 - 3) その他



写真1 意見交換会の様子

II. 活動の結果と評価

今回、初めて学校と連携協力協定機関の看護管理者との意見交換会を開催した。連携協力協定病院同士の顔合わせも初めてであった。

連携協力協定の取組事項として、大学教員、病院職員による共同研究の推進、公開講座の共催など契約されており、この会を通して、具体的に進めていくことを共有した。

1. 参加者の概要

参加者は14名（看護部長級9名、副看護部長級4名、看護師長級1名）であった。

2. 参加者によるアンケート結果 回収14件（回収率100%）

会議の時期、会議の時間について、「満足・やや満足」が100%、満足度について「満足・やや満足」が100%という結果であった。今後本学に期待されることについて、共同研究について前向きな意見が多く、「この会の開催を継続し、大学・施設間の情報交換の場にしてほしい」という意見が多くあった。

III. 今後の課題

この会を定期的で開催し、本学と医療機関との連携・協力関係を構築し、臨床現場における学生と看護職者の資質の向上につなげる。今回は、看護管理者の意見交換会を開催したが、次回は病院長の参加を依頼し、さらに幅を広げた意見交換の機会を検討していく。

2. 県内病院等看護管理者意見交換会

担当者：宮崎つた子、長谷川明子

【事業要旨】

県内病院等の看護管理者を対象に、本学の取組について、理解と協力を得て連携を深めるとともに、地域に根差した看護の教育・研究機関である本学の役割を示し、地域の医療機関のニーズ把握を図るため、本学学長との意見交換会を実施する。

【地域貢献のポイント】

県内の病院等看護管理者の看護管理実践に有用な情報提供、意見交換を行い、各施設における看護実践・看護教育・看護研究の質向上に寄与する。

I. 活動計画

[数値目標]

看護管理者の出席者数 20 名以上を維持する。

[実施計画]

1. 昨年度からの変更点

- ・昨年度アンケート結果から、意見交換への要望は高く、意見交換の時間を昨年度の倍の 80 分間を確保した。
- ・会場を大講義室から食堂に変更し、研修形式から交流会形式の雰囲気に変え、参加者による自己紹介の時間を確保した。

2. 対象者

県内病院等の看護管理者

3. 開催日時

令和 6 年 9 月 12 日（木）13 時 30 分～16 時 00 分

4. 会場

三重県立看護大学 食堂

5. 内容

(1) 行政からの情報提供「三重の医療を支える看護職のキャリア形成」

三重県医療保健部 医療政策総括監 栗原 康輔

(2) 学長による講話「看護者の中にあるそれぞれの気づき」

学長 片田 範子

(3) 本学からの情報提供「看護の質向上への本学の取り組み」

①「本学学生の特徴とカリキュラム外の教育」

学部長 玉田 章

②「三重県における『地元創成看護学』人材育成の展望」

メディアコミュニケーションセンター長 大平 肇子

③「地域交流センターにおけるリカレント教育への取り組み」

地域交流センター長 宮崎 つた子

(4) 意見交換

- ・「各施設における看護職のキャリア形成への支援の現状」
- ・「看護の質向上への支援として本学に求めること」

(5) まとめ・終わりのあいさつ

II. 活動の結果と評価

[結果]

1. 出席者の概要

出席者は43名で、看護管理者22名、三重県医療保健部より3名、学内教職員18名であった。看護管理者の医療圏別内訳は、北勢5名、中勢伊賀10名、南勢志6名、東紀州1名であった。

2. 内容

今年度は、「看護職の資質向上への支援」に焦点を当てた話題とし、県からの情報提供、本学からの話題提供を行った。その後、二つのテーマについて、意見交換を行った。

意見交換では、看護管理者間で、4～5名のグループにてディスカッションを行い、その後、各グループからの発表により、意見を共有した。「看護の質向上への支援として本学に求めること」については、認定看護師教育課程の継続、専門看護師の育成、診療報酬の加算に関連する研修の開催、看護研究支援の継続を望む意見があった。「各施設における看護職のキャリア形成への支援の現状」については、各施設における支援として、クリニカルリーダーに基づく支援、マネジメントリーダーの検討、キャリアに関する個別面談などの取り組みが挙げられた。また、認定・専門看護師等資格取得にかかる費用や取得後の処遇への反映はあるものの、大学院進学・修了に関しては支援や処遇への反映がないこと、大学院進学に対し難しいイメージを抱いていることが共有された。

これらの意見の共有において、大学側からも質問や意見等を発し、特に、看護研究支援や大学院進学に関して、大学側、管理者側で活発な意見交換がなされた。



写真 意見交換の様子

3. 出席者によるアンケート結果

開催後、看護管理者へ Microsoft Forms によるアンケートを実施し、回収率は 90.9% であった。アンケートは、各項目について、「満足」、「やや満足」、「やや不満」、「不満」の 4 段階で評価した。結果は、図 1 に示す。

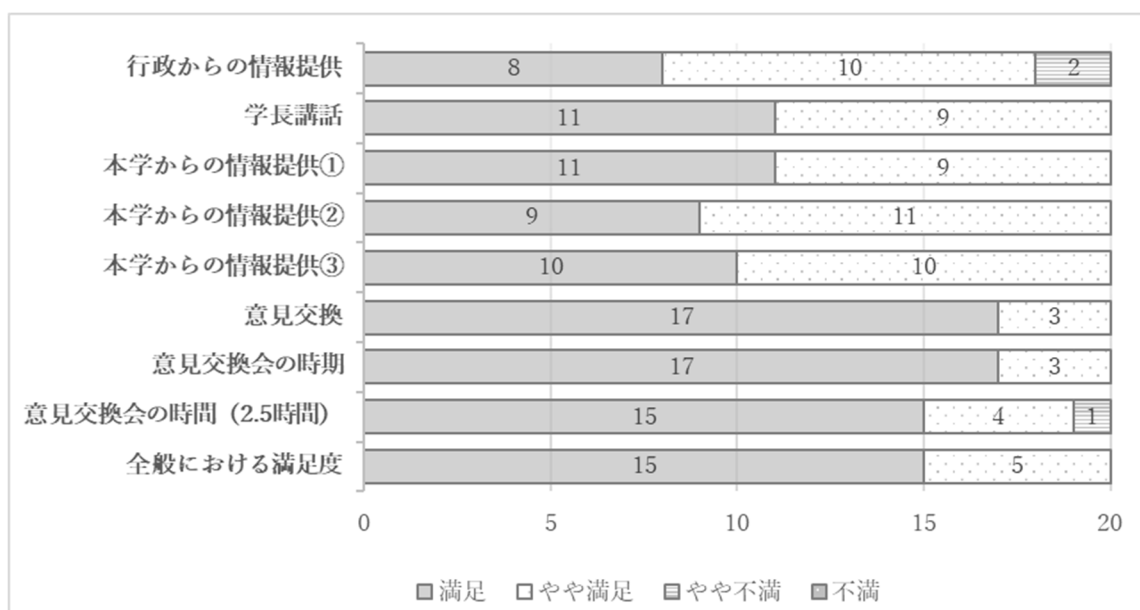


図 1 意見交換会にかかる満足度

特に、意見交換に関する満足度は高く、「他施設の取り組みから学べるものが多かった」、「他院の状況がわかり、悩みも共有できた。」等の感想があった。時間を 80 分確保し、ティータイムと自己紹介の時間をつくったことにより、和やかな雰囲気の中で、活発に意見交換を行い、さらには、管理者間の交流、悩みや困りごとの共有の機会にもなったことが満足につながったと考える。

全体を通しての感想として、「同じ立ち位置の方と考えを述べることで、自身の振り返りと今後の展望に繋がる。」、「横の繋がりができる機会としてありがたい。」等の感想があった。

今後希望する意見交換のテーマについては、人材育成、継続教育に関するものが要望の半数以上を占め、特に、主任・師長の育成に関する要望が多かった。また、地域交流センター事業への要望としては、認定看護師の養成に関する要望が複数挙げられた。

Ⅲ. 今後の課題

出席者数は、昨年度と同等であったが、連携協力協定病院の全 13 施設より出席いただいた。次年度も、県内の看護管理者のニーズを把握し、看護管理者にとって有益な会となるよう企画検討する。また、より多くの看護管理者に出席していただけるよう日程、案内・周知方法についても十分検討する。

3. 人事交流教員支援

担当者：宮崎つた子、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、人事交流教員が1年間本学助手として教育、研究、大学経営および地域貢献を担うにあたり、新たな環境に順応し目標達成できるよう相談的役割を担う。

【地域貢献のポイント】

県内の病院より人事交流として派遣された看護職が、本学における教育や研究活動へのモチベーションを維持し、臨床での実践活動に反映することができる。

I. 活動計画

[実施計画]

1. 定期的なミーティング

人事交流教員の日ごろの活動を振り返り、気づきや学び、悩みごとなどを共有する。できるだけリラックスした環境で、時にはランチミーティングやティーミーティングとしてリフレッシュをはかる。2か月に1回程度とするが、状況を見て回数を増減する。

2. 相談

随時メールによる相談を行う。支援側よりメールを送り、相談しやすい環境をつくる。

3. その他の対応

- ・相談内容によって必要な場合は、本人の意向を尊重しながら、適所へ報告する。
- ・定期的なミーティングの実施日程については、配属先の領域長に情報提供する。

II. 活動の結果と評価

今年度、人事交流教員は1名であり、常に個別的な関わりとなった。人事交流教員の授業や実習等のスケジュールを把握し、ミーティングの時期や話題を設定した。ミーティングは、6回実施した。人事交流教員1名と地域交流センター配属の特任教員1名が参加し、毎回1時間程度で実施した。各回の内容は下記のとおりで、各時期に人事交流教員が取り組んでいる教育や研究、また、看護職としてのキャリア等について語り合い、気づきや学び、悩み事を共有した。

- ・4月25日 「歓迎ミーティング」：1年間の抱負、この1か月の体験など
- ・6月14日 「ティーミーティング」：学生とのかかわり、臨床の経験など
- ・8月27日 「ランチミーティング」：授業や学内イベントでの体験、研究など
- ・11月6日 「リフレッシュミーティング」：領域別実習における体験など
- ・1月28日 「おつかれさまミーティング」：領域別実習を終えて
- ・3月19日 「送別ミーティング」：1年間の振り返り、臨床への抱負などについて

本事業により、人事交流教員が日常の職務から離れ、リラックスできる環境で、教育や研究、臨床での経験や今後のキャリアなどについて語ることでリフレッシュにつながった

のではないかと考える。

Ⅲ. 今後の課題

次年度も、対象となる人事交流教員の人数や状況に合わせて、時期や方法を検討し実施する。

VII. その他

1. 情報発信・広報活動

2. 各種事業案内

- ・みかん大出前講座
- ・みかん大リクエスト講座
- ・看護研究SEED
- ・看護研究エッセンス
- ・ハウツー看護研究
- ・施設単位看護研究支援
- ・看護研究発表会支援
- ・三重県新人助産師合同研修
- ・助産師（中堅者・指導者）研修
- ・三重県看護職員認知症対応力向上研修
- ・三重県病院勤務以外の看護師等
認知症対応力向上研修
- ・母子保健体制構築アドバイザー事業
- ・地域交流センター活動報告会

1. 情報発信・広報活動

令和6年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 令和6年度 VOL.27
令和7年5月に発行予定

2. 報告会開催

令和6年度地域交流センター活動報告会

日時：令和7年3月21日（金）

10時40分～12時00分

場所：三重県立看護大学 大講義室

参加者数：55名

方法：ポスター発表による交流会形式

発表ポスター：

第一部

1. 令和6年度地域交流センター活動の総括 1・2

【受託事業】

2. 三重県新人助産師合同研修事業
3. 助産師（中堅者・指導者）研修事業
4. 三重県認知症対応力向上研修事業
5. 母子保健体制構築アドバイザー事業

【教員提案事業】（みえ保健・看護力向上支援事業）

6. 実践につなげるフィジカルアセスメント
7. 障がい児の切れ目ない就学支援事業
8. 医療施設に広げよう看工連携による 特許の輪(その2)
9. シコウ Upgrade♡ — 医療機関の高齢者看護
10. 仲間とともに育ち合う教育実践講座

第二部

【教員提案事業】（県民のヘルスリテラシー橋上支援事業）

11. 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援
12. おいさないさ、みかん大ミニ講座
13. みかん大ヘルシーウォーキング体験会
14. 看護と情報リテラシー
15. 「認知症の人にやさしく寄り添う」ための相談・支援
16. みかん大 暮らしの保健室



写真 報告会の様子

【卒業生支援事業】

17.卒業生のきずなプロジェクト

18.卒業生支援プロジェクト

【認定看護師教育】

19.認定看護師教育課程「感染管理」

3. ホームページ（地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信）

- ・地域交流センターの活動の「みえる化」を目的に、積極的に活動記事をアップし、今年度は93件であった。（R5：124件 R4：65件、R3:91件）

4. 県内関係機関へのパンフレット配布

- ・「令和6年度 三重県立看護大学地域交流センター 講師派遣のご紹介」
- ・5月 県内医療施設、社会福祉施設、教育施設等へ1264件、2090部を配布
- ・適宜 地域交流センター事業にて配布（公開講座、イベントへの参加等）

5. イベントへの参加

1) フレンテフェスタ 2024

日時：令和6年6月2日（日）10時00分～15時00分

場所：三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」セミナー室A・B

内容：・ヘモグロビン量測定(貧血チェック)

- ・骨密度測定
- ・血管年齢・ストレス測定
- ・体組成測定(体脂肪、筋肉量、基礎代謝量等)
- ・握力測定
- ・相談コーナー

参加人数：101名

主催：三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」



写真 フレンテフェスタの様子

2) みえアカデミックセミナー2024

(1) 公開セミナー

日時：令和6年7月20日(土) 13時30分～15時00分

場所：三重県文化会館 レセプションルーム

テーマ：「子どもの我慢は成長とともに」

講師：学長 片田 範子

参加人数：43名

主催：三重県生涯学習センター



写真 公開セミナーの様子

6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

令和6年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオ、新聞掲載を下表に示す。

媒体		内容		掲載
TV	三重テレビ放送	News	第2回公開講座、三重中央Hpとの連携協力協定	
	ZTV		第3回公開講座	1月13日
ラジオ	FMみえ	CampusCube	第1回公開講座の開催案内	6月7日
		キャンパスインフォメーション	第2回公開講座の開催案内	10月4日
新聞	三重タイムズ	募集記事	教員提案事業「みかん大暮らしの保健室」 みかん大リクエスト講座「こころもからだもごゆるりと」	1月10日
	三重ふるさと新聞	募集記事	教員提案事業「みかん大暮らしの保健室」 みかん大リクエスト講座「こころもからだもごゆるりと」	1月9日
	中日新聞	開催記事	第3回公開講座	1月12日
		開催記事	教員提案事業「僕たち私たちでも出来る！夏の危険から身を守るための基礎講座」	7月25日
		募集記事	教員提案事業「みかん大暮らしの保健室」 みかん大リクエスト講座「こころもからだもごゆるりと」	1月10日
読売新聞	開催記事	第3回公開講座	1月12日	
広報紙	MCN REPORT	TOPICS 大学の出来事など	地域交流センター活動報告会 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」入学式 第1回公開講座開催案内	Vol.59（6月発行）
			みかん大出前講座、みかん大リクエスト講座 「卒業生のきずなプロジェクト」第1回茶話会 第1回公開講座報告、第2回公開講座告知	Vol.60（9月発行）
			県内看護管理者意見交換会報告 第2回公開講座報告 第3回公開講座開催案内	Vol.61（12月発行）
			第3回公開講座報告 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」修了式	Vol.62（3月発行）

2. 各種事業案内と申込用紙

I. みかん大出前講座

本学の教員は、自身の教育や研究、社会活動の専門性や成果をもとに、県民の皆さまを対象とした出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。「みかん大出前講座 テーマ一覧」より、ご希望のテーマをお選びいただき、「みかん大出前講座」申込書にてお申し込みください。

1. 目的

みかん大出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

2. 対象者

県内に在住・在勤・在学の5名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。広く地域の方を受講者として募集することができる場合は、公開講座としての開催をお願いします（本学ホームページに開催案内を掲載します）。

3. ご留意いただきたいこと

- 各講座の時間は1講座90分以内となります。
- 講師料は無料です。交通費のみご負担いただきます。（請求書は発行しません）
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。
*規程がない場合、本学規程で対応いたしますので、お問い合わせください。
*ただし、本学から会場までの距離が2km未満の場合は、負担いただく必要はございません。
*交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- 施設からの申込件数は、2件以内とさせていただきます。
- 会場の手配、必要物品（PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等）の準備、@参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。ただし、申込者様による開催の記録として、写真撮影が必要な場合は、事前に講師へ直接ご相談ください。
- 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。なお、土・日・祝日や夜間（終了時間が20時以降になる場合）の開催については対応いたしかねます。有料講座（みかん大リクエスト講座）をご利用ください。
- 各講座の受付件数には上限があるため、やむを得ずお断りすることがございますのでご了承ください。受付を終了した講座の情報は、本センターホームページに随時掲載いたします。

4. お申し込み期間

令和6年度のお申し込みは、令和6年11月29日（金）まで受け付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

講座ごとに、開催上限回数になり次第、受付終了となります。

5. テーマ選定～お申し込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご留意いただきたいこと」をよくお読みください。

本冊子「令和6年度 三重県立看護大学地域交流センター講師派遣のご紹介」に記載されている「みかん大出前講座」から、ご希望のテーマをお選びください。

「みかん大出前講座」申込書にご希望のテーマ名、必要事項等を記載してください。

必要事項を記入した申込書を、FAX または E-mail にて送付し、本センターまで、お申し込みください。（TEL/FAX：059-233-5610、E-mail：rc@mcn.ac.jp）

6. お申し込みから実施までの流れ

申込書に記載していただいた希望内容に応じ、本センターにて担当講師と日程を調整します。

日程調整後、本センターから申込者様宛に決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。
（日時の調整がつかず、やむをえずお断りすることがあります。ご了承ください。）

決定通知書を受領後、講座内容の詳細について、申込者様と担当講師との間で直接打ち合わせをしていただきます。

※申し込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座」

では、みかん大出前講座一覧が確認でき、申し込み多数にて受付を終了した講座に関する情報や、「みかん大出前講座申込書」をダウンロードできます。

※尚、申し込み後2週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

三重県立看護大学地域交流センター

令和6年度「みかん大出前講座」申込書

申込書記入日 令和 6年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()	
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒	電話		
	FAX	E-mail	※必ずご記入願います		

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせのみに使用し、その他の用途に使用することはありません。講座終了後は一定の期間を持って適切に破棄します。

出前講座の希望内容	希望日時 第1~3 (土日・ 祝日不可)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分	② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分	③ 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分
	希望 会場名	参加予定人数		名
	会場 所在地	参加者の内訳 (例: 看護師 30 名、 保護者 30 名、高校 2 年生 30 名など)		
	番号/ テーマ名	No. -	テーマ名	
出前講座資料	<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい *資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。			広く地域の方を受講者として募集することができ (本学HPに開催案内を掲載) 可能 不可能 要相談

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大出前講座」決定通知書 受付No()

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和 6年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名		
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分			
	教員氏名	教員連絡先			

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/FAX:(059)233-5610 E-mail:rc@mcn.ac.jp

Ⅱ. みかん大リクエスト講座

本センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。それらの講座以外の内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などのご要望に合わせて、講師を派遣いたします。ご要望の際には、「みかん大リクエスト講座」申込書にてお申込みください。

なお、「みかん大リクエスト講座」は有料となりますので、あらかじめご了承ください。

1. ご留意いただきたいこと

- ・ 講師料はお問い合わせください。別途交通費もご負担いただけます。
(請求書は、講座が終わりましたら、当センターより送付いたします)
* 本学から会場までの往復に要する交通費をご負担いただけます。
* 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金(素泊まり料金)を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 会場の手配、必要物品(PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等)の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます(有料)。
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。ただし、申込者様による開催の記録として、写真撮影が必要な場合は、事前に講師へ直接ご相談ください。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。

2. お申し込み期間

令和6年度のお申し込みは、令和6年11月29日(金)まで受け付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

申し込みの前に、講師派遣のテーマ・内容等について、お問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページの「三重県立看護大学>地域交流センター>みかん大リクエスト講座」では、「みかん大リクエスト講座」申込書をダウンロードできます。

※希望の教員名については、可能な範囲でご記入いただきますようお願いいたします。

各教員の担当授業科目や研究課題等は、本学ホームページ「三重県立看護大学>大学案内>教員一覧>教員個人名」からご確認ください。

※尚、申し込み後2週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

【昨年度リクエストのあったテーマ】

派遣先	テーマ ※ 重複した内容のテーマについては掲載を省略しています
医療機関	フィジカルアセスメント（呼吸編・循環編）（基本編・応用編）（ラダーレベルごと）
	現場に活かすフィジカルアセスメント
	形態機能学を活かした看護実践
	認知症ケア
	拘縮の予防とケアについて
	高齢者虐待について
	関連図を書いてみよう
	看護診断を学ぼう
	ケースレポートをまとめよう
	倫理
	看護研究（ラダーレベルごとに複数回シリーズ）
	日常の看護ケアの疑問から看護研究を考える
	看護研究研修コンサルテーション
	看護研究～現場の疑問を研究へつなげよう～
	看護研究～研究デザインの選択（量的・質的それぞれの視点で）
	看護研究～研究計画書の発表～
	コーチング
	役割モデルとしての効果的な指導方法
	ファシリテーション研修
	キャリアラダー評価について
マネジメントラダーについて	
組織管理	
社会福祉 機関	個性豊かな子どもへの関わり方
	食物アレルギーの知識について
	認知症について～認知症かるとコグニサイズをとりいれて～
行政機関	子どもの家庭福祉
	子どもを理解するための基礎知識
	End of Life ケアと対応
	健康的な食生活を送るために
教育機関	思春期のこころからだ
	養護教諭に伝えたい 最新の性教育について
	学校におけるアレルギー対応
	食物アレルギーの基礎知識

三重県立看護大学地域交流センター

令和6年度 「みかん大リクエスト講座」 申込書

申込書記入日 令和6年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()	
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒	電話		
	FAX		E-mail	※必ずご記入願います	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせのみに使用し、その他の用途に使用することはありません。講座終了後は一定の期間を持って適切に破棄します。

講師派遣の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
	希望 会場名	参加予定人数		名
	会場 所在地	参加者の内訳 (例：看護師30名、 保護者30名、高校 2年生30名など)		
	希望する 教員氏名	テーマ名		
具体的内容 *別紙添付可	*その他ご希望がありましたらご記入ください。			

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大リクエスト講座」決定通知書 受付No()

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和6年 月 日

決定事項	テーマ名				
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分			
	職名 教員氏名		教員 連絡先		

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター
〒514-0116 津市夢が丘1丁目1番地1
TEL/FAX:(059) 233-5610 E-mail:rc@mcn.ac.jp

看護研究SEED



事業概要

看護研究を行うために必要な基礎的研修をシリーズで開催し、実践における「気づき」や「疑問」が看護研究に結びつくよう支援していきます。

今年度は、集合研修で5日間の開催です。
受講コースは、全5回と単回受講コースを設けています。

対象

看護の現場で看護実践を行っている方
これから看護研究に取り組もうとしている方、
もしくは現在取り組んでいる方

受講方法

- 全5回受講コース（5回全て受講する）
- 単回受講コース（1回のみ受講する）
- * 2回以上の受講をご希望の場合は、
全5回受講コースを選択して下さい

費用

- 全5回受講コース 9,372円（消費税込）
- 単回受講コース 5,973円（消費税込） / 1回

申込み方法

個人申込み
QRコードの申込みフォームに
必要事項をご入力の上
送信してください。

LINE: @mcnseeds



- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本事業の様子は、写真等で本学のホームページ等に掲載を予定しています。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

会場

〒514-0116 津市夢が丘1-1-1

申込締切
2024.5.16

看護研究SEEDプログラム

令和2年度より、従来の「看護研究の基本STEP」研修に、新規テーマ「看護研究における倫理的配慮」と「研究デザインの種類と選択」を加え、受講者が日常の看護業務の中から疑問を具出し、スムーズに看護研究へ取りくめるよう企画しています。また、看護研究研修の次のステップである「ハウツー看護研究」につながるよう「量的研究（実験・計測）」のテーマもあります。

*初日は開始5分前よりオリエンテーションがあります

回	日程	テーマ	時間	講師
1	6月4日(火)	看護研究の意義と文献の活用 文献検索と図書館の利用	10:30～12:00 13:00～14:30	学長 図書館
2	6月17日(月)	研究テーマの決め方と計画の立て方 看護研究における倫理的配慮	10:30～12:00 13:00～15:00	玉田 章 安部 彰
3	7月2日(火)	研究デザインの種類と選択 質的研究(インタビュー)	10:30～12:00 13:00～14:30	上田 貴子 関根 由紀
4	7月23日(火)	量的研究(アンケート) 量的研究(実験・計測)	10:30～12:00 13:00～14:30	小池 敏 長谷川 智之
5	8月1日(木)	研究論文作成 プレゼンテーション(演習含む)	10:30～12:00 13:00～15:00	玉田 章 灘波 浩子

研修の様子



★昨年度の受講者の声
「改めて看護とはなにかを考えることで看護師のあるべき姿(研究し続けることを含め)を再確認できた」
「テーマ選定の方法を順序立てて考えて良かったことがわかった」
「具体例を示していただけだったのでわかりやすかった」 など

詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学→地域貢献・国際交流→地域交流センター→看護研究SEED）をご参照ください。

お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：rc@mcn.ac.jp



事業概要

「看護研究エッセンス」は、看護研究に取り組む看護職が、さらなるスキルアップのために、必要な知識や手法を習得し、より質の高い研究ができるよう支援しています。

対象

- ・本センターの「看護研究SEED」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方。
- ・看護研究を指導する立場の方。
- ※ご希望の各コースを受講できます。

費用

1 コース 7,106円（消費税込）

申込み方法

QRコードの申込みフォームに必要事項をご入力の上、送信してください。



R6 看護研究エッセンス



R6 基本編



R6 応用編

申込み締切 英語論文 8月29日（木）（基本編） 9月12日（木）（応用編） 10月10日（木）

- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報情報は本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

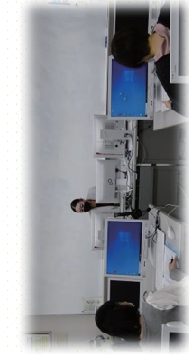
三重県立看護大学 地域交流センター

看護研究エッセンスプログラム

コース	英語論文の書き方	統計解析 (基本編)	統計解析 (応用編)
本コースの対象	・英語論文執筆に興味がある方 ・英語論文投稿先へのカバーレターやメールでのやり取りが必要な方	・統計手法をブラッシュアップしたい方 ・統計ソフト（エクセル）を使用したことがある方	・統計解析（基本編）を修了された方
日時	9月21日（土） 10:00～16:00	10月5日（土） 10:00～16:00	11月9日（土） 10:00～16:00
担当者	ドライデン いづみ	齋藤 真・長谷川 智之	齋藤 真・長谷川 智之
概要	初学者を対象に、便利な英語表現やつなぎの言葉を使って、英文のコミュニケーションを理解し、英語論文の書き方を学びます。 また、英語論文でよく用いるAPAスタイルでの参考文献の記載方法、英語論文投稿先へのカバーレターやメールの書き方も学びます。	初学者を対象に、統計の基礎から研究でよく用いる統計手法（図表の作成）について考え方と実際の使い方を学びます。 アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法（検定、χ ² 乗検定など）について考え方と実際の使い方を学びます。 基本編の知識をもとに、検定の考え方について学びます。
担当者からのコメント	英語論文は形式が整っていたり、内容の「通しるべ」となる転換語や一般化・程度表現を使用するだけでも簡単に内容が伝わりやすくなります。 英文作成練習を繰り返して英語の使い慣れをしていきましょう！	統計学について基本から学びたい方におすすめて。エクセルによるアンケート調査の解釈と統計処理の基本について学びます。	統計解析の基本編を修了された方を対象に、応用編となる統計解析手法を学びます。また、結果と考察の書き方についても学ぶ予定です。
最小催行人数	1人	5人	5人

受講者自身の研究に関する相談にもご利用ください。

研修の様子



★これまでの受講者の声

「説明が端的で分かりやすかった」「英文論文を読む・書くに対しての障壁が少し下がった」など

詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学→地域交流センター→ハウツー看護研究）をご参照ください。

お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：rc@mcn.ac.jp



M.C.N.

事業概要

看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を演習により体験し、研究の実践に活かせるよう支援します。

対象

- ・本センターの「看護研究SEED」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方
- ・看護研究を指導する立場の方
- ※ご希望の各コースを受講できます。

費用

1 コース 7コマ相当 8,239円（消費税込）

申込み方法

QRコードの申込みフォームに必要事項をご入力
のうえ、送信してください。



申込み締切

R6
インタビュー

R6
実験・計測

R6
アンケート

(インタビュー) 7月25日(木) (実験・計測) 8月8日(木) (アンケート) 10月3日(木)

- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合があります。そのため、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報（本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破壊します）。
- 本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

ハウツー看護研究プログラム

コース	日時(案)	担当者	テーマ	担当者からのコメント	最少催行人数
質的研究コース (インタビュー)	①8月6日(火) 13:00~16:10	浦野 茂 関根 由紀	インタビューによる 質的研究を行ってみる	質的研究とは、一言で言えば、対象となる人たちの実践や考え方に学ぶことです。シンプルで楽しい作業ですが、だからこそあたりに一緒に作業しながら字んでいきますよ。	2人
	②8月19日(月) 13:00~16:10				
	③8月26日(月) 10:40~16:10				
量的研究コース (実験・計測)	①9月7日(土) 10:00~16:30	高藤 真 長谷川 智之	「誤差防止のための実験検証」～身近にある課題を、実験研究で解決！～	実験研究は、高価な機器を使用しなければできないというイメージがあるかもしれませんが、本研修ではそのイメージを払拭します。「こんな簡単に実験ができるの？」と参加者全員が思えるように、身近にある課題から参加者全員で実験を作り上げていく内容ですので、ぜひ気軽に参加してください！	5人
	③9月28日(土) 10:00~16:30				
量的研究コース (アンケート)	①11月2日(土) 10:00~16:30	小池 敦 菅原 啓太	アンケートの作成や調査の実施、分析を体験してみませんか？	「アンケートを作りたいけど、どうやって作るのだろう」と思っている方もいません。アンケート作りには、ちょっととしたコツがあります。コツを知り、ゼロから一緒にアンケートを作ってみませんか。皆様のご参加をお待ちしています！	2人
	③12月1日(日) 10:00~16:30				

受講者自身の研究に関する相談にもご利用ください。

研修の様子



★これまでの受講者の声
 「基礎から深く学ぶ事ができた」
 「苦手意識がなくなり、純粋にすごく楽しかった」
 「自分の躰いているところが明確になり、とても意義ある時間だった」など

詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献>国際交流>地域交流センター>ハウツー看護研究）をご参照ください。

お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
 TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：rc@mcn.ac.jp



施設単位 看護研究支援

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループまたは個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行います。お申込みの際は、施設内のある県内医療機関等に本学教員がお伺いし支援します。状況によっては、オンラインでの支援も可能です。

この事業のねらい 三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

研究支援期間：令和6年度中（担当教員とご相談）

申込み締切：令和6年2月28日（水）

お申込み方法

QRコードよりお申し込みください。

★昨年度の利用者の声
「指導していただき、様々な考え方や研究方法を学ぶことができた」
「研究内容の目標や内容についてアドバイスをいただき方向性を導く事ができた」など

○お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
○収集した個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
○本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。

お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター

津市夢が丘1-1-1 担当：川瀬

TEL：059-233-5610（平日9時～17時）

E-mail：rc@mcn.ac.jp



研究支援の方法

1 一回につき3時間の研究支援（1回あたりの指導件数は最大6件を目安）×年4回を標準とします。研究支援期間が長期になりますので、計画的に進めていただきますようお願いいたします。支援の方法（対面支援、またはオンライン支援）、および日程は担当教員にご相談ください。

＜対面支援の場合＞

担当教員が貴施設に向かいますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。

＜オンライン支援の場合＞

担当教員にご相談ください。

支援料金について

- ・講師および対面の場合の交通費（本学から会場まで）をご負担いただきます。
- ・講師料は、年間4回（1回あたり3時間）の支援を標準として算定し、税別12万円です。なお、実際の支援時間が標準支援時間に満たない場合でも講師料は減額しませんので、ご了承ください。

ご留意いただきたいこと

- ・各研究は、各自もしくは施設にて主体的に進めてください。
- ・研究を進めるにあたり、基本的な看護研究の研修を修了した方が望ましいため、看護研究SEEDおよび看護研究エッセンス・ハブツアー看護研究の研修をご活用ください。
- ・担当教員は、特定の領域に所属しておりすべての看護領域に精通している訳ではありません。担当教員の専門領域でない研究に対しては、対応しかねる場合があります。
- ・専門的な研究支援をご希望の場合は、「みかん大リクエスト講座」をご利用ください。担当教員については、ご希望の添えない場合があります。また、本センターの取り決めにより、3年以上同じ担当教員は継続できませんのでご了承ください。
- ・会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます。（有料）
- ・会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側でお願いします。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。
- ・支援内容に研究発表会に係る審査および講師の審査は含まれません。
- ・ご希望の場合は、別事業である「看護研究発表会支援」にお申し込みください。

* 研究課題が少ない場合は、リクエスト講座を活用し研究支援を受けることも可能ですので、ご相談ください。

お申込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 表面QRコードより、本センターまでお申し込みください。
- ② 本センターから担当教員決定通知書をお送りします（4月末の送付を目標）。
- ③ 貴施設と担当教員との間で支援日程等を調整された後、研究支援開始となります。
- ④ すべての支援終了後、本学より講師料と対面の場合の交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払いください（恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

事業の詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域貢献>国際交流>地域交流センター>看護研究支援）をご参照ください。

令和6年度
三重県立看護大学地域交流センター

看護研究 発表会支援

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とした支援で、看護研究発表会における講評・審査を担当します。お申込みのあった県内医療機関等に、本学教員が出向き支援します。また、オンラインでの支援や書面での講評も可能です。

この事業のねらい 三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

支援対象： <対面支援、オンライン支援>
5題以上の研究発表がある看護研究発表会
<書面での支援の場合>
本学教員が研究支援を行っていた看護研究に限る

申込み締切：令和6年11月29日（金）
開催希望日の60日前までにお申し込みください。

お申込み方法

QRコードよりお申し込みください。

★昨年度の利用者の声

- ・「無事今日を迎えられた事感謝しています。指導の際は研究者の思いを引き出し、丁寧に伝えて頂き、わかりやすかったです。」
- ・「実践にいかせる研究発表でした」など

- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 収集した個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。

お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター

津市夢が丘1-1-1

担当：川瀬

TEL : 059-233-5610 (平日9時～17時)

E-mail : rc@mcn.ac.jp



研究支援の方法

<対面支援>

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。支援の日程は、担当教員とご相談ください。

<オンライン支援> (ZOOMの場合)

担当教員にご相談ください。

<書面での講評> (本学教員が研究支援を行っていた研究に限る)

事前に発表原稿をお送りいただき、担当教員が書面で講評し、お申込者に返信します。支援の日程は、担当教員とご相談ください。

支援料金について

*講師料は、お問い合わせください。

<対面支援>

- ・講師料および対面の場合の交通費 (本学から発表会場まで) をご負担いただきます。
- ・現地宿泊が必要な場合はお申込者側で宿泊施設をご予約ください。
- なお宿泊料金 (兼泊まり料金) は、直接宿泊施設にお支払いください。

<オンライン支援>

- ・講師料をご負担いただきます。通信にかかる費用は、お申込者のご負担となります。

<書面での講評>

- ・講師料をご負担いただきます。

ご留意いただきたいこと

<対面支援・オンライン支援>

- ・会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側をお願いします。
- なお、本学を会場としてお貸しすることもできます (有料)。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

お申込みから支援終了 (料金請求) までの流れ

- ① 表面QRコードより、本センターまでお申し込みください。
- ② 担当教員決定後、決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と打ち合わせを行ってください (お申し込み内容に大きな変更があった場合は、当センターにもご連絡ください)。
- ④ 対面支援：オンライン支援は、研究記録を、開催1週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後、本学より講師料と対面支援の場合は交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払いください (恐れ入りますが振込手数料はご負担願います)。

事業の詳細は本学ホームページ (三重県立看護大学>地域貢献・国際交流>地域交流センター>看護研究支援) をご覧ください。

三重県立看護大学 地域交流センター

令和6年度 三重県受託事業

三重県新人助産師合同研修

【研修開催にあたって】

助産師として就業して1～2年のみなさんは、日々の助産実践に試行錯誤されていることと思います。本研修は、厚生労働省策定の「新人看護職員研修ガイドライン」に示された新人助産師の到達目標に沿いながら、助産師同士の交流を通して、モチベーションを高めることを目的としています。

定員
30名程度
事前申込み

- 【対象】 → 三重県内の医療施設等にて周産期医療に携わる
就業1～2年目の助産師
- 【方法】 → 対面講義
- 【会場】 → 三重県立看護大学 (津市夢が丘1丁目1番地1)

仲間とともに、わかち合い、みがき合い、
輝く助産師になる！

テーマ

プログラム

受講料無料 コース研修全4回

日程	午前 (10:00～12:00)	午後 (13:00～16:00)
11月2日 (土) 1日目	あいさつ 研修の目標設定 三重県立看護大学 教員	母乳育児支援の基礎と実践 【講義・演習】 日本母乳の会理事、ハルモア病院 看護部長代行 井田 久留美
12月7日 (土) 2日目	周産期のメンタルヘルス 【講義・演習】 三重大学医学部附属病院 看護部長、母性看護専門看護師 森岡 かおり	母乳育児支援の基礎と実践 【講義・演習】 三重県立看護大学 教員
1月13日 (祝・月) 3日目	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 【講義】 国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内田 広臣	新人助産師のための ストレスマネジメント 【講義・演習】 三重県立看護大学 教員
2月8日 (土) 4日目	産婦人科診療ガイドラインにもとづく 緊急時の対応 【講義】 伊勢赤十字病院 部長 前川 有香	本日の振り返りと 共有 三重県立看護大学 教員

申込み方法

QRコードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。
必要事項をご入力の上、送信してください。

個人でのお申込みになります



申込み締切
2024.10.9 (水)



参加者の声

「実践で活かせること教えていただき分りやすかった」
「対象に寄り添って、傾聴していいと思った」
「母体搬送時にどのような情報が必要か、優先順位を考えるとどのよう動くのかを見直していきたい」
「他の病院で働いている方との交流の機会にもなった」 など



- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報(本研修のみに使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します)。
- 本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

詳細は本学ホームページ
(三重県立看護大学 > 地域貢献・国際交流 > 地域交流センター > 各種研修 新人
助産師研修) をご参照ください。



お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL：059-233-5610 (平日9時～17時) E-mail：rc@mcn.ac.jp

令和6年度 三重県受託事業
三重県看護職員

認知症対応力向上研修

目的

認知症の人と接する機会が多い看護職員に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴等に対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達をすることで、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を支援します。

対象

次の各号を満たす者 **三重県から修了証書が交付されます**

- ① 三重県内の医療施設等で勤務する指導的立場の看護職員
- ② 3日間の研修に全て参加できる者
- ③ 研修受講後、自施設での研修を実施・評価し、指定期日までに報告書を提出することができ、研修等詳細は研修にてお知らせします

日程

- ・ 9月 8日 (日) 10時00分～17時10分
- ・ 9月 9日 (月) 10時00分～16時40分
- ・ 9月10日 (火) 10時00分～17時40分

会場

三重県立看護大学
講義棟 1階 大講義室

定員

100名

受講料無料

★昨年度の受講者の声
「教科書で学べないことをたくさん講義で聞くことができ、職場での自分の対応やスタッフの対応を見直す必要があると感じた。」「私達の対応の重要性を感じた。」「実践の話が聞けて嬉しい。」「日頃の業務で感じるジレンマについて考える機会になった。」「質の高い看護ケアを提供するためには組織のあり方は重要だと思う。どのように組織を動かすかを考えたきっかけとなった。」「体制構築や人材育成はとても難しいと思ったが、ひとつひとつだけでも行動することが大切な一歩と学んだ。」「認知症看護に対する研修の進め方が理解できた。」など

注意事項

- ① この研修は、診療報酬の認知症ケア加算2・3の施設基準に該当する研修です。
- ② 遅刻、早退は認められませんので、ご注意ください。

カリキュラム

日程	時間	テーマ	講師	科目
9月8日 (日)	10:00~11:00 (講義60分)	意義と役割 施策・社会資源等	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授	認知症に関する 知識
	11:10~12:10 13:00~14:30 (講義150分)	認知症の病態論	山川 伸隆 いせ山川クリニック 院長	
	14:40~17:10 (講義150分)	実践対応力I 对患者 (I対1)	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授	
9月9日 (月)	10:00~11:30 (講義30分・演習60分)	実践対応力I 認知症に伴う行動・ 心理症状 (BPSD)、 せん妄	清水 律子 三重県立看護大学 老年看護学 准教授	認知症看護の 実践対応力
	12:30~15:00 (講義150分)	実践対応力II チームや連携による対応	飯下 茂樹 鈴鹿中央総合病院 社会福祉科長 社会福祉士 (医療ソーシャルワーカー) 介護支援専門員	
	15:10~16:40 (講義30分・演習60分)	実践対応力II 身体拘束	横山 智子 桑名市総合医療センター 認知症看護認定看護師	
9月10日 (火)	10:00~12:00 13:00~14:15 (講義45分・演習150分)	認知症ケア体制構築	森 治子 市立四日市病院 認知症看護認定看護師	体制構築 ・人材育成 演習時は フィシリテーター が加わります
	14:25~17:40 (講義45分・演習150分)	スタッフ育成・教育	谷口 陽子 医療法人 臨純会 武内病院 認知症看護認定看護師	

開催の様子は本学ホームページ>地域交流センター>>地域貢献・国際交流各種研修 認知症対応力向上研修) をご参照ください。

申込み方法

所属施設の申込担当者様よりお申し込みください。

二次元コードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。

必要事項をご入力の上、送信してください。

受講希望者3名以上の場合は、再度お申し込みください。

*必要事項：所属施設名・所属施設の住所・電話番号、
申込担当者名・メールアドレス、
受講者氏名 (フリガナ)、(和暦) 生年月日、職名

申込み締切 7月31日 (水)



お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。

メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合があります。

すので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。

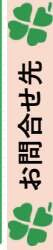
○申込締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

○お預かりした個人情報(本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破壊

します。

○本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。

○会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。



お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL：059-233-5610 (平日9時～17時) E-mail：event.rc@mcn.ac.jp



三重県立看護大学 地域交流センター

令和6年度 三重県受託事業
診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等の
看護師、歯科衛生士等の医療従事者向け
認知症対応力向上研修

目的
高齢者と日頃から接することが多い、病院勤務以外（診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等）の看護師、歯科衛生士等の医療従事者に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や認知症ケアの原則、医療と介護の連携の重要性等の知識について修得するための研修を実施することにより、認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域における認知症の人への支援体制構築の担い手となることを支援します。

対象
県内の診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等の看護師、保健師、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、診療放射線技師、栄養士等の医療従事者

三重県から修了証書が交付されます

日程
【第1回】日程：令和6年11月10日（日）
【第2回】日程：令和7年 2月 6日（木）

1回目・2回目は同内容

三重県立看護大学 講義棟 1階 大講義室

100名

- 定員**
①原則として、お申込み順にて受講を決定します。
②受講希望者が定員を超えた場合は、受講を1施設1名に調整いただくか、受講のお断りをさせていただきます。

受講料無料

カリキュラム

講師：清水 律子（三重県立看護大学 老年看護学 准教授）
事例検討：フェシリテーターが加わります

時間	形態	科目
13:00～15:00	講義	1. 基本的知識 認知症の人や家族の視点に立ち、その生活を支えるために必要な基本的な知識を習得する
		2. 地域における実践 認知症の人のQOLの向上を図るため、コミュニケーション、ケア及び多職種連携による支援の実践を理解する
		3. 社会資源等 認知症の人を取り巻く、医療・介護及び地域の社会資源の活用的重要性を理解する
15:10～16:40	事例検討とGW	テーマ：多機関連携・多職種連携で認知症の人を早期から支える

申込み方法

所属施設の申込担当者様よりお申し込みください。



二次元コードを読み込んでいただくと、申込みフォームに移動します。ご希望の回の二次元コードに必要な事項をご入力の上、送信してください。受講希望者3名以上の場合は、再度お申し込みください。

* 必要事項：所属施設名、所属施設の住所・電話番号、申込担当者名・メールアドレス、受講者氏名（フリガナ）、（和暦）生年月日、職名



申込み締切 9月26日（木）

12月20日（金）

★昨年度の受講者の声
「認知症について具体的な対応方法を学べたため、今後の介入に自信が持てる」
「認知症の方を支える仕組みを整理して学ぶことが出来た」
「多職種と問題を話し合う時間をとれたことで問題点の整理ができて、実際行う対応を検討できた」
「多職種間で様々な意見交換ができて、いろいろな視点から学べた」など



詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域交流センター>地域貢献・国際交流->各種研修 認知症対応力向上研修）をご参照ください。

- お知らせは、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 申込締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報には本研修のみ使用し、研修終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本研修の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

お問合せ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL：059-233-5610（平日9時～17時） E-mail：event.rc@mcn.ac.jp



三重県立看護大学 地域交流センター

令和6年度 三重県受託事業

母子保健体制構築アドバイザー事業

ミニ講座 & 情報交換会

(オンライン研修会)

見出された課題やニーズに沿ったミニ講座、および情報共有のための情報交換会を行うことにより、地域の課題の解決や実情に応じた体制づくり、県内の母子保健対策の充実を図る。

市町や保健所等および子ども家庭センターなどで母子保健業務、子育て支援に携わる方など、テーマに関心のある方

Zoomによるオンライン開催（ミニ講座45分、情報交換会15分）

第1回 9月20日(金)
10:00～11:00

第2回 11月 1日(金)
13:00～14:00

第3回 11月27日(水)
10:30～11:30

テーマ

こどもの「ために」から
こどもと「ともに」
～心の声を聴くアドボカシー～

講師 川瀬 信一
一般社団法人
子どもの声からはじめよう
代表理事
子ども家庭庁参与

災害時における
妊産褥婦および新生児への
対応の課題

講師 渡邊 聡子
三重県立看護大学
母性看護学 教授

子どもの声を【きく】ために
～こころがけたい
「3つだけのさく」～

講師 嘉余子
大阪公立大学
現代システム科学研究科
社会福祉学分野 教授
大阪公立大学
現代システム科学研究科
教育福祉学類 教授

目的

対象

方法

申込み方法

二次元コードを読み込んでいただくとお申込みフォームに移動します。
必要事項をご入力の上、送信してください。

参加者の把握のため、個人でのお申込みになります



9/20申込み



11/1申込み



11/27申込み

申込み締切 R6.8.28 (水)

R6.10.10 (木)

R6.11.5 (火)

- お知らせ等は、本学よりメールで送信いたします。
- メールに受信制限をかけている方は、本学からの返信メールを受信できない場合がありますので、本学ドメイン「mcn.ac.jp」を指定受信設定してください。
- 応募締切日を1週間以上過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。
- お預かりした個人情報には本講座のみに使用し、講座終了後は一定の期間をもって適切に破棄します。
- 本講座の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載する予定です。
- 事業中の写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

★昨年度の受講者の声
「自分の関わり方を見直す機会となった」
「業務内で困っていたことを教えていただいた」
「悩んでいたことについて、質問させていただき、アドバイスをいただくことができた」など

詳細は本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域貢献・国際交流＞地域交流センター＞各種事業＞母子保健体制構築アドバイザー事業）をご参照ください。

<オンライン受講の方へ> △必ずご確認ください

1. 高速インターネット回線につながったパソコン・タブレットをご用意ください。
(当日、回線やパソコンの不具合等により万が一受講ができない場合は、再度ご受講いただくことができませんので、事前にインターネットの回線速度およびパソコン等の動作検証等をお願いします。)
2. マイク・カメラ内蔵型のパソコン・タブレットまたはそれに接続可能なマイク・カメラをご用意ください。双方向のオンライン講義等を使用します。
3. お申込みいただいたアドレス (webアドレス (webアドレスに限る)) に、開催日が近くなりましたら、視聴URLと講義資料等を送ります。
4. 機能が制限される場合がありますので、差し支えなければお使いのPC等にZoomのアプリのインストールをお勧めします。

お問合せ

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：川瀬
TEL:059-233-5610 E-mail: rc@mcn.ac.jp

三重県立看護大学 地域交流センター 令和6年度 活動報告会

三重県立看護大学地域交流センターでは、
 本学の教育・研究の成果を地域社会に還元するため、地域社会との連携・協働
 および地域の皆様との交流をとおして地域貢献活動を行っています。
 地域の皆様にご参加いただき、貴重なご意見を頂戴する交流会のスタイルで開催します。

日程 3月21日(金) 10:40～12:00
 (受付10:20～)

場所 三重県立看護大学 大講義室

(住所：津市夢が丘1-1-1)

申込方法
 右の二次元コードまたは
電話・FAXのいずれか
 お申し込みの際は、
 ・お名前 (所属先)
 ・ご住所 (市町村までの記載)
 ・電話番号をお知らせください。
申込締切 2025.3.5 (水)



お申込み・お問合せ先
 三重県立看護大学 地域交流センター
 Tel : 059-233-5610 | E-mail : rc@mcn.ac.jp



発表ポスター

第一部

1) 令和6年度地域交流センター活動
 の総括

【受託事業】

- 2) 三重県新人助産師合同研修事業
- 3) 助産師 (中堅者・指導者) 研修事業
- 4) 三重県認知症対応力向上研修事業
- 5) 母子保健体制構築アドバイザー事業

【教員提案事業】

- (みえ保健・看護力向上支援事業)
- 6) 実践につなげるフィジカルアセスメント
 - 7) 障がい児の切れ目ない就学支援事業
 - 8) 医療施設に広げよう看工連携による
特許の輪(その2)
 - 9) シンクUpgradeu - 医療機関の高齢者看護
 - 10) 仲間とともに育ち合う教育実践講座

第二部

【教員提案事業】

(県民のヘルスリテラシー向上支援事業)

- 11) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援
- 12) おいなさ、みかん大ミニ講座
- 13) みかん大ヘルシーウォーキング体験会
- 14) 看護と情報リテラシー
- 15) 「認知症の人にやさしく寄り添う」
ための相談・支援

【卒業生支援事業】

- 16) みかん大 暮らしの保健室
- 17) 卒業生支援プロジェクト
- 18) 卒業生のきずなプロジェクト

【認定看護師教育】

- 19) 認定看護師教育課程「感染管理」

- 発表ポスターは都合により変更になる場合が
ありますので、予めご了承ください

昨年度の様子



地域交流センター活動の総括や教員提案事業、
 三重県受託事業、卒業生支援事業など、
 19事業について意見交換が活発に行われました。
 参加者からは
 「様々な活動の内容や結果を知ることができた」、
 「受託事業等、理解が深まった」などの声を
 いただきました。
 報告会は、本学の地域貢献活動を地域の方に知って
 いただく重要な機会です。ぜひご参加ください

開権の様子は本学ホームページ (三重県立看護大学>地域貢献>国際交流>地域交流センター>広報>活動報告
 会) をご参照ください。

留意事項

- ◆ 車いすをご利用の場合など、特定の対応が必要な場合は、事前にお問い合わせください。
- ◆ 記載いただく個人情報、本報告会の運営にのみ使用します。
- ◆ 本報告会の様子を写真等で本学のホームページ等に記載します。
- ◆ 報告会場の写真撮影・録音・録音を禁止いたします。ご了承ください。

編集後記

令和6年度三重県立看護大学地域交流センター年報をお届けいたします。今年度は、みかん大リクエスト講座の参加者数が過去最高となるなど、当センターの企画事業はいずれも順調に進めることができました。また、教員が自ら提案して行う事業では、本学教員が独自の専門性と視点で幅広く事業を展開しました。本学は小規模の単科大学ですが、全教員が三重の地に貢献しようとする高い意識をもって事業に臨んでおります。三重県から引き続いて委託頂いている多数の研修事業についても一定の成果を得ることができ、ご期待にお応えすることができたと考えております。3年間継続してまいりました認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」は、いよいよ閉講となり54名が修了しました。現在34名が三重県内で活躍していることは心強く、今後もしっかり支援して参る所存です。県民の皆様、県内機関や県職員の皆様、本学教職員各位のご協力に深謝いたします。

今年度は、宮崎つた子教授が5年ぶりにセンター長に就任いたしました。新センター長の下、当年報に記載の事業を実施しながら、センターの新展開を見据え、事業の整理や名称変更、研究支援のあり方や方法など大小様々で多岐にわたる検討を続けてまいりました。今年度は、新たに三重中央医療センターと連携協力協定を締結し、締結機関が14病院および2市となり、今後の展開が期待されています。そこで、連携協力協定病院と本学とで行う共同研究の支援について検討を進め、協定締結14機関の看護管理者の皆様と意見を経て、令和7年度からのスタートが決まりました。今までの看護研究支援を一步進め、連携協力協定病院と本学で組織間の共同研究として認め、両方のメンバーが一緒になって進める研究を支援します。在籍している本学卒業生の参加にも期待しています。当センターは、今後も三重県の看護の質向上に繋がるよう、各種の事業や、卒業生を含む看護職者への支援などに務めて参りますので、ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

地域交流センター 副センター長 大西範和

三重県立看護大学

地域交流センター

令和6年度

Vol. 27

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1
発行年月	令和7年5月
